

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
英語科目	Freshman English (a) (CSK)	実用的コミュニケーションに必要な英語力の基礎を身につけることを目標とする。特に読解力、聴解力及び発話力の向上を重点的に行うが、語彙力、文法力の補強も行う。読解は、比較的易しい英文を素早く読み理解できるように、聴解は、自然なスピードで話す教員の説明やなじみのある話題に関する英語を理解できるように、発話は、基礎的な会話を行うことができ、簡単な内容についてディスカッションやプレゼンテーションを行うことができるようにする。	
	Freshman English (b) (CSK)	実用的コミュニケーションに必要な英語力の基礎を身につけることを目標とする。特に読解力、聴解力及び発話力の向上を重点的に行うが、語彙力、文法力の補強も行う。読解は、比較的易しい英文を素早く読み理解できるように、聴解は、自然なスピードで話す教員の説明やなじみのある話題に関する英語を理解できるように、発話は、基礎的な会話を行うことができ、簡単な内容についてディスカッションやプレゼンテーションを行うことができるようにする。	
	Sophomore English (a) (CSK)	Freshman Englishで培った基礎をもとに、さらに実用的な読解力、聴解力及び発話力の養成を目指す。読解は、次の3点ができるようにする：比較的易しい英語で書かれた70ページ程度の本を1週間で読むことができる。ネイティブスピーカー向けに書かれた易しい英文を辞書を使って読むことができる。多様なジャンルの英文を理解し、読んだ内容をもとにタスクを行うことができる。聴解は、次の2点ができるようにする：自然なスピードで話す教員の説明を理解できる。やや複雑な内容の英語を聞いて理解できる。発話は、自分で調べた事柄について英語でディスカッションやプレゼンテーションをすることができるようにする。	週2回の授業を日本人教員と英語の母語話者教員が担当。
	Sophomore English (b) (CSK)	Freshman Englishで培った基礎をもとに、さらに実用的な読解力、聴解力及び発話力の養成を目指す。読解は、次の3点ができるようにする：比較的易しい英語で書かれた70ページ程度の本を1週間で読むことができる。ネイティブスピーカー向けに書かれた易しい英文を辞書を使って読むことができる。多様なジャンルの英文を理解し、読んだ内容をもとにタスクを行うことができる。聴解は、次の2点ができるようにする：自然なスピードで話す教員の説明を理解できる。やや複雑な内容の英語を聞いて理解できる。発話は、自分で調べた事柄について英語でディスカッションやプレゼンテーションをすることができるようにする。	週2回の授業を日本人教員と英語の母語話者教員が担当。
	Advanced English (a) (CSK)	Freshman English及びSophomore Englishで培った基礎をもとに、ビジネス英語も取り入れながら、さらに実用的な読解力、聴解力及び発話力の養成を目指す。読解は、次の2点ができるようにする：ネイティブスピーカー向けに書かれた英文を辞書を使って読むことができる。多様なジャンルの英文を理解し、読んだ内容をもとにタスクを行うことができる。聴解は、次の2点ができるようにする：教員が自然なスピードで話す英語の説明を理解することができる。複雑な内容の英語を聞いて理解することができる。発話は、自分で調べた事柄と共に自分の意見も混ぜながら、英語でディスカッションやプレゼンテーションをすることができるようにする。	週3回の授業を日本人教員と英語の母語話者教員が担当。
	Advanced English (b) (CSK)	Freshman English及びSophomore Englishで培った基礎をもとに、ビジネス英語も取り入れながら、さらに実用的な読解力、聴解力及び発話力の養成を目指す。読解は、次の2点ができるようにする：ネイティブスピーカー向けに書かれた英文を辞書を使って読むことができる。多様なジャンルの英文を理解し、読んだ内容をもとにタスクを行うことができる。聴解は、次の2点ができるようにする：教員が自然なスピードで話す英語の説明を理解することができる。複雑な内容の英語を聞いて理解することができる。発話は、自分で調べた事柄と共に自分の意見も混ぜながら、英語でディスカッションやプレゼンテーションをすることができるようにする。	週3回の授業を日本人教員と英語の母語話者教員が担当。
	時事英語 I	世界の主要な新聞紙から、社会・文化・政治経済・情報・言語・教育・科学・環境・娯楽・スポーツ等のあらゆる分野を網羅した記事を題材に、読み、聞き、話し、書く楽しさを育みながら、多角的にそして複眼的に英語運用力を培うことを目的とする。	
	時事英語 II	政治・経済・外交・軍事・環境からスポーツに至るまで多方面の英語ニュースを理解すること、時事的な事柄や問題に関して英語でコミュニケーションを行うことの二つを学ぶ。	
Freshman English I (ML)	実用的コミュニケーションに必要な英語力の基礎を身につけることを目標とする。特に読解力、聴解力及び発話力の向上を重点的に行うが、語彙力、文法力の補強も行う。読解は、比較的易しい英文を素早く読み理解できるように、聴解は、自然なスピードで話す教員の説明やなじみのある話題に関する英語を理解できるように、発話は、基礎的な会話を行うことができ、簡単な内容についてディスカッションやプレゼンテーションを行うことができるようにする。		

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
英語科目	Freshman English II (ML)	実用的コミュニケーションに必要な英語力の基礎を身につけることを目標とする。特に読解力、聴解力及び発話力の向上を重点的に行うが、語彙力、文法力の補強も行う。読解は、比較的易しい英文を素早く読み理解できるように、聴解は、自然なスピードで話す教員の説明やなじみのある話題に関する英語を理解できるように、発話は、基礎的な会話を行うことができ、簡単な内容についてディスカッションやプレゼンテーションを行うことができるようにする。	
	Sophomore English I (ML)	Freshman Englishで培った基礎をもとに、さらに実用的な読解力、聴解力及び発話力の養成を目指す。読解は、次の3点ができるようにする：比較的易しい英語で書かれた70ページ程度の本を1週間で読むことができる。ネイティブスピーカー向けに書かれた易しい英文を辞書を使って読むことができる。多様なジャンルの英文を理解し、読んだ内容をもとにタスクを行うことができる。聴解は、次の2点ができるようにする：自然なスピードで話す教員の説明を理解できる。やや複雑な内容の英語を聞いて理解できる。発話は、自分で調べた事柄について英語でディスカッションやプレゼンテーションをすることができるようにする。	
	Sophomore English II (ML)	Freshman Englishで培った基礎をもとに、さらに実用的な読解力、聴解力及び発話力の養成を目指す。読解は、次の3点ができるようにする：比較的易しい英語で書かれた70ページ程度の本を1週間で読むことができる。ネイティブスピーカー向けに書かれた易しい英文を辞書を使って読むことができる。多様なジャンルの英文を理解し、読んだ内容をもとにタスクを行うことができる。聴解は、次の2点ができるようにする：自然なスピードで話す教員の説明を理解できる。やや複雑な内容の英語を聞いて理解できる。発話は、自分で調べた事柄について英語でディスカッションやプレゼンテーションをすることができるようにする。	
	Media English I (ML)	The Media English course develops the students' ability to understand English as used in the mass media. Coursework covers all skills, including reading, writing, speaking, and listening, and it will also develop students' group discussion skills. (仮訳) マスメディアで使われる英語を理解するための能力を身に付ける。読む・書く・話す・聞くの4技能を含むあらゆる技能を高めるとともに、グループ・ディスカッションに関する技術の向上も図る。	
	Media English II (ML)	The Media English course develops the students' ability to understand English as used in the mass media. Coursework covers all skills, including reading, writing, speaking, and listening, and it will also develop students' group discussion skills. (仮訳) マスメディアで使われる英語を理解するための能力を身に付ける。読む・書く・話す・聞くの4技能を含むあらゆる技能を高めるとともに、グループ・ディスカッションに関する技術の向上も図る。	
	英語総合講座 (ML)	This course is a survey of the grammar of modern English with an emphasis on gaining (a) an overall knowledge of English and (b) skill in the use of English grammar. The course rapidly reviews a wide range of grammar patterns, especially those that cause problems for non-native students. Much effort is spent on getting students to learn to express their ideas clearly and correctly and to use more advanced grammar patterns in their own writing and speaking. The course will be limited to 20 students. (仮訳) (a) 英語の全般的な知識及び (b) 英語文法を使用するためのスキルを習得することに重点を置き、現代英語文法を概説する。特に非ネイティブの学生にとって問題となりやすい広範囲の文法パターンを駆け足で概説する。明確かつ正確に自らの考えを表現する方法や、ライティングやスピーキングにおいて、より高度な文法パターンを使用する方法を学習するためには、多大な努力を必要とする。受講者は20名限定。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
英語科目	SALC Learning Course (ML)	This course gives students further opportunities to develop the skills needed to become effective language learners. Students individualise their learning by creating and implementing a learning plan making use of the SALC and other resources effectively. The skills that are learned in this course are relevant for studying any language. (仮訳) 効果的に語学を学ぶことのできる学習者になるために必要なスキルの身につけ方を学ぶ。SALCや他のリソースを有効活用しながら学習プランを立て、実際に学習を進めることによって、個人に見合った学習をしていく。このコースで学んだスキルはあらゆる語学を学習する際に応用できる。	
	Basic Writing I (ML)	This class focuses on improving English writing through creative genres. Students will develop their overall writing skill through various creative writing genres such as short stories, personal essays, and autobiographies. (仮訳) さまざまな創作様式を通して英語のライティングを改善することに焦点を合わせる。学生は、短編、エッセイ及び自叙伝等のさまざまなジャンルの創作文章を通じて、全般的な文章技術を身に付けることができる。	
	Basic Writing II (ML)	This class focuses on improving English writing through creative genres. Students will develop their overall writing skill through various creative writing genres such as short stories, personal essays, and autobiographies. (仮訳) さまざまな創作様式を通して英語のライティングを改善することに焦点を合わせる。学生は、短編、エッセイ及び自叙伝等のさまざまなジャンルの創作文章を通じて、全般的な文章技術を身に付けることができる。	
	Business English I (ML)	This semester will be focused on developing English language skills used in various business situations, such as using polite language, using the telephone in business settings, making appointments, expressing opinions, making job applications and participating in job interviews. (仮訳) 今学期は、礼儀正しい言葉遣いやビジネス現場での電話応対、アポイントの取り方、意見を言葉で表現すること、求人への応募や採用面接への参加等、さまざまなビジネスシーンで使われる英語の技能を身に付けることに焦点を置く。	
	Business English II (ML)	This semester will be focused on developing English language skills through working on projects that will deal with an overview of certain aspects of business, including marketing and setting up a company. (仮訳) 今学期は、マーケティングや会社の立ち上げを含む、ビジネスのある局面での概要を取り扱うプロジェクトでの共同作業を通して、英語の技能を身に付けることに焦点を置く。	
	Language Lab (ML)	The objective of this course is to learn to recognize and correct your own pronunciation errors. You will study techniques to improve your pronunciation and be exposed to various world Englishes and their accents. Learning to improve your pronunciation requires active participation, as such a large focus is placed on productive skills and student interaction. (仮訳) 本講義の目的は、自らの発音の誤りを認識し、修正することを学ぶことである。発音を改善する技術を学習し、世界のさまざまな英語やアクセントを知る。発音の改善方法を学ぶため積極的な参加が求められる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
英語科目	Oral Communication (ML)	Sometimes, even if your grammar, vocabulary, and pronunciation are fine, you can still have problems with communication. This area of language is called pragmatics, and is the focus of this course. Pragmatics deals with what is appropriate and inappropriate language for different situations, and how people actually use language to interact with other people. In other words, pragmatics is about understanding why and how people are saying something, not just what they are saying. The many examples of 'the right English at the right time' given in this course will help you to make your English sound more natural. (仮訳) 素晴らしい文法、語彙力及び発音を身に付けていても、コミュニケーションに問題を抱えることがあるだろう。この分野は語用論と呼ばれ、本講義の焦点である。語用論は異なった状況において、何を適切、不適切な言語とするか、そして人間が実際にはどのように他者と対話するために言語を使用するかといった事柄を取り扱う。言い換えれば、語用論は人間が何を言っているかということだけでなく、いかにして、どのように何かを言っているのかを理解するものである。適切なタイミングで適切な英語を使用するサンプルに触れることで、英語の発音がより自然なものとなる一助となるだろう。	
	Communicative Grammar (ML)	The course aims to encourage you to analyse and share with the class not only the grammar that you will study, but also the processes of studying/learning grammar. Learn effective study techniques from your fellow students! (仮訳) 文法を学習するだけでなく、文法を学んだり、習ったりする経過をクラスで分析したり、共有することを目的としている。クラスメートと共に効果的な学習方法を身に付けよう。	
地域言語科目	中国語総合 I (a)	中国語の音節を正しく発音でき、簡単な文が理解できるようになることを目指す。中国語は漢字を使うが、書き方も意味も日本語と似ているようで完全には同じでないものが多い。この事実謙虚に向き合い、単語の音と意味と形をひたすら繰り返し頭に入れることから短文の暗記に移行し、ある状況下で起こる対話の学習を通して、中国語の文法を身につけていく。なお、授業は日本人教師2名と中国人教師1名の3名で行う。	
	中国語総合 I (b)	初級で学んだ語彙や文法事項の復習を繰り返しながら、準中級レベルの語彙、文法事項を習得する。また、難しい発音、声調の違いに注意しながら会話文を練習し、実際の会話に応用できるようにする。さらに、読解力をつけるために、会話文に関連した内容の短文も読んでいきたい。	
	中国語作文 I (a)	我々日本人が中国語の構文を理解するためには、まず中国語の文法をしっかり把握しなければならない。この授業では、例題によって基本的な文法を学び、その知識をもとに練習で中国語作文を行い、中国語の構文理解を深めるようにする。発音練習も重視するが、繰り返し筆記練習もし、口と手を動かして中国語の構文を覚えるようにしたい。	
	中国語作文 I (b)	我々日本人が中国語の構文を理解するためには、まず中国語の文法をしっかり把握しなければならない。この授業では例題によって基本的な文法を学び、その知識をもとに練習で中国語作文を行い、中国語の構文理解を深めるようにする。発音練習も重視するが、繰り返し筆記練習もし、口と手を動かして中国語の構文を覚えるようにしたい。	
	中国語会話 I (a)	中国語を使って実際にコミュニケーションができるようになる基礎能力を身につけることを目標とする。最初は中国語の発音に重点を置き、ピンインの学習をする。授業中、耳を通して中国語の発音を聞き、口で発音し、会話文を暗誦する。基本的な表現を繰り返し練習することによって、無理なく中国語の発音や基本文法を身につけ、簡単な会話ができるようにする。中国語を使って会話の楽しみを感じてから、さらに学生の学習進度、知識欲に合わせて徐々に高いレベルの練習を加えることとする。	
	中国語会話 I (b)	中国語を使って実際にコミュニケーションができるようになる基礎能力を身につけることを目標とする。最初は中国語の発音に重点を置き、ピンインの学習をする。授業中、耳を通して中国語の発音を聞き、口で発音し、会話文を暗誦する。基本的な表現を繰り返し練習することによって、無理なく中国語の発音や基本文法を身につけ、簡単な会話ができるようにする。中国語を使って会話の楽しみを感じてから、さらに学生の学習進度、知識欲に合わせて徐々に高いレベルの練習を加えることとする。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
地域言語科目	中国語総合Ⅱ-1(a)	一年次に学習した中国語の基礎を土台に、発音及び聴解力に磨きをかけ、さらにまとまった内容の文章の読解を通して多くの文法事項を学習し、中国語の運用能力を高めることを目標とする。はじめは一年次の教科書を引き続き使用し、その後はHSK対策教材を用い、講読と語法に分かれて授業を行う。	
	中国語総合Ⅱ-1(b)	前期に引き続き、中国語の運用能力をより高めることを目標とする。HSK対策教材を用い、講読と語法に分かれて授業を行う。	
	中国語総合Ⅱ-2(a)	一年次に学習した中国語の基礎をもとに、暗誦や作文等の練習を通じてさらに中国語の構文理解を深め、中国語のレベルアップを目指したい。履修者には専用のノートの作成を求める。	
	中国語総合Ⅱ-2(b)	一年次に学習した中国語の基礎をもとに、暗誦や作文等の練習を通じてさらに中国語の構文理解を深め、中国語のレベルアップを目指したい。履修者には専用のノートの作成を求める。	
	中国語作文Ⅱ(a)	2年生を対象とし、中国語の作文能力を身につけ、さらに文章力を高めることを目標とする。具体的な方法は、日本語を中国語に訳す練習を通して補語の用法・特殊文型等の基本文法を復習しながら、文型と語彙の定着と応用を目指す。	
	中国語作文Ⅱ(b)	2年生を対象とし、中国語の作文能力を身につけ、さらに文章力を高めることを目標とする。具体的な方法は、日本語を中国語に訳す練習を通して補語の用法・特殊文型等の基本文法を復習しながら、文型と語彙の定着と応用を目指す。	
	中国語会話Ⅱ(a)	「中国語会話Ⅰ」で習得した発音と会話を基礎としてしっかり定着させ、さらに実践向きの会話力を養成することを目的とする。さまざまな場面の日常会話の学習を通して、語彙を増やし、基本文型の範囲を広げ、会話の表現力と応用力を高める。併せて、中国の文化やそこに暮らす人々の生活ぶり、ものの考え方への理解を深める。	
	中国語会話Ⅱ(b)	「中国語会話Ⅱ(a)」で習得した発音と会話を基礎としてしっかり定着させ、さらに実践向きの会話力を養成することを目的とする。さまざまな場面の日常会話の学習を通して、語彙を増やし、基本文型の範囲を広げ、会話の表現力と応用力を高める。併せて中国の文化やそこに暮らす人々の生活ぶり、ものの考え方への理解を深める。	
	LL中国語(a)	集中的なリスニングの訓練により、実践的な中国語の聴解力を養成することを目的とする。中国語を繰り返し聞くことで、中国語特有の音声、イントネーション及びリズム等に耳に慣らし、中国語を聞き取りながら内容を理解していく訓練を行う。使用教材を通して中国語の聴解能力を高めるだけでなく、中国の文化について学ぶことも目的の一つである。	
	LL中国語(b)	集中的なリスニングの訓練により、実践的な中国語の聴解力を養成することを目的とする。中国語を繰り返し聞くことで、中国語特有の音声、イントネーション及びリズム等に耳に慣らし、中国語を聞き取りながら内容を理解していく訓練を行う。使用教材を通して中国語の聴解能力を高めるだけでなく、中国の文化について学ぶことも目的の一つである。	
	中国文学講読Ⅰ(a)	最近中国で人気となったテレビ・ドラマのノベライゼーションを読んでいく。この分野は実際の口語に近いという面白さがある反面、辞書に載っていないような表現も多く、実は意味やニュアンスを捉えるのが非常に難しい部分を持つ作品群でもある。映像も適宜参照しながら進み、また講読の際に必要な辞書やパソコンの利用法についても学んでいく。	
	中国文学講読Ⅰ(b)	最近中国で人気となったテレビ・ドラマのノベライゼーションを読んでいく。この分野は実際の口語に近いという面白さがある反面、辞書に載っていないような表現も多く、実は意味やニュアンスを捉えるのが非常に難しい部分を持つ作品群でもある。映像も適宜参照しながら進み、また講読の際に必要な辞書やパソコンの利用法についても学んでいく。	
	中国文学講読Ⅱ(a)	文学作品の講読を通じ、文の構造を正しく理解し、正確に読み取る力を身につけること、自然な日本語に訳せるようになること、また、著名な作家の名文を通して、翻訳では味わうことのできない原文の持つ魅力を体感することを目的とする。語彙の強化、語法の確認はもちろん、日本語を介さずに中国語を中国語として理解するために、音読を重視した授業を行う。	
	中国文学講読Ⅱ(b)	文学作品の講読を通じ、文の構造を正しく理解し、正確に読み取る力を身につけること、自然な日本語に訳せるようになること、また、著名な作家の名文を通して、翻訳では味わうことのできない原文の持つ魅力を体感することを目的とする。語彙の強化、語法の確認はもちろん、日本語を介さずに中国語を中国語として理解するために、音読を重視した授業を行う。	
	時事中国語Ⅰ(a)	新聞・評論・論説文を教材とし、文学とは異なる単語・文体に慣れるように練習する。授業はまず単語を覚えてもらい、次に教材のディクテーションを行ない、教材の精読と速読練習をする。最後に短文のディクテーションを行う。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
地域言語科目	時事中国語Ⅰ(b)	新聞・評論・論説文を教材とし、文学とは異なる単語・文体に慣れるように練習する。授業はまず単語を覚えてもらい、次に教材のディクテーションを行ない、教材の精読と速読練習をする。最後に短文のディクテーションを行う。	
	時事中国語Ⅱ(a)	中国語の新聞・雑誌に掲載された記事や発表された文献を読む。目的は次の3つ。①1、2年で培った中国語の基礎的学力を中国の新聞や雑誌が読める水準まで引き上げる。文法力、語彙力及び読解力のアップを目指す。②読んだ内容を聞き取れるように、適宜ディクテーションの練習も入れていく。③中国語が読めないと感じることが出来ない中国社会の情報や生きた現実を知る。「訳せること」と「理解すること」は同じではない。社会の仕組みや政治との関わり等、「理解する」ための知識も確認していく。	
	時事中国語Ⅱ(b)	中国語の新聞・雑誌に掲載された記事や発表された文献を読む。目的は次の3つ。①1、2年で培った中国語の基礎的学力を中国の新聞や雑誌が読める水準まで引き上げる。文法力、語彙力及び読解力のアップを目指す。②読んだ内容を聞き取れるように、適宜ディクテーションの練習も入れていく。③中国語が読めないと感じることが出来ない中国社会の情報や生きた現実を知る。「訳せること」と「理解すること」は同じではない。社会の仕組みや政治との関わり等、「理解する」ための知識も確認していく。	
	中国語翻訳法Ⅰ(a)	日本語の文章を「中国語らしい中国語」に翻訳するための基礎力を養成することを目標とする。講義は、日文中訳の形式で行う。こうした実践的な作業を通じて、中国語の表現方法を習得する。	
	中国語翻訳法Ⅰ(b)	日本語の文章を「中国語らしい中国語」に翻訳するための基礎力を養成することを目標とする。講義は、日文中訳の形式で行う。こうした実践的な作業を通じて、中国語の表現方法を習得する。	
	中国語翻訳法Ⅱ(a)	さまざまな文体の中国語に触れ、各文体に固有の様式・語彙についての理解を深めながら、それらを自然な日本語に訳す力を身につけることを目的とする。授業は各自が用意した訳例を持ち寄り、その発表・検討を通して進めていく。言葉はそれを用いる人々の思考法やそれが用いられる社会の文化を反映する。故にある言葉を別の言葉に置き換えることは、語彙や文法を正確に把握すること以上の作業となる。翻訳を通して、中国語、日本語それぞれの物の捉え方の特徴についても考える機会を持ちたい。	
	中国語翻訳法Ⅱ(b)	さまざまな文体の中国語に触れ、各文体に固有の様式・語彙についての理解を深めながら、それらを自然な日本語に訳す力を身につけることを目的とする。授業は各自が用意した訳例を持ち寄り、その発表・検討を通して進めていく。言葉はそれを用いる人々の思考法やそれが用いられる社会の文化を反映する。故にある言葉を別の言葉に置き換えることは、語彙や文法を正確に把握すること以上の作業となる。翻訳を通して、中国語、日本語それぞれの物の捉え方の特徴についても考える機会を持ちたい。	
	中国語討論・スピーチⅠ(a)	中国語の口頭表現力を向上させ、ある話題について自分の考えや意見等を述べる能力を身につけることを目標とする。身近な話題や皆が関心を持っている話題を取り上げ、発表・質疑応答・討論等さまざまな方式を通じてより豊かで確かな表現力をマスターする。	
	中国語討論・スピーチⅠ(b)	中国語の口頭表現力を向上させ、ある話題について自分の考えや意見等を述べる能力を身につけることを目標とする。身近な話題や皆が関心を持っている話題を取り上げ、発表・質疑応答・討論等さまざまな方式を通じてより豊かで確かな表現力をマスターする。	
	中国語討論・スピーチⅡ(a)	コミュニケーション力及び口頭表現力の一層の向上を図る。ビデオ等音声の教材を取り入れ、実際中国で話題になっていることについて、皆で討論していく。あらかじめ考えたものを発表するより、その場で自分の意見が言えるようにするためのトレーニングを多く行っていきたい。	
	中国語討論・スピーチⅡ(b)	コミュニケーション力及び口頭表現力の一層の向上を図る。ビデオ等音声の教材を取り入れ、実際中国で話題になっていることについて、皆で討論していく。あらかじめ考えたものを発表するより、その場で自分の意見が言えるようにするためのトレーニングを多く行っていきたい。	
	中国語表現法Ⅰ(a)	今現在、中国の社会で起きている事や、生活習慣の違い、はやっている言葉等、多くの学生が関心を持っていることを取り上げる。毎回一つのテーマを決め、文章を作り、皆の前で発表する形で講義を進めていく。授業に積極的に参加することを通じ、豊かな中国語表現を身につける。レベルに合わせ、2、3週間におよそ1つのテーマで進めて行く予定。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
地域言語科目	中国語表現法Ⅰ (b)	前期の内容に引き続き、中国の社会でその時に起きている事や、生活習慣の違い、はやっている言葉等、多くの学生が関心を持っていることを取り上げる。毎回一つのテーマを決め、文章を作り、皆の前で発表する形で、講義を進めていく。授業に積極的に参加することを通じ、豊かな中国語表現を身につける。レベルに合わせ、2、3週間におよそ1つのテーマで進めていく予定。	
	中国語表現法Ⅱ (a)	基礎文法の知識を整理し、発展させ、より高度な中国語表現力を養うことを目標とする。日本語の短文を中国語に翻訳しながら、基礎文法の復習・整理と複文の表現力を養うことを目標とする。	
	中国語表現法Ⅱ (b)	基礎文法の知識を整理し、発展させ、より高度な中国語表現力を養うことを目標とする。日本語の短文を中国語に翻訳しながら、基礎文法の復習・整理と複文の表現力を養うことを目標とする。	
	韓国語基礎Ⅰ	5月中旬までは韓国語の文字と発音の基礎を集中的に学ぶ。その後、文法を中心に学ぶ授業を週2回、作文を中心に学ぶ授業を週1回、会話を中心に学ぶ授業を週3回、という構成で行なっていく。このうち、文法と作文の授業は日本人教員が担当し、文法に関する体系的な知識の修得を行う。また、会話の授業は韓国語の母語話者が担当し、個々の音、語、文の各レベルでの聴取力・発話力が体得できるように徹底的に練習する。さらに、約850語の単語テストを第1次重要単語として6月上旬から実施する。	
	韓国語基礎Ⅱ	正格及び変格用言の語基活用に慣れる。「韓国語基礎」の前期のテキストを継続して使用する。「韓国語初級読本」も活用する。	
	韓国語基礎Ⅲ	自分の力で読んだり書いたりしてみる。講義の授業を週3回、作文の授業を週1回、会話の授業を週2回という構成で行っていく。講義の授業は、語学的に多彩な文章を読むもの、論説文を読むもの、時事的・文化的な内容の文章を読むものに分かれる。それぞれの授業の目標をよく理解して授業に臨みたい。なお、講義の授業では、「朝鮮漢字音」についての講義も行う予定である。作文の授業では、さまざまな分析的形式、用言語尾等に焦点を当てつつ、発話場面が設定された会話体の作文練習を行う。会話の授業では、基本的な文法事項を用いた会話が自由にできるような能力をつけることを目標とする。また、1年次に引き続いて第2次単語テスト（1,460語）を行い、途中から第3次単語テスト（1,300語）も実施する。	
	韓国語基礎Ⅳ	さまざまな文体に対応できるようにする。前期の韓国語基礎の内容を高度化させながら行っていく。韓国語の中級レベルの完成期である。さらに高度な言語運用能力の修得を目指した努力が求められる。	
	韓国語口頭表現Ⅰ	口頭での表現能力を習得することを目標とする。授業はすべて韓国語で進行する。会話の習得を行うと同時に、テーマに対する各自の考え方やテーマに基づいて書いた作文等を授業で実際に発表してみることを通じて、口頭での表現能力を高めていきたい。	
	韓国語口頭表現Ⅱ	「韓国語口頭表現」の内容を引き継ぎ、さらに発展させつつ、一定のテーマを基に韓国語によるプレゼンテーションやディスカッションを行う等、韓国語の口頭表現能力を高めたい。能動的、積極的な参与が望まれる。	
	韓日通訳法	韓国語の発話から日本語へ通訳する際の基礎力を養成する。「正確に伝える」という視点に立ち、まず発言語となる韓国語の発話内容の正確な理解に重点を置く。テキストや音素材（時事、インタビュー資料、会議資料）等から韓国語文の正確な理解・聞き取りの力を強化するトレーニングをする。同時に韓国語の表現力・語彙力の強化も狙う。また、理解した内容をいかにふさわしく日本語で表現するかを考え、より確かに韓国語表現を習得する。さらに、予め準備された原稿を使って通訳実演をしながら、通訳者のパフォーマンス、マナー、姿勢等を体験する。	
	日韓通訳法	日本語から韓国語への通訳のトレーニング。到着言語となる韓国語での発話に慣れるとともに表現力の強化に努める。単語、短文のクイック・レスポンス、サイトラ、日本語ニュースの韓国語による説明、ニュース原稿等を使用しての韓国語アナウンスや通訳実演をしながら、通訳のパフォーマンスを習得し、同時に発音・アクセント等の練習も兼ねる。テーマに沿ったリサーチを通じ基礎知識の強化も図る。	
	韓日翻訳法	韓国の小説・シナリオとそれに対する日本語訳が出版されているものを教材として用いる。韓国語を日本語に翻訳する課題を出し、出版された日本語訳とどのような点で異なるかを発表していく形式を取る。韓国語だけでなく、日本語についても関心の高い学生の受講を望む。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
地域言語科目	日韓翻訳法	日本語で書かれた小説と、それに対して韓国語訳が出版されているものを教材として用いる。日本語から韓国語への翻訳を課題として出し、毎時間発表していく形式で授業を進める。終止形の諸形式、分析的形式、階称、語彙、年齢や性別による文体の違い等に特に注目し、日本語と韓国語の相違点を探る。	
	時事韓国語Ⅰ	新聞やテレビのニュース等から最新の韓国事情に触れ、社会的背景を理解する。また、ニュースの形式や使われる用語等に慣れ、時事により親しめるようする。インターネットの検索ツールを使って必要な知識・情報を探し、より深く正確に理解する方法に慣れる。	
	時事韓国語Ⅱ	新聞やテレビのニュース等から最新の韓国事情に触れ、社会的背景を理解する。また、ニュースの形式や使われる用語等に慣れ、時事により親しめるようする。インターネットの検索ツールを使って必要な知識・情報を探し、より深く正確に理解する方法に慣れる。	
	韓国語講読Ⅰ	韓国語の読解力を養成するのが目的である。語彙力をつけることを念頭に置きつつ、韓国語の文法的意味の細かな違いも正確に確認しながら、さまざまなジャンルの文章を読んでいく。	
	韓国語講読Ⅱ	韓国語の読解力を養成するのが目的である。語彙力をつけることを念頭に置きつつ、韓国語の文法的意味の細かな違いも正確に確認しながら、さまざまなジャンルの文章を読んでいく。	
	韓国語対話文Ⅰ	韓国語は書き言葉と話し言葉の違いが大きい言語である。本講義は、韓国の映画・ドラマの対話文を用いて、話し言葉を書き言葉に直す力、語基を用いて様々な文法形式を説明する力を身につけることを目的とする。映画・ドラマを使用して、話し言葉を聞き取る練習も行う予定。	
	韓国語対話文Ⅱ	「韓国語対話文Ⅰ」に引き続き、韓国の映画・ドラマの対話文を用いて、実際に使用される話し言葉を語基を用いて分析する。漢字語や新造語、話し言葉独特の濃音化にも注意を払う。前期同様、話し言葉を聞き取る練習も行う予定。	
	インドネシア語基礎Ⅰ	インドネシア語は、文字がアルファベットであり、音も子音と母音の組み合わせが多く発音しやすいので、初めて本格的に学ぶ学生も楽しくかつ抵抗なく授業に臨むことができる。週5回のうち2回を2名の日本人講師による文法説明と1回を簡単な文法を踏まえた上での講読、そして2回を外国人講師による会話(リスニング、スピーキング)という内容で進める。聞いているだけの授業では語学は上達しないので、講師より学生に多く発言してもらおう工夫をし、基礎Ⅰ終了時には簡単な会話ができ、インドネシア人とコミュニケーションを取れる程度までの実力がつくよう授業を進める。基礎レベルのインドネシア語では単語をしっかり覚えていけば会話がある程度できるので、特に単語の暗記に力を入れる。	
	インドネシア語基礎Ⅱ	インドネシア語基礎Ⅰで学んだ内容を基に、より広く、深く、インドネシア語を学ぶ。文法はこの基礎Ⅱですべての説明を終える。単語は日常会話で使用するもの他、雑誌等に登場する一段階上のものも覚える。会話は日常会話に楽にできる程度まで進める予定。一般の講義ばかりでなく、インドネシア音楽を聴いたり、映画を観たり、耳からもインドネシア語を学び、また、インドネシア語を通してインドネシアの生活、社会及び文化を紹介する。また、週2回は引き続き外国人講師による会話(リスニング、スピーキング)を行う。	
	インドネシア語基礎Ⅲ	インドネシア語の総合的な力を身につけることを目標とする。インドネシア語基礎ⅢのA、Dはインドネシア人講師によるディスカッション、ディベートの授業で、今まで習ってきた単語、文法を駆使しリスニング、インドネシア語による自己表現(スピーキング)を中心に授業を進める。インドネシア語基礎ⅢのBでは文法を中心に扱い、インドネシア語基礎Ⅰ及び基礎Ⅱで学んだ基礎文法知識をさらに深め、10月に行うインドネシア語劇の題材を講読し、その後インドネシア語の台本を作る。インドネシア語基礎ⅢのCではBの文法と並行し、インドネシアに関して書かれた文章を読み、語学力と共にインドネシアに関する知識も身に付ける。また、インドネシア音楽のディクテーションも行う。	
インドネシア語基礎Ⅳ	インドネシア語の要である文法の最終段階となる。学生一人一人が今までに学習してきた中で取りこぼしがないか確認し、それを授業で補充しながら各自インドネシア語文法をマスターする。授業では各学生の未修得部分を補足し、どのような文章にも対処できる力を身につけることを目標とする。インドネシア語基礎ⅣのA、Dはインドネシア語基礎ⅢのA、Dの内容をグレードアップし、インドネシア語によるプレゼンテーション、ディスカッション、ディベートの訓練を行う。インドネシア語基礎ⅣのBでは一般の文章や公文書作成等の作文を中心に授業を進める。インドネシア語基礎ⅣのCではインドネシア語基礎ⅢのCの内容を引き続き行う。		

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
地域 言語 科目	インドネシア語基礎V	インドネシア文学とその歴史を紹介し、代表的な文学作品を講読する。また、インドネシアの純文学や流行本の他に、現在話題となっている外国の本の翻訳にも触れる。初回はインドネシア文学の歴史を紹介する。2回目から7回目までは純文学を講読し、文学的表現に接する。8回目から最終回まではアガサ・クリスティの翻訳本やハリー・ポッター等を読み、原文との比較を行う。	
	インドネシア語基礎VI	インドネシア語読解の総合的訓練。新聞や雑誌記事をテキストに用いる。テキストはその都度配布する。	
	インドネシア語総合	これまでにインドネシアについて学んできた中から最も興味を持っている問題を各学生が選択し、その問題に関するインドネシア語の資料、書籍を各自が講読する。毎回その一部を全員で講読し、プレゼンテーション担当学生を中心にその問題について話し合う。インドネシア語を学びながらインドネシア事情も同時に学ぶことを目的とする。	
	ベトナム語基礎I	ベトナム語の基礎的な運用能力を高めることを目標とする。まずは声調言語という特徴を理解し、正しい発音を身につけ、聞いたり話したりするトレーニングを十分に行い、ベトナム人と簡単な会話ができるようになることを目指す。そのためには、日常生活に必要な基本単語を覚え、配布するCDを日常的に聞いてベトナム語に日頃から慣れ親しむことが必要。	
	ベトナム語基礎II	ベトナム語の基本文法及び用例を引き続き学習し、より複雑な表現ができるようにすることを目標とする。	
	ベトナム語基礎III	より高度なベトナム語の運用能力を目指す。ネイティブのベトナム語話者のリズムやスピード感に慣れ、自然なベトナム語表現方法を身につける。1週間の科目は文法、会話、読解及び作文に分かれ、1年次に学習した内容を基礎として、より複雑な表現方法を学ぶ。夏季語学研修(ホーチミン市人文社会科学大学・ハノイ大学)に備え、実践的で具体的な語学到達目標を設定してほしい。	
	ベトナム語基礎IV	より高度なベトナム語の運用能力を目指す。ネイティブのベトナム語話者のリズムやスピード感に慣れ、より引き続き、自然なベトナム語表現方法、より高度なリタラシーを身につけ、総合的な能力を習得する。実践的で具体的な語学到達目標の設定が求められる。	
	ベトナム語基礎V	2年間のベトナム語基礎レベルの上に身に付けなければならない高度な表現力の習得を目的とする。主にプレゼンテーションや作文等の力を養うことが求められる。	
	ベトナム語基礎VI	2年間のベトナム語基礎レベルの上に身に付けなければならない高度な表現力の習得を目的とする。主にプレゼンテーションや作文等の力を養うことが求められる。	
	ベトナム語総合	ベトナムの家族・ジェンダー問題を取り上げる。テーマは家族・ジェンダーに関するものであれば自由に選択できる。本講義の構成は、1) 文献読解、2) 各自の問題意識によるリサーチの実施とベトナム語によるプレゼンテーション、3) ベトナム語によるレポート作成である。まずは、ベトナム語文献を読みこなすことにより、家族・ジェンダーに関する専門語彙を習得することを目指す。次にリサーチとプレゼンテーションでは、新聞や学術雑誌そしてインターネット上の新聞・コラムで文献調査を行ったり、インタビューやアンケート調査を実施しその結果を分析することが求められる。最後にレポート作成では、プレゼンテーションに基づき自身の考え・意見をまとめる。つまり「知る(読む)・考える・表現する」といった総合的な力を養うことが目的なので、受講者一人一人の主体的な取り組みが求められる。	
	タイ語基礎I	タイ語は5つの声調と独特の文字を持つ言語である。まず、日本語には存在しないタイ語の発音を身に付け、次にタイ文字とその綴りのルール、そして基本的な文法を学ぶ。文字及び文法の基本的パターン学習と並行して、簡単なタイ語文の読み書きと会話練習を行う。	
	タイ語基礎II	前期に引き続き、さらに基本文型を学習して表現力を鍛えると同時に、場面に応じた会話表現の習熟と、まとまった長さのタイ語文の読解力向上に努める。日常生活で使う基本的な会話力を身につけ、タイの小学校の教科書が読めるレベルを目指す。	
	タイ語基礎III	会話、聞き取り、読み書き、文法等の側面からタイ語の運用能力を鍛える。状況に応じて自由に会話できる力を養い、実践的な表現と語彙の習熟を目指す。まとまった長さのタイ語文を読み、読解力を身に付ける。	
	タイ語基礎IV	前期に引き続き、四技能全ての面での応用力の向上を目指す。会話では、意見交換できる力を養う。聞き取りでは、あらすじを正しく捉える力を養う。読み書きでは、タイ語の印刷物を読む練習をし、作文練習を積み重ねることで表現力を高めていく。文法知識の拡充も並行して行う。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
地域言語科目	タイ語基礎V	In this course, Thai language used in special fields such as economic, politic, advertising, medical term, tourism etc will be introduced. Reading, writing, listening and speaking skill will be emphasized. (仮訳) 政治経済、広告、医学等、特別な分野で使われるタイ語を紹介する。読み・書き・リスニング・スピーキングの4技能のレベルアップに重点を置く。	
	タイ語基礎VI	In this course student will learn advanced Thai language. Practice is expected in various skill such as news reporting, interviewing, mini field research, and biographical writing style. (仮訳) より高いレベルのタイ語を学ぶ。ニュース・レポート、インタビュー、ミニ・フィールド・リサーチや伝記の書き方のようなさまざまな技能の演習を行う。	
	タイ語総合	タイ語の週刊誌『Matichon Weekend』の最新号に掲載された記事やコラムを読み合う。この授業の第一の目的は、タイ語の記事やコラムを精読し、内容を正確に理解して要点をつかむ力を養うこと。タイ語の読解力と日本語の表現力を同時に鍛える。第二の目的は、タイのマスメディアがタイ語で発信する最新の情報から今のタイ情勢やタイの人々の考えを知ること。受講生がお互い意見を述べ合い、議論する。毎週受講生が交代で担当者となり、読みたい記事又はコラムを選んできて、皆で読み合う。担当者は自分が選んだ記事・コラムに事前に目を通し、難しい用語がある場合は、他の受講生のためにその用語の訳を用意する。担当者がリーダーとなり、皆で読み合い、内容についてディスカッションする。	
選択外国語科目	中国語Ⅰ(a)	中国語の基礎を身に付けるための第一歩を固めることを目標とする。中国語は発音が非常に重要なので、初めの数回は母音、子音、声調の習得に特に時間をかける。それから、簡単な文を学習し、初歩的なコミュニケーションが出来るようにする。	
	中国語Ⅰ(b)	中国語Ⅰ(a)を修了した学生を対象とし、発音の習得を確認しながら、初歩的な中国語を身に付けることを目標とする。場面に応じたさまざまな簡単な文を学習し、初歩的なコミュニケーションができるようにする。	
	中国語Ⅱ(a)	中国への旅行・短期研修や日本国内での中国語母語話者との出会い・交流等において体験するであろう場面を想定した会話練習を行う。ペアやグループでのスキット作成やロール・プレイ、インフォメーション・ギャップを利用した練習等、教室内外での現実の言語使用を可能な限り反映させたコミュニケーション型に基づく言語活動の中で、基本的文法事項や常用文型が身に付くよう訓練する。また、毎回発音のワン・ポイント・レッスンをを行う。	
	中国語Ⅱ(b)	中国への旅行・短期研修や日本国内での中国語母語話者との出会い・交流等において体験するであろう場面を想定した会話練習を行う。ペアやグループでのスキット作成やロール・プレイ、インフォメーション・ギャップを利用した練習等、教室内外での現実の言語使用を可能な限り反映させたコミュニケーション型に基づく言語活動の中で、基本的文法事項や常用文型が身に付くよう訓練する。また、毎回発音のワン・ポイント・レッスンをを行う。	
	中国語Ⅲ(a)	中国語の基礎文法を習得済みの学生を対象とする。これまで把握した文法を復習しながら、より高度な聴解力、会話力及び作文力を身に付ける。また、中国語のレベルの向上を目指すと同時に中国社会、とりわけ文化生活方面の事情に対する理解も深める。	
	中国語Ⅲ(b)	中国語の基礎文法を習得済みの学生を対象とする。これまで把握した文法を復習しながら、より高度な聴解力、会話力及び作文力を身に付ける。また、中国語のレベルの向上を目指すと同時に中国社会、とりわけ文化生活方面の事情に対する理解も深める。	
	スペイン語Ⅰ(a)	スペイン語の「読み」「書き」「聴き」「話す」基礎能力を習得することを目指す。日本人講師が文法指導を担当し、ネイティブ講師が会話演習を行う。外国語上達のコツは大きくはっきりとした声で「音読」すること及び基本の反復である。また、一度に長時間勉強するよりも、毎日少しずつ続けた方が効果的である。一日のサイクルで特定の時間をスペイン語の勉強に当てることを勧める。	
	スペイン語Ⅰ(b)	前期に引き続き、スペイン語の「読み」「書き」「聴き」「話す」基礎能力を習得することを目指す。日本人講師が文法指導を担当し、ネイティブ講師が会話演習を行う。1年次は動詞の現在形を中心に学習する。外国語上達のコツは、大きくはっきりとした声で「音読」すること及び基本の反復である。また、一度に長時間勉強するよりも、毎日少しずつ続けた方が効果的である。一日のサイクルで特定の時間をスペイン語の勉強に当てることを勧める。	
	スペイン語Ⅱ(a)	「スペイン語Ⅰ」で扱った文法項目(動詞の現在形、目的語、代名詞等)の基礎を確認しつつ、過去の事柄を表現できるようになることを含めて、より幅広いスペイン語能力の獲得を目指す。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 外 国 語 科 目	スペイン語Ⅱ(b)	前期に引き続き、直説法現在形以外の時制を中心に学習する。未来の事柄を表現する時制とともに、直説法、命令法、接続法といった形にも触れていくことによって、より幅広いスペイン語能力の獲得を目指す。	
	スペイン語Ⅲ(a)	接続法・命令法を用いたコミュニケーションに焦点を当てる。接続法は多くの履修生が初めて学ぶ文法項目なので、1年間かけてじっくりと活用と用法を学習していく。併せて、直説法の復習やさまざまな構文の練習も行う。また、スペイン語検定4級、DELE入門～初級の取得を目指す。(※DELE: Diploma de Espanol como Lengua Extranjera スペイン教育省のスペイン語検定)	
	スペイン語Ⅲ(b)	接続法・命令法を用いたコミュニケーションに焦点を当てる。接続法は多くの履修生が初めて学ぶ文法項目なので、1年間かけてじっくりと活用と用法を学習していく。併せて、直説法の復習やさまざまな構文の練習も行う。また、スペイン語検定4級、DELE入門～初級の取得を目指す。(※DELE: Diploma de Espanol como Lengua Extranjera スペイン教育省のスペイン語検定)	
	韓国語Ⅰ(a)	日本語母語話者と韓国語母語話者の2名の教官が担当し、文法と会話の両面を常に反復し、習熟度を高める効果を狙う。また言語背景となる文化的な事柄にもふれるなど、厚みのある言語習得のために工夫を凝らしたい。受講者には、途中下車することなく、楽しみながら韓国語を習得してもらいたい。	
	韓国語Ⅰ(b)	韓国語Ⅰ(a)を継続し、韓国語の基礎習得を目指す。文字や発音を終えて仕組みがわかりはじめると急速に理解度が増し、記号にすぎなかった韓国語が受講者のものとなっているはずである。	
	韓国語Ⅱ(a)	韓国語の入門及び初級レベルの学習を終えた学生を対象とし、中級学習者に求められるさまざまな文法事項を学ぶ。なお、発音の変化を丁寧に学び、話す力と聞く力のアップを目指す。さらに書き取りの訓練を通じてハンゲルの書く力と読む力をしっかり身に付ける。	
	韓国語Ⅱ(b)	韓国語Ⅱ(a)を履修した学生又はそれに準ずる学習レベルの生徒を対象とし、韓国語を最大限活かした授業を目指す。簡単な日常会話ができるように、中級レベルで求められる基礎語彙と文型をしっかり身に付ける。	
	韓国語Ⅲ(a)	韓国語の表現能力を習得することを目標とする。授業はすべて韓国語で進行する。会話の習得を行うと同時に、テーマに対する各自の考え方やテーマに基づいて書いた作文等を、授業で実際に発表することを通じて、韓国語の表現能力を高める。	
	韓国語Ⅲ(b)	「韓国語Ⅲ(a)」の内容を引き継ぎ、さらに発展させつつ、韓国語の口頭表現能力を高める。能動的、積極的な参加が望まれる。	
	フランス語Ⅰ(a)	パリに住むビエールとユゴという二人の男の子が主人公で、ユゴのおばさんが住む南フランスの村まで旅をする。親友同士の二人と一緒に田舎の空気を味わいながら、フランス語でよく使われる日常会話を素材としてフランス語の基礎を学んでいく。旅の様子や、ダイアログ、エクササイズ、フランスとフランス語の文化的トピック満載の美しいDVDが付いているので、映像を見ながら楽しく継続して学んでいくことができる。	
	フランス語Ⅰ(b)	前期と同じ教科書を使用し、同じ方針で授業する。パリに住むビエールとユゴという二人の男の子が主人公で、ユゴのおばさんが住む南フランスの村まで旅をする。親友同士の二人と一緒に田舎の空気を味わいながら、フランス語でよく使われる日常会話を素材としてフランス語の基礎を学んでいく。旅の様子や、ダイアログ、エクササイズ、フランスとフランス語の文化的トピック満載の美しいDVDが付いているので、映像を見ながら楽しく継続して学んでいくことができる。	
	フランス語Ⅱ(a)	言葉の仕組みの解説だけでなく、文化事項も紹介していく。とにかく話せるようになってもらいたいので、会話やプレゼンテーション等、オーラルの練習を重視する。また、Moodleを用いた情報交換やジュネーブ大学日本語学科とのメール交換なども行い、教室で習った内容の実践も行っていく予定。フランス語だけを使用する授業も1-2回行う。恥ずかしがらず、堂々と振舞うことが求められる。「間違いを恐れず、大きな声で一気にしゃべる。」これが基本である。結果的に、フランス語圏での旅行をスムーズに行える会話能力だけでなく、1-1月のフランス語検定3級を目指す総合力を身に付ける。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 外 国 語 科 目	フランス語Ⅱ (b)	前期に続き、「使えるフランス語」の習得を目指す。言葉の仕組みの解説だけでなく、文化事項も紹介していく。とにかく話せるようになってもらいたいので、会話やプレゼンテーション等、オーラルの練習を重視する。 また、Moodleを用いた情報交換やジュネーブ大学日本語学科とのメール交換なども行い、教室で習った内容の実践も行っていく予定。フランス語だけを使用する授業も2-3回行う。恥ずかしがらず、堂々と振舞うことが求められる。「間違いを恐れず、大きな声で一気にしゃべる。」これが基本である。最終的には、フランス語検定3級レベル以上に到達できるはずである。	
	フランス語Ⅲ (a)	フランスの文化、社会、フランス人の日々の生活に関するテキストを読みながら、フランス語力をさらにアップしていく。ワインとシャンペン、フランスのマンガ・アニメブーム、エッフェル塔の120年、ハートのレストラン、フランス名物ストライキ、原発大国フランス、EUの牽引車フランス等々、さまざまなトピックを取り上げる。また、そのテーマに関する映像、映画、さらにインターネットのサイトにもアクセスし、授業を楽しく有益なものにしたい。キーワードは「楽しい!」。自分の関心や好みを大切にしながら、フランスの言語文化が持つさまざまな側面に触れ、フランス語を学ぶことを通してどのような世界にアクセスできるのかを具体的に見ていく。	
	フランス語Ⅲ (b)	フランスの文化、社会、フランス人の日々の生活に関するテキストを読みながら、フランス語力をさらにアップしていく。ワインとシャンペン、フランスのマンガ・アニメブーム、エッフェル塔の120年、ハートのレストラン、フランス名物ストライキ、原発大国フランス、EUの牽引車フランス等々、さまざまなトピックを取り上げる。また、そのテーマに関する映像、映画、さらにインターネットのサイトにもアクセスし、授業を楽しく有益なものにしたい。キーワードは「楽しい!」。自分の関心や好みを大切にしながら、フランスの言語文化が持つさまざまな側面に触れ、フランス語を学ぶことを通してどのような世界にアクセスできるのかを具体的に見ていく。	
	ドイツ語Ⅰ (a)	ドイツ語の初級文法を理解し、平易なドイツ語を読み、書き、話し、聞く力を身に付けることを目的とする。まず、文法を分かりやすく説明し、その後で対話形式の本文を読み、簡単な練習問題に取り組む。本文(和訳)と練習問題は宿題となる。11月に実施されるドイツ語検定4級合格を目指す。	
	ドイツ語Ⅰ (b)	ドイツ語の初級文法を理解し、平易なドイツ語を読み、書き、話し、聞く力を身に付けることを目的とする。まず、文法を分かりやすく説明し、その後で対話形式の本文を読み、簡単な練習問題に取り組む。本文(和訳)と練習問題は宿題となる。11月に実施されるドイツ語検定4級合格を目指す。	
	ドイツ語Ⅱ (a)	文法の復習も兼ねながら、さまざまドイツ語の表現に触れる。ドイツ語は基本的な文法をマスターすれば読むのは比較的簡単だが、もちろん読むだけではなく、語彙(これが案外重要である)を増やしながら、表現練習に多く時間を割きたい。ドイツ語検定試験の4級にまだ合格していない人は、まずこの試験にチャレンジしてもらいたい。	
	ドイツ語Ⅱ (b)	前期と同じテキストを使用しながら、さらに読解力をつける練習をする。聞き話す練習も当然ながら続けていき、できるだけ多くの例文を覚えてもらう。ドイツ語検定試験3級の合格を目指して勉強してもらいたい。	
	ドイツ語Ⅲ (a)	文章読解、対話練習、ヒアリングを通して「読む、話す、聞く」という総合的な力を養成することを目標とする。文章理解、文法説明、文法問題、作文、聞き取り、対話練習の順で進めていく。音楽、携帯電話、買い物、学業等、現代のドイツ文化・生活にかかわるさまざまな事柄をテーマとして扱う。	
	ドイツ語Ⅲ (b)	文章読解、対話練習、ヒアリングを通して「読む、話す、聞く」という総合的な力を養成することを目標とする。ドイツ語Ⅲ(a)に引き続き、同じ教科書を用いてⅢ(a)と同様の授業を進めていく。扱われるテーマは、多文化、食事、環境、博物館等。	
	ロシア語Ⅰ (a)	ロシア語Ⅰ(a)(b)では、基本的な初等文法をマスターすること及び会話を通じて日常生活で必要とされるロシア語を習得することを目標に学習を進めていく。一年でやさしい文章を読むことができ、ロシアに旅行して現地の人々と交流することのできる語学力を習得する。月曜日はスピーキング、リスニングにライティングも加えて、身体を使ってロシア語に慣れていく。水曜日はやさしい会話の他、ロシア語の道しるべである文法のポイントを教科書にそって学ぶ。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択 外国 語科 目	ロシア語Ⅰ(b)	前期でロシア語を学び始めたあなたもキリル文字を自由に読み、書けるようになって、ロシア語の骨組みにも慣れてきたところだろう。後期はちょっと骨のある文法や表現に挑んで、ロシア語の面白さを知ろう。会話の守備範囲も広げて日常生活のなかに文化的トピックスを入れていこう。ビデオでロシアの姿を紹介する。	
	ロシア語Ⅱ(a)	ロシア語Ⅰで使用した教科書『ジュー・ブイリ』の後半に沿って学習を進める。会話中心の内容だが、まとまった文章でもはじめて、訳読の力も付けていく。教科書のテーマにそって他の教材(雑誌、新聞、ビデオ等)も活用し、ロシア語とともに、ロシア人の生活や文化への理解を深める。	
	ロシア語Ⅱ(b)	今までの学習でロシアへの旅行や、ロシア人との交流に必要なミニマムな力については、さらに内容豊かな交流をするためには、文化的な知識を増やし、表現技術を磨く必要がある。ロシア語、ロシア文化の中に興味あるものを見いだすことが、学習の一番のモチベーションとなる。	
	イタリア語Ⅰ(a)	簡単な日常会話を題材として、イタリア語の初歩を学ぶ。基礎的な文法事項の学習と会話表現の練習を並行する形で進め、イタリア語の発音と文法の知識を身に付けるとともに、挨拶、自己紹介、お礼の言い方等、ごく基本的な会話ができるようにする。	
	イタリア語Ⅰ(b)	イタリア語Ⅰ(a)に引き続き、イタリア語の初歩を学ぶ。基礎的な文法の知識を確実にするとともに、過去や未来のできごとを伝える、命令する、等の表現も身に付ける。	
	イタリア語Ⅱ(a)	イタリア語Ⅰに引き続き、さらに文法を深め、聞き取りの力もつける。また、イタリア語の文章を読んだり、イタリア語で表現したりする。	
	イタリア語Ⅱ(b)	イタリア語初級文法をさらに発展させ、表現力を身に付ける。	
	イタリア語Ⅲ(a)	学生がイタリアの生活や文化を理解し、イタリア人とイタリア語でコミュニケーションがとれるようにすることを目的とする。いろいろな興味深いトピックについて、少人数グループやペアワークで会話練習やロールプレイをし、イタリア語を話すことに慣れる。また併せて中級レベルの文法も確実に身につくように学習する。	
	イタリア語Ⅲ(b)	学生がイタリアの生活や文化を理解し、イタリア人とイタリア語でコミュニケーションがとれるようにすることを目的とする。いろいろな興味深いトピックについて、少人数グループやペアワークで会話練習やロールプレイをし、イタリア語を話すことに慣れる。また併せて中級レベルの文法も確実に身につくように学習する。	
	アラビア語Ⅰ(a)	アラビア語の文字、文法、初歩の会話を学習する。初習者は、まずは字母28文字を習得する。その後徐々に発音や書き取りの練習を重ねて新しい文字に慣れた後に、初級文法を学習する。また、中東アラブ地域の文化に関わる映像・音響素材を随時紹介することで、文化への理解も深める。	
	アラビア語Ⅰ(b)	後期は人称代名詞の説明に入る。アラビア語文法で最も重要なのは動詞である。後期はこの動詞に挑戦し、完了時制と未完了時制を修得する。	
	アラビア語Ⅱ(a)	アラビア語Ⅰの発展編であり、本授業をもってアラビア語文法の学習は終了となる。アラビア語Ⅰで使用したテキストを使ってこれまで学習した内容を復習し、さらに不規則動詞と動詞派生形を学習する一方で、アラビア語の会話表現に関するテキストも用いて、会話表現の中に見られる文法事項を確認していく。なお、アラビア語文法を既に修得済みの学生が出席する場合には適宜対応する予定なので、その際には相談すること。辞書や参考書については最初の授業で紹介する。	
	アラビア語Ⅱ(b)	アラビア語を実践的に使えるようになることを目的とする。会話表現と文章読解に取り組む。衛星放送局アル=ジャズィーラを筆頭とするアラビア語メディアは世界的に注目されているので、現地の新聞やインターネットの記事、衛星放送の映像等を素材として、まずは辞書の引き方と文章の読み方を学習する。その後は児童向け絵本やアラブ圏の小学校教科書等、平易なテキストを講読する予定。	
	ポルトガル語Ⅰ(a)	最も多くのポルトガル語話者を有する国ブラジルのポルトガル語を勉強する。サッカー選手やボサノヴァの歌手をはじめ、日本でもなじみの深いブラジル人が実際に使っている言葉を身に付ける。すぐに使える会話表現、基礎文法、そしてポルトガル語圏の文化や社会について学ぶ。	
	ポルトガル語Ⅰ(b)	前期に引き続き、ブラジル・ポルトガル語の日常会話と基礎文法を学ぶ。後期の授業では、実際にブラジルでポルトガル語を使いそうな状況を想定してコミュニケーションに必要な表現を学ぶ。これまでに習った基礎文法の応用練習を中心とした授業内容となる。また、ブラジルの文化や社会について紹介したポルトガル語の文章も読んでいく予定。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択外国語科目	ポルトガル語Ⅱ(a)	ポルトガル語Ⅰを履修した学生又は同等の知識を有する学生向け。これまで学んだポルトガル語を復習しながら、ポルトガル語Ⅰで十分に学ぶことができなかった文法や表現を身に付ける。また、新聞やビデオ、音楽等も活用しながらブラジルの習慣や文化に触れる。	
	ポルトガル語Ⅱ(b)	An intensive introductory course that teaches fundamental communication skills—understanding, speaking, reading and writing—and introduces students to the cultures of the Portuguese-speaking world through textbooks exercises, readings, films and music. This course will also bring a deeper understanding of the Brazilian culture and society. (仮訳) 基本的なコミュニケーション技能(理解すること、話すこと、読むこと及び書くこと)を教え、教科書の練習、読書、映画及び音楽を通してポルトガル語を話す世界の文化を紹介する徹底的な初級コースである。本講義を受講することで、ブラジルの文化と社会性をより深く理解することができる。	
	ベトナム語Ⅰ(a)	ベトナム語専攻以外の学生でベトナム語を初めて学ぶ人を対象に、発音と綴り字の練習から始め、日常生活でよく使われる簡単な表現の習得を目指す。	
	ベトナム語Ⅰ(b)	ベトナム語Ⅰ(a)に引き続きベトナム語の基本表現を学んでいく。	
	インドネシア語Ⅰ(a)	言葉の学習を通じて受講生が東南アジア社会とりわけインドネシア社会に関心を抱くようになることを目標とする。周知のように、インドネシア語はアルファベットで表記され、発音もローマ字読みであり、文法にしてもある程度までは学習が容易であるため、単語さえしっかり覚えておけば初歩の会話はすぐに出来るようになる。半期終了時にはサバイバル・レベルのインドネシア語運用力が身につくことを目指して、楽しい雰囲気の中で授業を進めたい。インドネシアの社会事情をより深く理解してもらえよう、適宜ビデオを上映する予定。	
	インドネシア語Ⅰ(b)	言葉の学習を通じて受講生が東南アジア社会とりわけインドネシア社会に関心を抱くようになることを目標とする。周知のように、インドネシア語はアルファベットで表記され、発音もローマ字読みであり、文法にしてもある程度までは学習が容易であるため、単語さえしっかり覚えておけば初歩の会話はすぐに出来るようになる。半期終了時にはサバイバル・レベルのインドネシア語運用力が身につくことを目指して、楽しい雰囲気の中で授業を進めたい。インドネシアの社会事情をより深く理解してもらえよう、適宜ビデオを上映する予定。	
	インドネシア語Ⅱ(a)	前年度にインドネシア語を履修した学生及びインドネシア語の基礎文法を既に修得している学生を対象に、インドネシア語の運用能力をさらに養うことを目標とする。馴染みのある教材を用いて、これまで学んできた文法事項を復習すると同時に、新たな文法知識を身に付ける。また、適宜ビデオを見ることでインドネシア社会に対する理解をさらに一層深める。	
	インドネシア語Ⅱ(b)	前年度にインドネシア語を履修した学生及びインドネシア語の基礎文法を既に修得している学生を対象に、インドネシア語の運用能力をさらに養うことを目標とする。馴染みのある教材を用いて、これまで学んできた文法事項を復習すると同時に、新たな文法知識を身に付ける。また、適宜ビデオを見ることでインドネシア社会に対する理解をさらに一層深める。	
	タイ語Ⅰ(a)	タイ国やタイ語に関心のある学生を対象に、タイ語文字読み書きのルールを習得し、正しい発音でタイ文字を読むことができるように指導する。	
	タイ語Ⅰ(b)	タイ国に関心のある学生対象に、タイ語文字読み書きのルールを習得し、正しい発音でタイ文字を読むことができるように指導する。タイ文字で書かれた料理メニューや広告等を正しい発音で読み、内容を把握する。辞書を引き、語彙の意味を調べ、短文の内容を把握する。タイ国小学生の教科書を読み、文化・生活の違いについて理解する。	
基礎科目	基礎演習	これから大学で学び、研究していくための基礎を身につけることを目的とする。高校までの勉強と大学における勉強は違う。自分で調べ、考え、他者の意見も踏まえて、自分の考えを口頭および文章によって説得的に伝えていく能力が求められる。テーマの探し方、文献・情報の検索の仕方、テキストの読み方、データの処理法、プレゼンテーションの方法、レポート・論文作成の方法等の基礎を、実践的に学ぶ。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎科目	情報基礎 I	I Tの基礎力を育成する。企業へのメール、情報検索と収集、案内文の作成等のビジネスでの活用も意識した実践的な学習をする。また、情報モラル、e-mail、Internet、WordといったI Tの基礎からI Tを活用した日本語での表現力まで習得する。コンピュータを勉学に活かし、社会人に必要とされるI T能力の基礎を培うことを目標としている。インターネットを利用して、文字・音声・静止画・動画・CG等のマルチメディアを活用したWBT(Web Based Training)講座であるため、各ステップを自分のペースで自由な時間に学習でき、学内でも自宅でも受講できる。	
	情報基礎 II	I Tの基礎力と応用力の強化を目的とする。企画書やプレゼンテーション資料の作成、データ分析と報告書のまとめ方等、ビジネスでの活用も意識した実践的な学習によって、Power Point、ホームページの基礎、WordとExcelの応用を習得する。コンピュータを勉学に活かし、社会人に必要とされるI T能力の強化を目標としている。インターネットを利用して、文字・音声・静止画・動画・CG等のマルチメディアを活用したWBT(Web Based Training)講座であるため、各ステップを自分のペースで自由な時間に学習でき、学内でも自宅でも受講できる。	
	日本語表現力基礎	大学生として、やがては社会人として必要とされる、日本語表現力の基礎を身につけることを目的とする。講義の聴き方、ノートの取り方、文章の読み方、目的に応じた話し方、情報の調べ方・整理の仕方、効果的な思考法、文章の読み解き方、レポートの書き方、プレゼンテーションの仕方等、日本語の表現方法を基礎から総合的に学ぶ。日本人学生は、より正確で、幅広い日本語表現方法を学ぶことにより、その表現力をいっそう高めることができる。日本語を学ぶ留学生も同様である。インターネットを利用した講座であるため、自分のペースで自由な時間に繰り返し学習でき、学内でも自宅でも受講できる。	
	本を読む	一冊の本を読み通すことを通じて、本を読む面白さ、奥深さを体験し、読書する習慣を身につけてもらうことを企図したものである。さまざまな分野の教員が自らの専門の見地から、学生に読んでほしい本(新書等)を推薦している。本を推薦した教員は、本に書かれていることを解説するというよりも、読者自身が感動したり気づいたりしたことを、対話によって引き出し、考えを深める手助けをする。この授業を契機として、これからの読書経験を豊かなものにして欲しい。	
	歴史学 I	高校までの授業で学んだ日本史は、何年にどのような事件が起きたのか、という歴史的事実のみである。しかし、本来歴史学とは、史料をもとに考える学問である。日本古代史をテーマとして、考える日本史を講義する。日本史が暗記科目であるという意識からの脱却を目指したい。	
	歴史学 II	「近代化遺産」は、「近代遺跡」とも呼ばれ、幕末・明治以来日本が近代化していく中で形成された遺跡のことである。たとえば、東京駅丸の内口のレンガ駅舎、横浜に残るかつての船の修理施設(現在の「ドックヤードガーデン」)等である。身近な歴史的建造物を通じて歴史的なものの見方を学ぶ。本講義では西日本のものを取り上げる。	
	哲学 I	合理性と宗教性の両方がソクラテスの哲学的な活動と生き方を動機づけ方向付けているわけであるが、その弟子プラトンがしっかりとこの姿を見て学んだのである。プラトンの思想は合理性と宗教性との一つの見事な全体を成す思想となり、他者との合理的な言説のやりとりを通じて人間の魂の浄化と神的な知への上昇をめざす思想となったのである。理性と理性を超えたものとの間で何が起きているのか。この授業ではそれを考えていきたい。	
	哲学 II	前期で学んだプラトニズムの原型を基礎にしつつ、西洋の文化や思想は新たな展開を見せてくる。西洋文化の第二の原型といって差し支えないその展開とは、キリスト教の台頭である。西洋の古典古代文化は、キリスト教から見れば異教である。それにもかかわらず、キリスト教は自らの思想の基盤としてプラトニズムを利用したのであった。その結果、キリスト教文化には、プラトニズムを反映する理論的な思索や文化的なパラダイムが多く見られ、その最も特徴的な要素は主に次のキリスト教哲学者の思想に現れている。その思想の展開はプラトニズムの系譜と言って良いものである。後期はこれを辿ってみたい。	
	倫理学 I	「現代」という時代を、「日本語」や「日本文化」と関わりながら生きている我々は、これらのものによって、どのように「方向づけ」られているのだろうか。この講義では、さまざまなテーマをとりあげて、こうした「方向づけ」について考えていく。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎科目	倫理学Ⅱ	人と人が関わりあう時、言葉と言葉が交差し、これにより意味が生まれ、取り替えられたりする。言葉一つで倫理はそのありようを変えてしまう。この講義では、言葉と言葉の関わりあいによって、倫理や意味がどのように生成変化するのかを、具体的に感じとりつつ、考えていきたい。	
	宗教学Ⅰ	まず、宗教とはいかなるものを指すのか、それを理解するための手段である宗教学とはどんなものであるのかを解説する。その後で、宗教学の視点と手法を用いて、日本の宗教伝統、国家神道と天皇制、新宗教と現代の宗教問題(オウム真理教や江原啓之)について考察する。	
	宗教学Ⅱ	宗教学Ⅰで学んだ理論的な事柄を背景として、現在世界人口の半数を占めるセム系一神教の具体的な信仰形態、特徴、思想について基本的諸知識を提供する。	
	文学Ⅰ	国際化時代にあつて、異文化理解は必須の課題であろう。そのためには、さまざまな方法があろうが、世界の国々の文学作品を通して、諸国民の考え方・感じ方、つまりは「心性」を探り、併せて当該時代の「社会の在り様」を見聞するのも、一方法であろう。本授業では、「世界文学とは何か」、「どんな作品を読んだらよいか」を皮切りに、ドイツ・フランス・ロシア・英米文学等の主要文学作品(小説・戯曲等)を鑑賞・分析しながら、それぞれの国の文学の特性を探り、上述の目的にアプローチする。講義資料として、折りに触れて、DVD等映像も利用する。	
	文学Ⅱ	国際化時代にあつて、異文化理解は必須の課題であろう。そのためには、さまざまな方法があろうが、世界の国々の文学作品を通して、諸国民の考え方・感じ方、つまりは「心性」を探り、併せて当該時代の「社会の在り様」を見聞するのも、一方法であろう。本授業では、「世界文学とは何か」、「どんな作品を読んだらよいか」を皮切りに、ドイツ・フランス・ロシア・英米文学等の主要文学作品(小説・戯曲等)を鑑賞・分析しながら、それぞれの国の文学の特性を探り、上述の目的にアプローチする。講義資料として、折りに触れて、DVD等映像も利用する。以上、目的・内容は文学Ⅰと同じだが、扱う作家・作品・講義資料等は異なるので、文学Ⅰを受講した学生も引き続き受講して欲しい。	
	美術史学Ⅰ	日本を除く東洋諸地域(南アジア、東南アジア、中央アジア、東アジア)の仏教美術について概説する。各地域の仏教美術の代表的作例、世界遺産等を取りあげ、その伝播と変遷の様相について理解を深めることを目標とする。スライド、ビデオによる作品鑑賞を交えつつ講義を進める。	
	美術史学Ⅱ	日本の仏教美術について概説する。飛鳥時代から鎌倉時代までの仏像彫刻の代表的作例を取りあげ、同時代の東アジア美術の様相に言及しつつ、日本の仏教美術の展開について理解を深めることを目標とする。スライド、ビデオによる作品鑑賞を交えつつ講義を進める。	
	言語学Ⅰ	人間の「ことば」について考える入門の授業である。その機能と構造はもちろんのこと、人間の認知能力とのかかわりや、社会、文化といった言語外との関係をも視野に入れた広い立場から考察していく。ただし、あくまでも身近な具体的事例を分析することを重んじる。すべての事柄をまんべんなく取り上げるのではなく、いくつかのトピックを取り上げる方式で授業を進める。ことばの研究がふつうに考えられているより広い地平へと通じていることを知ることもこの授業の目標の一つである。	
	言語学Ⅱ	「ことばの意味」について考える入門の授業である。ことばの意味とは何か、ことばの意味の構造はどのようになっているかを、あくまでも身近な具体的事例を分析しながら考えていく。人間の認知能力との関わりや、社会、文化といった言語外との関係をも視野に入れた広い立場から考察していきたいと思う。すべての事柄をまんべんなく取り上げるのではなく、いくつかのトピックを取り上げる方式で授業を進める。ことばの研究がふつうに考えられているより広い地平へと通じていることを知ることもこの授業の目標の一つである。	
	社会学Ⅰ	社会学が扱うのは「社会＝人と人との関わり」で、家族、教育、労働、宗教、経済、政治、犯罪等、私たちを取りまく身近な環境にあるものすべてである。社会学は、このような人間に関する現象や人間生活のしくみ(制度)を観察し、分析し、理解することによって、現代がどのような社会なのかを明らかにしようとする学問である。日常の身近な例を取り上げ、個人のパーソナリティや社会的行為に注目する「個人から社会へのアプローチ」と個人間の「相互作用から社会へのアプローチ」から社会のしくみを読み解き、社会的な思考や考え方を学んでいく。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎科目	社会学Ⅱ	社会学が扱うのは「社会=人と人との関わり」で、家族、教育、労働、宗教、経済、政治、犯罪等、私たちを取りまく身近な環境にあるものすべてである。社会学は、このような人間に関する現象や人間生活のしくみ(制度)を観察し、分析し、理解することによって、現代がどのような社会なのかを明らかにしようとする学問である。自分の身の回りからより広い社会へと視野を広げ、背景にある社会構造の視点(社会から個人へのアプローチ)から現代社会のさまざまな現象や社会問題(例えば、学校教育、宗教、少子高齢化、グローバル化、格差の拡大、不平等化等)について考えていく。	
	法学Ⅰ	法学の基本的な知識を得ることを目的とする。法学とは実際に社会で通用している「法律」を対象とする学問なので、社会に対して目を向け、そこから敏感に何かを感じ取るという姿勢が大切になる。そこで、本講義においては、具体的な模擬的事案を用いて、その事案の中に存在する法について学んでいくという手法を採る。進行状況によっては、テキスト内容とは別に時事的問題について取り上げることもある。	
	法学Ⅱ	法学の基本的な知識を前提にして特に「判例」に着目して勉強を進める。判例には、裁判所に持ち込まれた争いを法律を用いて解決した際に下された判断について、結論に行き着いた理由や考え方が書かれている。そのため、判例は法と社会の関係や法についての考え方を学ぶ絶好の教材でもある。判例を通じてさまざまな法の基本原理を学びとっていく。	
	経済学Ⅰ	国内総生産(GDP)のしくみとその決定メカニズム、経済成長と景気循環、生産と消費、物価とインフレーション、対外経済取引と国際収支・為替レート、財政と金融政策等、マクロ経済学の基本的な概念、分析手段等について解説する。経済学的な考え方を身につけ、現実の経済を見る目を養うことにより、新聞等で目にする機会の多い景気の動きや経済政策の解説記事等を十分に理解できるようになることを目標にする。	
	経済学Ⅱ	経済理論や経済政策の歴史の変遷、需要と効用、企業と生産、消費者余剰と生産者余剰、市場と価格メカニズム、競争と独占、外部経済と外部不経済(公共財の理論)等ミクロ経済学の基本的な概念、主な学説の基本内容等について解説する。経済学的な考え方を身につけ、現実の経済を見る目を養うことを目的とし、規制緩和の意味や、経済と環境のかかわり等についても理解できるようになることを目標にする。	
	心理学Ⅰ	大学生という時間的にゆとりのある“モラトリアム”の時期には、自己理解を深め、将来に向けた自己成長のために心理学を学習することは意義深い。本講義では、主に1・2年生を対象とし、心理学の入門として、心理学の諸種テストを体験することにより、個人の自己理解・自己洞察を深めることを目標とする。講義形式は、テキスト各章のテーマに基づき、恋愛や職業選択等の身近な題目について、各種心理テストを体験し、それについての解説を行う。また、講義内容を補足したプリントを利用し、課題に対する小グループ討論も行う。受講者が内省的に自己理解を深めていく過程が大切であるので、期間中、適時3回、講義終了20分前に課題に対する「感想レポート」を作成する。	
	心理学Ⅱ	本講義の受講者の大多数は、将に“若者”(青年期)の最中にあり、卒業後、社会人としての人生生活を前にした基盤となる重要な時期を迎えている。大学生は、4年間という一種“モラトリアム”の中で、自分自身のアイデンティティを形成していくことである。しかし、この青年期は、さまざまな社会的な影響を受け、ストレスや悩みさらされる時期であり、精神的な疾患が顕著になってくる時期でもある。本講義は、同世代によくみられる心理的特質及び精神的な問題について理解を深めることを目標とする。その結果、自分自身の確固たるアイデンティティ形成に役立て、さらに、他人への支援にも役立てることを期待する。	
	教育学	我が国の学校教育制度の現状及び近年の改革動向を把握することを目的とする。義務教育学校では頻りに学級崩壊やいじめが話題となり、不登校児童生徒の出現率や高等学校での中途退学者の発生率は低下せず、子ども達の学校教育への不応が顕著となっている。大学は全入時代を迎えて伝統的な高等教育が揺らぎ、新しい方向を模索している。各々の学校の教育目的や内容、達成されるべき学力、教員の指導力がこれほど論議され、さまざまな角度から検討されて、改革に次ぐ改革が繰り返されている時代は今を待たないだろう。こういった状況を踏まえ、各国の教育制度も比較しながら、望ましい教育制度とはどうあるべきなのかを探っていきたい。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎科目	経営学Ⅰ	経営学の主たる研究領域を構成する組織論と戦略論のうち、組織論に関する入門的講義を行う。組織論は、さらにマクロ組織論(狭義の組織論)とミクロ組織論(組織行動論)に大別できるが、講義の順序としては、まずマクロ組織論を取り上げ、次いでミクロ組織論に言及する。	
	経営学Ⅱ	経営学の2つの研究領域である組織論と戦略論のうち、経営学Ⅰの組織論の続編として、経営学Ⅱでは戦略論について講義する。ただし、組織論と戦略論はほぼ独立した分野であるから、組織論の知識がなくとも、戦略論の受講には支障はないはずである。	
	統計学Ⅰ	データ解析の実践を主目的とし、現実の統計データの記述に関する基本事項から出発し、データ解析の基本と考えられる回帰分析までを講義する。実践演習を多く取り入れた授業内容であり、必要上、パソコンを用いた授業となるが、パソコン初心者者を考慮した授業を心がける。パソコンの初心者には情報基礎を併せて履修することが望ましい。	
	統計学Ⅱ	前期の統計学Ⅰで学んだ回帰分析を基礎として、主成分分析、因子分析、判別分析、クラスター分析等々の多変量解析を中心とした講義を行う。授業は統計解析の実践演習を主として行う。統計データ処理に興味を持つ人にとって、統計解析の醍醐味を満喫することができる授業内容である。統計解析ソフトとして、SPSSを使用するが、随時、Excel等の表計算ソフトも併用していく。	
	生物学Ⅰ	人体各組織の構造と機能について、次いで細胞の構造と機能、特にエネルギー獲得方法と細胞の運動について理解を深める。生物学Ⅱも合わせて履修することが望ましいが、必須ではない。途中で数度小テストを課し、自己採点により理解を深める。講義時間外に、目黒寄生虫館と国立科学博物館自然教育園の見学により、生物相互の関係について体験的に学ぶ。	
	生物学Ⅱ	生物が生まれ出る時に何が起きているか、卵・精子形成について学び、生物を構成する設計図、遺伝子とその働きについて、遺伝子発現までのストーリーを交えつつ勉強する。遺伝子解析により急速に進みつつある生物分類体系(=進化)についても理解を深め、我々生物の歴史を概観する。そして我々動物の体内で常に起きている情報伝達・防御反応についても学ぶ。生物学Ⅰ(前期)を履修していることが望ましいが、必須ではない。途中で数度小テストを課し、自己採点により理解を深める。講義時間外に、国立科学博物館自然教育園の見学により、生物相互の関係について体験的に学ぶ。	
	化学Ⅰ	化学という学問を一口で表すと、「物質を扱う学問」と言える。生きていく上に必需である、空気、水、食物等々全て物質である。すなわち、物質は私達の身の回りに在る全てのものである。だから、化学はとても身近なじみやすい学問だ。化学を知ると日常生活にも役に立つし、いろんなことに興味がわいてくる。そこで、化学に興味を持ってもらえるように、基礎的な事柄を易しく講義する。	
	化学Ⅱ	化学という学問を一口で表すと、「物質を扱う学問」と言える。生きていく上に必需である、空気、水、食物等々全て物質である。すなわち、物質は私達の身の回りに在る全てのものである。だから、化学はとても身近なじみやすい学問だ。化学を知ると日常生活にも役に立つし、いろんなことに興味がわいてくる。そこで、化学に興味を持ってもらえるように、基礎的な事柄を易しく講義する。	
	物理学Ⅰ	ミクロとマクロをテーマに19世紀までの近代物理学を文系的視点と生活者の立場で学び、生きる力を身につける。難しい数式を使わずに身近な事柄を通して自然科学を学び、論理的洞察などの科学的思考力を養い、非言語能力(図や記号、数字を読み解く力)としての数学のセンスも磨く。身に付けたことは就職でのSPI対策や留学のTOEFL対策にもなるのはもちろんのこと、自然を見る目が変わり、世界が今までと違って見えてくる。	
	物理学Ⅱ	時間と空間と確率をテーマに20世紀に明らかになった現代物理学を難しい数学を使わずに文系的視点から学ぶ。SPI対策や留学のTOEFL対策になることはもちろんのこと、時間と空間の科学は私たちの世界観を豊かにし、偶然に支配され観測にも依存する物質たちの挙動を知ると、物質にも生命の源を見いだすであろう。時間とは何だろうか?人の運命は決まっているのか?エネルギーって一体何だろうか?生命とは?授業の中で今まで知らなかった新しい発見がある。	
自然科学概論Ⅰ	人類はおおよそ200万年前から、宇宙や地球の自然現象と闘いながら、これを理解し、利用する中で、今日の科学・技術文明を築きあげてきた。さまざまな発明発見は、人類の生活と自然観を変革した知的遺産である。科学・技術の本質とは何か。とかく、文科系の学問には遠ざけられがちな科学・技術を人間、社会との相補的發展から、その本質に迫りたい。自然科学に対する新しい視点となろう。		

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎科目	自然科学概論Ⅱ	今日の生活が、科学・技術の恩恵なしには考えられないことは、誰もが認めることだが、一方で、ますますそのあり方が問われている状況である。産業革命期以降の急速な科学・技術の発展を分析する中で、人類と自然との真の共存とは何かに対する展望、突破口を見出したい。	
	体育・スポーツ	( 5 富松 京一) テニス、カヌー&キャンプ、オリエンテーリング&登山 ( 67 市瀬 良行) フットサル、卓球、フライングディスク、フィットネス、マウンテンバイク・ツーリング ( 93 小関 清美) バスケットボール、スクーバダイビング、ダイエットエクササイズ、実践急救法、スキー (180 井島 章) 武道・剣道 (187 江川 潤) バドミントン (188 江藤 幹) バレーボール (196 佐藤 伸一郎) 武道・柔道 (206 土井 忍) ダンス (221 吉川 滋) 武道・合気道	
研究科目(アジア言語学科指定)	アジア研究入門	各専攻の専任教員が、それぞれの専門分野の学問領域について、分かりやすく説明・解説する。研究入門という名称ながら、専門性よりも一般性を重視し、アジア地域の言語、文学、文化、社会、経済、政治等の幅広い知識を与えることを目的とし、後期の専門分野のプログラム選択及び研究演習・卒業論文への導入部分を構成する。 (オムニバス方式/全15回) ( 2 興梠一郎/1回) 中国の内政と外交の基本的な仕組み等 ( 6 浜之上幸/1回) 韓国語の特徴等 ( 7 岩井美佐紀/1回) ベトナム社会の特徴等 ( 8 重富スバボン/1回) タイの豊かで多彩な文化とタイ社会の特徴等 (12 布川雅秀/1回) 中国語の特徴等 (13 花澤聖子/1回) 現代中国の社会と文化等 (16 林史樹/1回) 韓国文化等 (17 舟田京子/1回) インドネシア語の特徴と汎用性等 (18 皆川厚一/3回) インドネシアの文化及び講義全体の導入とまとめ (19 春日淳/1回) ベトナムで話される諸言語等 (20 高橋清子/1回) タイで話されている言語の特徴等 (23 菊地達也/1回) アラブ世界がアジアのイスラム圏に与える影響等 (28 豊島悠果/1回) 朝鮮半島の歴史等	
	中国語学概論Ⅰ	中国語の文法的特徴を考える。中国語とはどのような言語であるかを主に文法面から概説する。中国語の言葉遊び(物謎、字謎、しゃれ言葉、早口言葉)やことわざ、祝祭日の言葉、慶弔の言葉等も適宜紹介する。	
	中国語学概論Ⅱ	中国語の文法的特徴を考える。中国語とはどのような言語であるかを主に文法面から概説する。中国語の言葉遊び(物謎、字謎、しゃれ言葉、早口言葉)やことわざ、祝祭日の言葉、慶弔の言葉等も適宜紹介する。	
	中国語文法論Ⅰ	学会でもまだ解決していないような中国語文法のさまざまな問題を取り上げる。講義科目だが、履修者に質問をして、自分の考えを発表し、履修者全員で討論する。さらに課題も出し、レポートの提出も求める。	
	中国語文法論Ⅱ	後期からは中国語を考える上で非常に重要な補語を中心に話をする。講義科目だが、授業では履修者に質問をし、討論する。さらに課題も出し、レポートの提出も求める。	
	中国語語彙論Ⅰ	中国語の運用能力を高めるためには、語彙量を増やすことが不可欠である。この授業では、HSKに出題される甲級の単語をしっかり身に付けることを目標にする。毎回の授業では、まず、HSK甲級単語の小テスト(日本語から再生する)をし、その後、その単語を用いた短文の聴解訓練を行う。また、中国語は歴史の長さを反映して、成語、慣用語、諺語、歇後語等、さまざまな言語表現が発達している。先に挙げた基本語の習得と並行して、中国語の語彙にはどんな表現形式があるかを概観・紹介し、その語を用いた例文の読解を行う。また、受講者が興味を持った分野の言葉を調査・発表しながら、お互いに語彙量を増やす。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究 科目 (アジ ア言 語学 科指 定)	中国語彙論Ⅱ	中国語の運用能力を高めるためには、語彙量を増やすことが不可欠である。この授業では、HSKに出題される乙級の単語をしっかり身に付けることを目標とする。毎回の授業では、まず、その日に学習する単語の再生テストを行い、短文の聴解訓練を行う。さらに、検定試験に出題される類義語から文意に沿った語を選ぶ問題を材料に、類義語弁別の学習を行う。また、中国語では日常会話に、成語、慣用語、諺語、歇後語等のさまざまな言語形式が使われる。中国語の表現力アップのために、これらの慣用語を用いた短い会話の聴解訓練も行う。さらに、受講者が言語形式から興味を持った言葉を集めて発表し、互いに聴解力と語彙量を増やす。	
	中国語音韻論Ⅰ	漢語音韻学の基本的な概念、資料、方法等について学び、中国語の音韻体系に対する理解を深めることを目的とする。また、音韻学を理解する上で不可欠な音声学についても講義する。	
	中国語音韻論Ⅱ	漢語音韻学の基本的な概念、資料、方法等について学び、中国語の音韻体系に対する理解を深めることを目的とする。また、現代中国語諸方言の音韻体系との比較も行う。	
	中国語音声学Ⅰ	中国語の音声についての基本的な認識を獲得する。主に中国語共通語(普通話)に関する発音の知意について紹介しながら、普通話の音声体系がどのような要素によって成り立っているのか、それらの音声要素が互いに結びついてどのような変化が起きるのか等について講述する。また、方言と比較した時、普通話の発音にはどのような特色があるのかについても説明する。	
	中国語音声学Ⅱ	中国語音声学の知識を基礎にして、中国語の音韻体系について理解を深める。主に現代中国語(普通話)を例として音韻とはなにか、音韻論とは何かについて講述し、現代方言の音韻体系と比較する。伝統的漢語音韻学の基本概念を導入しつつ、現代中国語から遡って古代中国語の音韻にも話が及ぶ。	
	中国語史Ⅰ	現代中国語の中で主要な語彙及び文法項目を取り上げ、これらの語彙・文法項目が中国語史上いつ頃から使われ始め、またどのような経緯を経て、現代中国語として使われているのかを考察していく。この科目は講義科目だが、履修者が自分の考えを発表し、履修者全員で討論する。	
	中国語史Ⅱ	現代中国語の中で主要な語彙及び文法項目を取り上げ、これらの語彙・文法項目が中国語史上いつ頃から使われ始め、またどのような経緯を経て、現代中国語として使われているのかを考察していく。この科目は講義科目だが、履修者が自分の考えを発表し、履修者全員で討論する。さらに課題も出し、レポートの提出も求める。	
	日中比較言語Ⅰ	“了”の使い方にしろ、各種補語の使い方にしろ、中国語をマスターするのは実はなかなか容易ではない。1、2年時に学んだ中国語文法が、今ひとつ飲み込めていないとか、自信が持てないという受講者を対象に、その難点を克服する手助けになる授業を行う。	
	日中比較言語Ⅱ	前期に引き続き、日本人中国語学習者にとっての中国語文法の難点を克服するための授業を行う。中国語学習に意欲のある受講生を歓迎する。	
	広東語Ⅰ	香港の公用語である広東語(粵語)の発音・基礎会話を学ぶ。また、広東語を通じて香港の文化も紹介する。	
	広東語Ⅱ	香港の公用語である広東語(粵語)の発音・基礎会話を学ぶ。また、広東語を通じて香港の文化も紹介する。	
	福建語Ⅰ	学名、ピン南語と呼ばれる言葉は福建省南部を発源地とする、中国語系言語の中でも有力な方言である。福建以外に広東省東北部と雷州、海南省、東南アジア各地の華僑及び台湾全土等で広く話されている。この授業では台湾の大多数の人々の母語でもあり、実質的に共通語でもある台湾語を学ぶ。前期は発音とローマ字を修得し、簡単な会話ができるようになることを目指す。発音は標準中国語よりもずっと簡単だが、声調変化は多少難しいかもしれない。しかし、そこを乗り越えれば日本人にとっては非常に学びやすい言葉といえる。語学の学習だけではなく、台湾語に関連する台湾のいろいろな文化についても機会を設けて触れたい。	
	福建語Ⅱ	学名、ピン南語と呼ばれる言葉は福建省南部を発源地とする、中国語系言語の中でも有力な方言である。福建以外に広東省東北部と雷州、海南省、東南アジア各地の華僑及び台湾全土等で広く話されている。この授業では台湾の大多数の人々の母語でもあり、実質的に共通語でもある台湾語を学ぶ。前期は発音とローマ字を修得し、簡単な会話ができるようになることを目指す。発音は標準中国語よりもずっと簡単だが、声調変化は多少難しいかもしれない。しかし、そこを乗り越えれば日本人にとっては非常に学びやすい言葉といえる。語学の学習だけではなく、台湾語に関連する台湾のいろいろな文化についても機会を設けて触れたい。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目(アジア言語学科指定)	ビジネス中国語Ⅰ(a)	職場で、円滑なコミュニケーションができるように、挨拶表現、電話の対応、依頼、注文する、アポイントメントを取る等、いろいろな場面で使うビジネス表現を中心に学んでいく。また、中国国内で、その時流行っている話題や、社会現象等を随時、解説していく。	
	ビジネス中国語Ⅰ(b)	職場で、円滑なコミュニケーションができるように、挨拶表現、電話の対応、依頼、注文する、アポイントメントを取る等、いろいろな場面で使うビジネス表現を中心に学んでいく。また、中国国内で、その時流行っている話題や、社会現象等を随時、解説していく。	
	中国語通訳法Ⅰ(a)	中国の新聞や雑誌、中国で出版された地元の学生向けの教科書等を教材に使い、政治、経済、社会、生活習慣等、中国や、日中間に関するホットな話題を「日本語から中国語」「中国語から日本語」に正確に通訳できるよう訓練を重ねていく。テープを聞いたり、ビデオを見たりすることも、ときどき実施し、受講者の聞く力を鍛える。	
	中国語通訳法Ⅰ(b)	前期の内容に引き続き、中国の新聞や雑誌、中国で出版された地元の学生向けの教科書等を教材に使い、政治、経済、社会、生活習慣等、中国や、日中間に関するホットな話題を「日本語から中国語」「中国語から日本語」に正確に通訳できるよう訓練を重ねていく。生のテープを聞いたり、ビデオを見たりすることも実施し、受講者の聞く力を鍛える。	
	中国語通訳法Ⅱ(a)	中国語通訳法Ⅰの基礎の上により高レベルの中国語通訳法の授業を行う。中国で制作されたテープや、ビデオ等を教材に使い、政治、経済、社会、生活習慣等、「日本語から中国語」「中国語から日本語」に正確に通訳できるよう訓練を重ねていく。また、インターネット上の流行りの話題や、社会問題、受講者の感心のあること等について中国語による討論も行う。	
	中国語通訳法Ⅱ(b)	前期の学習内容の続きとなる。中国語通訳法Ⅰの基礎の上により高レベルの中国語通訳法の授業を行う。中国で制作されたテープや、ビデオ等を教材に使い、政治、経済、社会、生活習慣等、「日本語から中国語」「中国語から日本語」に正確に通訳できるよう訓練を重ねていく。また、インターネット上で流行りの話題や、社会問題、受講者の感心のあること等について中国語による討論も行う。	
	中国思想概論Ⅰ	「中国思想」というと、「偉大な古典」と言っていきなり「思考停止」してしまうか、あるいは「今の中国とは関係ないから」「テツガクなんて難しいものは嫌いだから」と言って省みないか、どちらかの立場を取る向きが多いのではないかと思う。また、思想を学ぶ時は、自分自身の問題に引き寄せて考えることが大切だ。他国で展開されてきた「思想」を学ぶことは、そうした点でも大変に意味のあることだ。本講義では、先秦から隋唐までの中国思想の展開について概観しながら、個々の問題について受講生と一緒に考えていきたい。	
	中国思想概論Ⅱ	「中国思想」というと、「偉大な古典」と言っていきなり「思考停止」してしまうか、あるいは「今の中国とは関係ないから」「テツガクなんて難しいものは嫌いだから」と言って省みないか、どちらかの立場を取る向きが多いのではないかと思う。また、思想を学ぶ時は、自分自身の問題に引き寄せて考えることが大切だ。他国で展開されてきた「思想」を学ぶことは、そうした点でも大変に意味のあることだ。本講義では、先秦から隋唐までの中国思想の展開について概観しながら、個々の問題について受講生と一緒に考えていきたい。	
	中国文化概論Ⅰ	本講義では受講生が、中国で生活したり、中国人の友人や同僚を持ったと想定した場合に、無理解や誤解が生じないための文化的知識を得ることをモットーに以下の項目を中心に学ぶ。冠婚葬祭、伝統行事、祝祭日、記念日。縁起の良いもの、悪いもの、吉祥図案、贈り物のタブー。服飾文化。食文化(料理体系、接待・食事のマナー、メニューの見方、茶、酒、餃子等)。住文化(四合院、胡同)。順口溜(戯れ歌)。信仰。	
	中国文化概論Ⅱ	中国文化概論Ⅰに引き続き、受講生が中国で生活したり、中国人の友人や同僚を持ったと想定した場合に、無理解や誤解が生じないための知識を得ることをモットーに中国文化を学ぶ。本講義では主に人間関係のあり方や価値観といった「見えない文化」に焦点を当てて中国文化を論じていく。文化摩擦の実例を挙げながら、何が原因で文化摩擦が起きているのか、受講生みんなで考え、討論しながら進めていく。	
中国文学概論Ⅰ	中国古典文学(前期は韻文中心)の主要な作品をテーマ別に鑑賞する。より深く学びたい学生のために、授業中に参考文献を提示する。		

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目(アジア言語学科指定)	中国文学概論Ⅱ	中国の古典小説とその影響を受けた日本文学の作品とを比較し、日中の意識の差異について検討する。さらに深く学びたい学生のために、授業中に参考文献を提示する。	
	中国文学史Ⅰ	主要な作品を鑑賞するとともに、中国古典文学(前期は韻文中心)の流れについて概説する。さらに深く学びたい学生のために、授業中に参考文献を提示する。	
	中国文学史Ⅱ	主要な作品を鑑賞するとともに、中国古典文学(後期は小説中心)の流れについて概説する。さらに深く学びたい学生のために、授業中に参考文献を提示する。	
	中国古典講読Ⅰ	いわゆる「漢文」を学ぶ。「漢文」は中国語の「古文」であり、中国語学習及びレベルアップの助けとなることは間違いない。また、「漢文」はつい最近まで東アジア各国共通のツールであり、日本の文化を考える上でも「漢文」の知識は必須だろう。しかも日本人は「書き下し」という記号を付して「日本語化」して読んでしまう「便利な技術」を開発した。授業では、テキストの「書き下し」を中心に、中国語での発音も勉強し、これを暗唱しながら読み進めることで、「漢文」を読みこなすトレーニングを積んでいく。前期は三字経から始めて、故事成語・漢詩などを読む。	
	中国古典講読Ⅱ	いわゆる「漢文」を学ぶ。「漢文」は中国語の「古文」であり、中国語学習及びレベルアップの助けとなることは間違いない。また、「漢文」はつい最近まで東アジア各国共通のツールであり、日本の文化を考える上でも「漢文」の知識は必須だろう。しかも日本人は「書き下し」という記号を付して「日本語化」して読んでしまう「便利な技術」を開発した。授業では、テキストの「書き下し」を中心に、中国語での発音も勉強し、これを暗唱しながら読み進めることで、「漢文」を読みこなすトレーニングを積んでいく。前期は三字経から始めて、故事成語・漢詩などを読む。後期は儒家や道家等、諸子のテキストを読む。	
	中国近世文学研究Ⅰ	この授業は現代中国語の基礎となった、近世中国語の文学作品を精読して行く授業である。授業では文学作品の精読だけではなく、近世中国語主要な語彙及び文法項目を取り上げ、現代中国語との比較なども行って行く。その結果、近世中国語に対する理解を深めるとともに、現代中国語の成立の過程が理解できるようにして行く。前期は主に、清代の作品を読んでいく。	
	中国近世文学研究Ⅱ	現代中国語の基礎となった近世中国語の文学作品を精読していく。文学作品の精読だけではなく、近世中国語主要な語彙及び文法項目を取り上げ、現代中国語との比較等も行う。その結果、近世中国語に対する理解を深めるとともに、現代中国語の成立の過程が理解できるようにする。前期は主に、清代の作品を読んでいく。	
	中国近代文学研究Ⅰ	清末民初から1920年代までの文学の流れを概観する。作品の一部に直接触れることで理解を深めていきたい。時間があれば授業に関連する映画等を鑑賞する予定。	
	中国近代文学研究Ⅱ	1930年代から中華人民共和国成立直前までの文学の流れを概観する。作品の一部に直接触れてみることで理解を深めていきたい。時間があれば授業に関連する映画等を鑑賞する予定。	
	中国現代文学研究Ⅰ	中華人民共和国成立から1980年代半ばまでの文学について概観する。作品の一部に直接触れることで理解を深めていきたい。時間があれば授業に関連する映画等を鑑賞する予定。	
	中国現代文学研究Ⅱ	1980年代半ばから現代までの文学を概観する。作品の一部に直接触れることで理解を深めていきたい。時間があれば授業に関連する映画等を鑑賞する予定。	
	中国史概論Ⅰ	大国化しつつある中国に対して、我々はどう付き合えばいいか。答えは多々あるが、中国史を理解することが一つのカギになると思われる。そこで、この時間は近現代中国の歴史を扱う。具体的に言うと、1840～42年のアヘン戦争から中華人民共和国建国までの中国史を概観する。また、中国史を中心に授業を展開するが、事件に絡む欧米諸国や日本のことにも言及する。なお、この授業を通して、学生諸君が広い意味での力をつけることを確実にするのである。ちなみに、プレゼンやディスカッション等を行うので、学生の積極的な姿勢を求めると同時に、留学生もともに授業を受けるため、交流を深めることができる。	
	中国史概論Ⅱ	大国化しつつある中国に対して、我々はどう付き合えばいいか。答えは多々あるが、中国史を理解することが一つのカギになると思われる。そこで、この時間は近現代中国の歴史を扱う。具体的に言うと、1840～42年のアヘン戦争から中華人民共和国建国までの中国史を概観する。また、中国史を中心に授業を展開するが、事件に絡む欧米諸国や日本のことにも言及する。なお、この授業を通して、学生諸君が広い意味での力をつけることを確実にするのである。ちなみに、プレゼンやディスカッション等を行うので、学生の積極的な姿勢を求めると同時に、留学生もともに授業を受けるため、交流を深めることができる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目(アジア言語学科指定)	中国現代史 I	飛躍的な発展を遂げる中国の過去半世紀を検証し、変動する現代中国を正しく理解するための基礎力を養う。毛沢東時代、トウ小平時代、江沢民時代をビデオを通してビジュアルにとらえ、同時に基本資料を読みながら、中国現代史を楽しく学ぶだけでなく、確かな基礎知識も身につけることを目的とする。また、「文化大革命」、「天安門事件」等の歴史的イベントの背景にあった内政と国際関係の相互関係等を把握し、単にクロノロジカルに歴史を追いかけるだけでなく、国際関係論的な手法を意識しながら、「世界の中の中国」という視点を忘れずに学んでいく。講義を聴き終えた時、中国に関する報道などがスムーズに理解できるだけでなく、その背景についての理解も備わり、一層の知的好奇心が芽生え、中国、日本、アジア、世界へと視野が広がることを目指す。前期は「文化大革命はなぜ起きたか」をテーマに「毛沢東時代」を詳細に検討する。	
	中国現代史 II	飛躍的な発展を遂げる中国の過去半世紀を検証し、変動する現代中国を正しく理解するための基礎力を養う。毛沢東時代、トウ小平時代、江沢民時代をビデオを通してビジュアルにとらえ、同時に基本資料を読みながら、中国現代史を楽しく学ぶだけでなく、確かな基礎知識も身につけることを目的とする。また、「文化大革命」、「天安門事件」等の歴史的イベントの背景にあった内政と国際関係の相互関係等を把握し、単にクロノロジカルに歴史を追いかけるだけでなく、国際関係論的な手法を意識しながら、「世界の中の中国」という視点を忘れずに学んでいく。講義を聴き終えた時、中国に関する報道などがスムーズに理解できるだけでなく、その背景についての理解も備わり、一層の知的好奇心が芽生え、中国、日本、アジア、世界へと視野が広がることを目指す。後期は「天安門事件はなぜ起きたか」「改革とは何だったのか」をテーマに「トウ小平時代」を詳細に検討する。	
	中国社会概論 I	中国社会に関する基礎知識を習得することを目的とする。改革・開放期以前と以降で中国社会がどのように変化したのかという比較の視点を持ちつつ、現在の中国社会を見る眼を養っていく。必要に応じてビデオ鑑賞等を交えながら授業を進める。	
	中国社会概論 II	中国社会概論 I に引き続き、中国社会に関する基礎知識を習得することを目的とする。改革・開放期以前と以降で中国社会がどのように変化したのかという比較の視点を持ちつつ、現在の中国社会を見る眼を養っていく。受講者の発表と講義、ビデオ鑑賞等を交えながら授業を進めていく。	
	中国社会特殊研究 I	中国映画には、中国社会の時代時代における姿を生き生きと映し出した名作と言われる映画がある。本講義では、そうした映画を教材に用いつつ、中国における政治の変遷がどのように中国社会に反映し、人々の生活にどのような影響を与えたのかを見て行く。また、中国社会の根底に流れる人々の意識や行動様式など、文化的側面にも注目したいと考えている。映画は、時代を代表する名作として「生きる」、「芙蓉鎮」、「山の郵便配達」を取り上げる。	
	中国社会特殊研究 II	今日、日本で注目を浴びている中国からの輸入食品の安全の問題や、中国における反日感情の高まりは、いずれも中華人民共和国の歩みと中国社会が抱える問題と無関係ではあり得ない。本講義では、そうした日本との係りを念頭に、中国社会を覆っている重要と思われる 이슈を取り上げ論じることによって、中国社会の実態に迫る。	
	中国经济概論 I	2007年、中国は米国、日本に継ぐ世界第三位の経済大国となった。また、数年前から中国は日本の最大の貿易相手国にもなっている。より深く現代中国の経済を理解することが求められている。本講義は主に現代中国の重要な経済政策等へのアプローチを中心に、授業を進めていく。学生諸君にプレゼンテーションの場等を提供することによって、中国经济の知識が身に付けることはもちろんのこと、これから人生に役立つ多様な能力をも養っていくことを確実にする。授業の重点は中国经济だが、中国の時事、少数民族、国民の日常生活、日本との違い等にも言及する。	
	中国经济概論 II	2007年、中国は米国、日本に継ぐ世界第三位の経済大国となった。また、数年前から中国は日本の最大の貿易相手国にもなっている。より深く現代中国の経済を理解することが求められている。本講義は主に現代中国の重要な経済政策等へのアプローチを中心に、授業を進めていく。学生諸君にプレゼンテーションの場等を提供することによって、中国经济の知識が身に付けることはもちろんのこと、これから人生に役立つ多様な能力をも養っていくことを確実にする。授業の重点は中国经济だが、中国の教育事情、政治制度、外交戦略、東洋医学、台湾問題、宗教信仰、文化思想等にも言及する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目（アジア言語学科指定）	中国経済特殊研究Ⅰ	現代中国の経済状況についていくつかのホットな話題をとりあげる。また、地域によって経済発展の特徴が異なるため、各地域の経済状況を研究し、相応しい経済政策を考える。なお、中国経済概論履修済みの学生諸君にこの科目を勧める。パソコンを使いながら、授業を進めるので、楽しみながら力をつけていくというのがこの科目のセールス・ポイントである。	
	中国経済特殊研究Ⅱ	現代中国の経済状況についていくつかのホットな話題をとりあげる。また、中国経済成功の原因や直面する課題を考える。さまざまな授業形態を通して、学生と教員間はもちろんのこと、学生同士間でのコミュニケーションもより多くとれ、学生諸君の能力向上を確実にするものである。パソコンを使って授業を進めるため、楽しみながら勉強できるというのがこの科目のセールス・ポイントである。	
	中国政治外交概論Ⅰ	現代中国の様々な側面を、最新ニュース、テキスト、映像を組み合わせさせて学ぶ。ホットなテーマを選び、そこから中国の内政、外交、社会、経済等の相互作用を具体的に理解する。現代中国をトータルに重層的に理解することが目標。また、中国が抱えるさまざまな問題を理解することで、「発展とは何か」「政治とは何か」「歴史とは何か」「世界とは何か」といった普遍的なテーマへの関心も喚起したい。前期は、主に都市と農村、格差等を中心に、テキスト・映像・最新ニュースを絡めて議論する。	
	中国政治外交概論Ⅱ	現代中国の様々な側面を、最新ニュース、テキスト、映像を組み合わせさせて学ぶ。ホットなテーマを選び、そこから中国の内政、外交、社会、経済等の相互作用を具体的に理解する。現代中国をトータルに重層的に理解することが目標。また、中国が抱えるさまざまな問題を理解することで、「発展とは何か」「政治とは何か」「歴史とは何か」「世界とは何か」といった普遍的なテーマへの関心も喚起したい。後期は、民権意識の高まり、メディア、外交等を中心に、テキスト・映像・最新ニュースを絡めて議論する予定。	
	中国政治外交特殊研究Ⅰ	中国研究に必要な基礎的な方法論を身につけるトレーニングである。自分で「読む」「語る」「書く」という作業をしなければ、なかなか知識は身に付かない。応用も困難である。講義では、現代中国に関する資料（ネット、新聞・雑誌、テキスト等）をもとに学生自身がリサーチ、発表、議論を行う。講義は2年生から履修できるので3年生からの演習（ゼミ）へのステップとして履修すれば効果がある。もちろん、演習を履修しなくても、この授業の履修は可能である。テーマは主に、前期の段階で話題になっているニュース及びテキストから選ぶ。	
	中国政治外交特殊研究Ⅱ	中国研究に必要な基礎的な方法論を身につけるトレーニングである。自分で「読む」「語る」「書く」という作業をしなければ、なかなか知識は身に付かない。応用も困難である。講義では、現代中国に関する資料（ネット、新聞・雑誌、テキスト等）をもとに学生自身がリサーチ、発表、議論を行う。講義は2年生から履修できるので3年生からの演習（ゼミ）へのステップとして履修すれば効果がある。もちろん、演習を履修しなくても、この授業の履修は可能である。テーマは主に、後期の段階で話題になっているニュース及びテキストから選ぶ。	
	日中関係論Ⅰ	石橋湛山の生涯と思想をベースに、戦争の時代の日中関係を学ぶ。日中関係を理解する上で、戦争の時代を無視することはできない。また、単に時系列的に歴史事実を暗記しても、歴史を「いま」というコンテキストで理解したことはないし、つまらない。石橋湛山という人物を通して、彼が生きた時代を具体的に理解し、日中関係を立体的に捉えることが目標である。講義では「読解」「分析」「発信」の力を養成する。「双方向」形式であり、参加者はテキストの指定箇所を読んで講義に出席し、活発な討論に参加する。また、映像をフルに活用し、活字のイメージを具体的にイメージすることで、知識の効果的な定着を目指す。	
	日中関係論Ⅱ	石橋湛山の生涯と思想をベースに、戦後日中関係を学ぶ。日中関係を理解する上で、いかにして日中が戦争の時代から国交正常化へと至ったかを知ることは必須である。前期同様、単に時系列的に歴史事実を暗記するのではなく、歴史を「いま」というコンテキストで理解する。石橋湛山という人物を通して、彼が生きた時代を具体的に理解し、日中関係を立体的に捉えることが目標である。講義では「読解」「分析」「発信」の力を養成する。「双方向」形式であり、参加者はテキストの指定箇所を読んで講義に出席し、活発な討論に参加する。また、映像をフルに活用し、活字のイメージを具体的にイメージすることで、知識の効果的な定着を目指す。	
	韓国語学概論Ⅰ	本講義は『韓国語概説』を用いて、朝鮮語の全体像を把握することを目的とする。前期は文字、音韻、単語についての基本的な事柄を扱う。なお、授業は各章毎に発表していく形式を取る。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目 (アジア言語学科指定)	韓国語学概論Ⅱ	「韓国語学概論Ⅰ」に引き続き『韓国語概説』を用いて、朝鮮語の全体像を把握することを目的とする。後期は文の構造、敬語法、歴史、方言を扱う。	
	韓国語文法論Ⅰ	現代韓国語の文章構造に対する理解を深化させることを目標として、韓国語文法論の基本概念、韓国語文章の形態素分析、韓国語単語の構造を講義する。	
	韓国語文法論Ⅱ	「韓国語文法論Ⅰ」において扱った統辞論に関する講義を継続する(韓国語の文法範疇、韓国語先語末語尾の分布と機能、韓国語語末語尾の分布と機能)。	
	日韓対照言語研究Ⅰ	日本語と韓国語の対照言語学の観点から、音声・音韻、語彙、文法、表現、言語行動等における日本語と韓国語の類似点と相違点を考える。韓国語学習者又は日本語学習者に現れる母語の影響による誤用例や特徴等も織り交ぜながら考察する。まず日本語と韓国語についての概論的な先行文献内容を紹介した後、各受講者は興味のあるテーマについての先行研究内容をまとめ発表を行い、討論、意見交換を行い、レポートを完成する。前期の授業では、似ていながら異なる日韓両言語についての対照研究の面白さ、可能性を体感してもらい、自分の興味のあるテーマを見つけ、その異同を知ることが目標とする。	
	日韓対照言語研究Ⅱ	具体的な対照研究の方法を学び、決めたテーマについて実際の対照研究を行い、対照研究の実践を試みることを目標とする。前半は、日韓対照言語研究Ⅰに続き、個別的な日韓対照研究の論文を紹介する。このように実際の先行研究の論文を読みながら、対照研究の方法を学び、その実践として自分の興味のあるテーマについて、日韓対照研究の実践を試み、発表とレポートをまとめる。	
	韓国語学特講Ⅰ	主に『コスモス朝和辞典』の「文法概説」を用いて朝鮮語の文法体系について講義を行う。語学トレーニング科目では詳しく触れられることがなかった用語の解説や韓国の国語学で使用されている文法用語等についても解説する。なお、後半では各自関心のある形式を選択し、どのような先行研究があるかを調べてもらう。	
	韓国語学特講Ⅱ	朝鮮語学(文法)に関する論文を読みながら、参考文献のまとめ方やデータ収集の方法について解説する。その後、各自、前期に選択した考察対象に関する先行研究をまとめた上でテーマを絞り、どのような方法で考察するかを発表していく形式を取る。	
	韓国語社会言語学Ⅰ	社会的文脈に置かれた言語使用の実態を明らかにしようとする立場、つまり社会言語学的な観点に立って、現代韓国語を分析しようとするものであり、以下のように展開していく予定である。社会言語学の領域と基本概念、インターネット言語の特徴、大学生の言語使用状況、在日韓国人の言語特徴、日本における韓国語に対するイメージ、韓国語の俗語に入り込んだ日本語。	
	韓国語社会言語学Ⅱ	前期に続いて以下の事柄を取り扱う予定である。日本人と韓国人の言語行動の違い、ソウル方言の音韻論、いわゆる「話し言葉」としてどのようなものがあるか、韓国の方言イメージ、韓国における日本語に対するイメージ、韓国の軍隊用語。	
	韓国語文章表現法	韓国語の文章表現を向上させるために言語学的な知識のうち、正しい文章の構成法、韓国語の正書法等を中心に講義を進める。	
	韓国語意味論	講義の前半部では語彙の問題に焦点を当てる。後半部では文章の意味、発話の意味等の問題について述べる。	
	韓国語映像翻訳法Ⅰ	韓国語のドラマ等の映像素材を使って映像翻訳の基本的手法を学ぶ。字幕翻訳のルールや映像翻訳ならではの表現等を習得し、実践を通じて実際に字幕翻訳を行う。作業には字幕制作ソフト[SSTG1]を使用するが、その操作方法を学ぶことも授業目標の1つである。	
	韓国語映像翻訳法Ⅱ	韓国語のドラマ等の映像素材を使って映像翻訳の基本的手法を学ぶ。字幕翻訳のルールや映像翻訳ならではの表現等を習得し、実践を通じて実際に字幕翻訳を行う。作業には字幕制作ソフト[SSTG1]を使用するが、その操作方法を学ぶことも授業目標の1つである。	
	韓国文化概論Ⅰ	韓国文化を学ぶ上でキーワードとなる基本的な文化事項を概論的に取り上げる。その際、<日々営まれ再生産される文化>と、今日<「民族文化」あるいは「伝統文化」として意味づけられ、再構築され、さらに消費される文化>という二つの視点を採用することにより、「文化」を相対的にとらえることを目指す。	
韓国文化概論Ⅱ	現代韓国社会に見られる多様な文化的事象を通して、韓国文化への理解を深めることを目的とする。急激な近代化や経済成長を遂げた韓国では、都市化が進み、社会や産業構造、人間関係、文化の様相にさまざまなひずみや変化が見られるようになった。「伝統的」とされる文化とポスト産業化時代の文化現象との連続性や非連続性にも留意して、多様な側面から韓国の現代文化を考える。		

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目(アジア言語学科指定)	韓国文化特定研究 I	私たちが韓国の文化や宗教に触れる時、巫俗信仰を避けて通ることはできない。それだけ巫俗信仰というものが韓国の社会や人々の暮らしにおいて重要な位置を占めているといえる。そのため植民地期以来、巫俗信仰は韓国社会を映し出す鏡として、さまざまな角度から調査、研究されてきた。この授業では、儀礼や神話研究の概要を始め、巫者の社会集団や国家との関わり、越境的な信仰実践に注目し、韓国社会における巫俗の意味を考えていくことを目的とする。	
	韓国文化特定研究 II	実際に韓国の人々や文化に触れるための基礎的なフィールドワークやインタビュー調査の手法、資料の見方等を学び、擬似的な調査を実施することを目的とする。また、日本における韓国文化研究の系譜を整理し、これまでに何が研究され、何が研究されなかったのかを抽出する。そこから既存の研究への疑問やこぼれ落ちていた文化的事象への関心を見つけ出す。また、調査体験を通して、文化を学ぶことの意味について議論する。	
	韓国映像文化論 I	近年、韓国映画の発展は目覚ましいものがある。映画は、時代と文化を反映していると言われるが、映画を「読む」ことは、その背景となっている文化を理解することにもなる。授業では、韓国の伝統文化や歴史と関連のある韓国映画を取り上げ、文献資料を参照しつつ、作品を分析することを通して、韓国の歴史や文化に関する理解を深める。日本語字幕付の作品を用いるので、韓国語に精通する必要はない。	
	韓国映像文化論 II	現代韓国社会における「人権」問題に焦点を当てることによって、韓国社会に対する理解を深めることを目標とする。授業では、韓国社会の問題を鋭く描いた映画を取り上げ、文献資料も参照しつつ、背景となっている社会問題を考察する。他の国との比較的観点からディスカッションを行うことで、各国の文化の共通点や違いなどについても認識を深めたい。日本語字幕付の作品を用いるので、韓国語に精通する必要はない。	
	韓国の宗教・社会 I	ある地域の理解に社会構造の理解は欠かせない。特に現代にみられる諸現象も、多くが当該地域の社会構造と関連して表層に浮かび上がってきたと考えられる。講義では意図的に朝鮮半島ときに大韓民国という境界を設定し、そこにみられた社会構造や社会に特徴的な事柄を通して現代韓国にみられる諸現象を読み解いていきたい。社会構造は歴史や文化・政治・経済等と密接に関係しているため、これらと明確に切り離して考えられない。そこで、基本的な事柄を予め又は同時並行的に学習することは、各々の個別分野での学習理解を一層深める。講義では儒教をはじめとする各宗教・家制度・事大思想/小中華思想・風水地理・陰陽五行・血縁/地縁組織・階級意識/社会の流動性等を扱う。とくに宗教・社会 I では、宗教や思想を中心に韓国・朝鮮社会を考える。	
	韓国の宗教・社会 II	基本的に宗教・社会 I の流れを踏襲して講義を進める。ただし、その中でも宗教・社会では社会構造に着目すると同時に、それらに変化を与えてきた韓国・朝鮮社会の流動性を中心に講義を進める。随時、講師の現地調査における成果について発表する。	
	韓国現代文学研究 I	韓国近代詩が開花したのは、1920年代~1930年代です。当時は、さまざまな潮流が流入され、近代詩のあるべき姿が真剣に模索されていただけに、名作といわれる魅力的な作品が数多く発表されている。授業では、韓国近代詩の代表的な作品を読むことで、韓国近代詩史の流れを把握することを目指す。語彙や表現の正確な意味を確認しながら、韓国語の原詩を読むが、辞書が使える程度の韓国語能力があれば、受講可能である。	
	韓国現代文学研究 II	小説と映画を比較して「読む」ことによって、それぞれのジャンルで、テキストがどのように重なり、どのように変容するかを考察する。とりあげる作品は、韓国の代表的な作家である李清俊(イ・ジョンジュン)の短編小説「南道の人」シリーズと、それを元に作られた映画『風の丘を越えて-西便制』。小説は韓国語版と日本語訳を併用するが、韓国語の小説を日本語に翻訳する練習も行う。映画は日本語字幕付を用いる。	
	韓国政治論 I	現代の韓国政治及び朝鮮半島を巡る国際政治について知りたい、理解したい、考えたい学生にお勧めである。朝鮮戦争(1950-53年)の背景には、朝鮮半島の分断という問題がある。1945年8月、日本の敗戦とともに朝鮮は植民地から解放され、1948年に独立したが、そのとき南北朝鮮という二つの国家に別れてしまった。今の韓国の政治を理解するためには、朝鮮分断や朝鮮戦争、そしてその背景にある朝鮮ナショナリズムについて考えておく必要がある。それは歴史の問題にとどまらず、今も続く、現在の問題でもあるからである。前期の授業では、朝鮮のナショナリズムと南北朝鮮の分断体制、朝鮮戦争について、ビデオ教材、映画等も活用しながら、講義する。背景として、朝鮮独立までの(近代)抗日独立運動とナショナリズム、第二次大戦後の朝鮮解放と分断、朝鮮戦争、統一問題などが主要なテーマになる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目(アジア言語学科指定)	韓国政治論Ⅱ	前期の「韓国政治論Ⅰ」に続き、朝鮮戦争後の時期を中心に、現代韓国の政治・経済、対外関係、統一・安全保障問題について、ビデオ教材や映画を活用しながら、講義する。朝鮮戦争後、すなわち「戦後」の韓国は、独立と戦争を経て、発展途上国から先進国に発展し、いまや「グローバル・コリア」を目指している。この授業では、その中で、韓国の経済発展と民主化、日韓・日朝等の国際関係、そして南北朝鮮関係、北朝鮮問題、統一・安全保障問題を、トピックとして取り上げていく。韓国政治論Ⅰの続編なので、Ⅰを受講していることが望ましい。	
	韓国経済論Ⅰ	1945年に日本の支配から脱した韓国は、現在までの間に目覚ましい経済発展を遂げた。その間OECD加盟を果たし、新進気鋭の先進国としての歩みを進めている。しかし、近年ではアジア通貨危機や世界同時不況の影響を受けるなど、課題も少なくない。本講義は韓国経済のこれまでの発展経路を回顧するとともにその現状を概観することを目的とする。本講義では、朝鮮戦争後の灰燼の中からの再出発を余儀なくされた韓国経済の復興、朴政権による経済開発、民主化と労働紛争、アジア通貨危機、そして世界同時不況の影響を受ける韓国経済の現状と今後に向けての問題点などを扱うこととし、マクロ経済的観点からの内容を中心とする。また、必要な統計数値を適宜紹介しながら授業を進めていく。	
	韓国経済論Ⅱ	現代韓国における経済・社会的問題(産業競争力、財閥、格差の拡大、労働形態の変化、受験戦争と若年失業等)について、歴史的経緯と実態及びその要因・背景を論じる。授業全体を通じて韓国社会を俯瞰する眼と比較の視点を養うことを目標とする。韓国社会の理解を深めるのに役立つ映画、テレビ番組等も適宜紹介したい。	
	韓国史概論Ⅰ	朝鮮半島の歴史(古代～近世)を学び、その展開を東アジア史の中に位置づけながら理解することを目的とする。主な内容は、歴史における「朝鮮」の登場、三国時代の展開、統一新羅と渤海、高麗王朝の成立と国家体制、高麗の文化と国際関係、高麗社会の展開、モンゴルの侵略と高麗後期の文化、朝鮮王朝の成立と支配体制、朝鮮前期の政争と国際関係、壬辰・丁酉倭乱、倭乱・胡乱と朝鮮社会の変容、朝鮮後期の政治・社会、期末試験。	
	韓国史概論Ⅱ	朝鮮半島の歴史(近世～近現代)を学び、その展開を東アジア史の中に位置づけながら理解することを目的とする。主な内容は、韓国朝鮮史と日本、朝鮮王朝の文化、朝鮮末期のソウル、開国と開化、大韓帝国から植民地へ、植民地支配、独立運動、総力戦と光復、近代のソウル、解放後の朝鮮半島、朝鮮戦争と南北の戦後復興、韓国の民主化運動、期末試験。	
	韓国近代史Ⅰ	朝鮮近代史の流れを、日本をはじめとする諸外国との関係を含めて理解することを目的とする。Ⅰでは、主に朝鮮王朝末期の開国期から韓国保護国化までを扱う。またF. Aマッケンジーの『朝鮮の悲劇』等、朝鮮を訪れた外国人が残した記録を辿り、当時の朝鮮社会の様子や、日本の朝鮮への侵出が、外国人の目にどのように映っていたのか、受講者と一緒に検討していく。	
	韓国近代史Ⅱ	朝鮮近代史の流れを、日本をはじめとする諸外国との関係を含めて理解することを目的とする。Ⅱでは、主に保護国化以降、植民地支配からの解放までを扱う。また、授業で学んだことを土台として、「朝鮮近代史をどのように考えるか」という問題について、いくつかの学術論文を紹介しながら、受講者とともに検討していく。	
	韓国史特講Ⅰ	中国はもちろん、日本や韓国の前近代の歴史資料は、ほとんどが漢文で書かれている。ふだん我々は、歴史家はその漢文史料を解釈し、そこから読み取った内容を、「歴史」として学んでいるわけである。この授業では、昔の人が記した記録を、漢文原典で読み、生の歴史に触れることを目的とする。テキストとして、今から約900年も遡る1123年に朝鮮半島を訪れた中国人が残した記録、『高麗図経』を取り上げる。当時の中国人の目から見た朝鮮半島の社会を、彼らと同じ目線からのぞき見ることができるはずである。なお漢文の文法について、高校の授業等で、ある程度学んでいることが望ましい。講読テキストはこちらで用意する。	
	韓国史特講Ⅱ	漢文史料を通じて東アジアの歴史に触れることを目的とする。ひとまず、韓国史特講Ⅰにひきつづき『高麗図経』を読むが、受講者の関心に応じて、その他のテキストも取り上げる。	
	インドネシア研究入門	文化人類学の手法を使って、地域をみる基本的な視点を学ぶとともに、文献の読み方・現地調査方法・問題をまとめ、発表する力をつけることもめざす。後期はイスラーム教の断食明け祭りやキリスト教のクリスマス等、関東在住のインドネシア人達と交流する絶好の時期でもある。特にインドネシア調査実習の準備段階として、この授業を受けておくことが望ましい。	

授 業 科 目 の 概 要			
（外国語学部アジア言語学科）			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目（アジア言語学科指定）	インドネシアの民族・地理	インドネシアをいくつかの地域にわけ、それぞれが持つ固有の政治経済・宗教・民族・文化等が絡み合いながら生み出すさまざまな社会として「読む」ことを目指す。また、毎年、希望者は在日インドネシア人のコミュニティや各宗教の礼拝所等を訪れて現地調査（フィールドワーク）をすることができるので、身に付けた言語能力と問題意識を実践で試してみよう。	
	インドネシアの歴史	インドネシアが『インドネシア』という国家になる以前の古代から中世までのスリウィジャヤ、シャイレンドラ、マタラム、マジャパイト、マラッカ王国が栄えた王国時代、ポルトガル、イギリス、オランダによる約350年間にわたる植民地時代、3年半の日本軍政時代及びインドネシア独立までの歴史をマレー語圏（現インドネシア、マレーシア領域）中心に解説する。	
	インドネシアの宗教・社会	まず最初に、東南アジアに広く認められる社会的特徴を考察した後、インドネシア社会の代表的種族の思考様式を比較検討する。上述の作業を通じて、インドネシア社会（ジャワ社会が中心となる）が総体として持つ精神文化的特徴を描出することを目標とする。学期後半では、学生の皆さんが希望する種族を各自選定し、その種族の思考、意識、世界観等の精神世界について報告する。また、適宜ビデオを上映し、インドネシア社会の特徴を映像を通じて確認する。	
	インドネシアの政治・経済 I	独立以後今日までのインドネシアの政治、経済、社会の変遷について学ぶ。（1）スカルノ体制下のインドネシア、（2）スハルト体制下のインドネシア、（3）スハルト以後のインドネシア、（4）スシロ・バンバン・ユドヨノ（SBY）現大統領とインドネシア政治・経済の課題。	
	ベトナム研究入門	ベトナム語専攻1年生を主な対象とするベトナム地域研究入門である。テキストに沿った構成で、主に5つのポイント（歴史、生態、社会、文化、政治、経済）に分けて講義を進める。自分自身の問題意識を深めるためにも、まずはベトナムに関する基本的な知識を知る必要がある。この講義を通して、自分なりのベトナムの総合的理解を身に付け、目覚ましい経済発展や人々の暮らし等、新聞報道で取り上げられる身近な話題を読み解いていくことも必要である。	
	ベトナムの民族・地理	東南アジアにおける他の国々と同様、ベトナムは多民族国家である。現在の東南アジアの国民国家の枠組みは、主に植民地時代の領域を引き継いでいる。一方、国境地域に広く分布する諸民族は、国民国家成立後、それぞれの国家内の少数民族として生きてきた。このように「民族」＝「国民」とはならない多民族国家ベトナムの態様を、主に生態的環境の違いや歴史的背景等を踏まえながら明らかにすることが本講義の目的である。	
	ベトナムの歴史	ベトナムは、約1000年の長きにわたり中国の支配下においてその文化的影響を多大に受け、他の東南アジア諸国と異なる中国型王朝国家を形成・展開した。その主たる担い手であるキン族は、北部から中部・南部へ、そして平野から山地へと領域を拡大し、現在国民国家ベトナムの基盤を形成してきた。このような歴史的経緯が現在まで依然として存在する国内の多様な地域性、そして東南アジア地域に位置しながらも東アジア諸国との文化的親和性を生ずる遠因となっている。本講では、ベトナム史初学者に向けてベトナム前近代史を理解するため不可欠なアジア史の基礎的概念・語彙を学び、中国・東南アジア諸国との関係を踏まえた各時代の歴史的文脈を考察していく。	
	ベトナムの宗教・社会	親族、地縁、機能等諸社会集団の結合が「ルース」である東南アジアの中で、ベトナムは東アジア型の「タイト」な社会であるとの印象を語られることが多い。ベトナムの「タイト」な社会も地域によってその程度は異なり、また時代を超えて不変でもない。本講では、19世紀から現在まで大きな政治・経済変動にさらされてきたベトナム社会について、その内部の下位社会集団－親族・地縁・機能－の特徴を整理し、地域性やベトナム社会全体の構造への理解を深めていく。	
	ベトナムの政治・経済 I	1986年にドイモイを開始し、市場経済の導入と対外開放を推進してきたベトナムは、1995年のASEAN加盟、2007年のWTO加盟にみられるように、国際社会の一員としての地位を築いてきた。この間、ベトナムは、冷戦の終結や9・11以降の国際社会の変動の中で、経済成長を遂げ、「普通の国」として認知されることになった。その一方で、民主化や人権問題等に関する批判も継続して存在していることも事実である。ドイモイが開始され20余年を経た今日の視点から、さらに、脱植民地化による国民国家の形成、インドシナ戦争・ベトナム戦争・カンボジア紛争・中越戦争という戦争の時代、南北統一後の社会主義化の実情といった歴史的観点からも、ドイモイによるベトナムの変容を、主に政治面と経済面から考えていきたい。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究 科目 (ア ジ ア 言 語 学 科 指 定)	タイ研究入門	This is the introductory course about Thailand. Students will study various topics such as history, geophaphy, economic, society and politic. Students are expected to do discussion in some topics. (仮訳) タイを紹介する。歴史、地理、経済、社会、政治のようなさまざまな話題について学ぶ。受講者は与えられたトピックについて議論することが求められる。	
	タイの民族・地理	タイ国は多民族国家であり、各民族が暮らす地域は、自然豊かな山海から都市部までと多岐にわたる。そうした地理的な特徴が、民族の社会や生活を多様化させている側面がある。本授業では、各民族が暮らす地域と生活との関係を考えることで、タイ国の「多民族性」への理解を深めることを目的とする。授業は、受講生による文献報告を中心として進める(文献は原則として日本語)。受講生には、自分に割り当てられた文献を読み込み、その要約と自分なりの考察を整理して発表してもらう。そして各報告に対して、受講生全員で議論を行う。授業を通して、文献の内容をもとに疑問を持ち、情報収集をして考える姿勢を学んで欲しい。受講生には、自分の考えを積極的に発言する態度を求める。	
	タイの歴史	This is the basic Thai history course. The purpose is to understand historical development of Thai society. This class will emphasis not only historical fact but also the approaches have been used in Thai historiography. Reading English and Japanese document is needed. Seminar is expected sometimes. Thai language will be used to explain the concept. (仮訳) 基本的なタイの歴史を学ぶ。タイ社会の歴史的な発展を理解することが目的である。歴史的な事実だけでなく、タイの歴史上の史実で使われてきた手法にも重点を置く。英語と日本語のテキストを使用する。タイ語は概要を説明する際に使用する。	
	タイの宗教・社会	タイの宗教・社会について広い知識を養い、タイの人々の宗教観や価値観、タイ社会の体系等を具体的に考察することを目的とする。第一に、タイにおける宗教(特に仏教)について、その由来や役割について学ぶ。日常生活の中でタイの人々はどのように宗教と関わっているのか、詳しく解説する。第二に、タイ社会の仕組み、特質、人々の価値観、家族関係、男女の社会的地位等について分析していく。タイの人々が社会問題をどのように解決しようとしているのか、その取り組みについても触れる。実際例として、エイズ問題への取り組みを紹介する。	
	タイの政治・経済Ⅱ	タイの人達と対話するためには、タイ語ができるだけではまったく不十分である。本講義では、経済社会開発5カ年計画、10月14日事件、暗黒の5月事件、1997年憲法、タクシン、コミュニティ主義等、タイ現代史の重要事件・トピックを解説し、タイ人と対等にタイについて議論できるだけの知識を提供する。	
	東南アジア研究入門Ⅰ	東南アジアは「アセアン」の名前で日本にも身近な存在となってきたが、民族、宗教、言語、文化的に実に多様な地域である。またインド洋と太平洋の中間に位置するため、いつの時代にも外部からの影響にさらされ、各地との交易やさまざまな文化と宗教の出会いの場となってきた。こうしたことから文化的、宗教的、言語的に統一された存在とはならなかったものの、コメが主食であり、農業が現在も経済の主力になっている等、社会構造には共通する面が多く、過去の歴史と現在の政治にも似通った点が多い。タイ、ミャンマー(ビルマ)、ベトナム、カンボジア、ラオスから成る大陸部東南アジアについて、地域の形成を歴史的に概説する。使用言語は日本語と英語。	
	東南アジア研究入門Ⅱ	「東南アジア研究入門Ⅰ」と同じテーマを、島嶼部のインドネシア、マレーシア、シンガポール、フィリピン、ブルネイについて概説する。使用言語は日本語と英語。	
	東南アジア史Ⅰ	近代ヨーロッパによる植民地支配は東南アジアに重大な経済的、社会的変化をもたらし、この地域はこれまで以上に外の世界の影響を受けるようになった。西欧の資本と技術、近代的な行政組織と司法制度、それに西欧的個人主義の導入等によって、中世世界は一掃され、伝統的権威や価値体系、家族と村落の結束力はゆらいだ。植民地時代の東南アジアにおける植民地支配者と植民地住民との間のアイデンティティの形成・発展、独立闘争、国家建設の諸問題について政治・社会経済史的に比較検討する。使用言語は日本語と英語。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目(アジア言語学科指定)	東南アジア史Ⅱ	西欧の支配はこれに反する革命運動を東南アジア各地に呼び起こし、これらの運動は第二次世界大戦後の国家独立へと発展していった。運動の先駆者として20世紀はじめに登場した知識階級は、西欧と自国双方の学問に関心を持ち、民族主義的な情熱にかられた知的運動を展開した。運動自体は文学的なものだったが、これらの知識人は社会変革の方向付けする上で重要な役割を果たしたというのが通説となっている。彼らは海外からの知識を求めただけでなく、自国の伝統の再生も目指した。そしてナショナリズム、自由主義、社会主義といった西欧の思想を広めた。後の世代にこの地域の将来の新国家主義の青写真を用意した東南アジア啓蒙運動の主要な流れを紹介するとともに、それらの理想が独立後、どのように変化していったかを見る。使用言語は日本語と英語。	
	東南アジアの宗教と文化Ⅰ	仏教は大陸部東南アジアに伝来以来、土着の伝統のみならず外来の諸文化とも相互に影響し合っており、人々の生活、社会、政治の形成に大きな役割を果たしてきた。今日、タイ、ミャンマー(ビルマ)、ラオス、カンボジアで9割近い人々が信じている上座部仏教は、宗教のかたちをとっているが内実は世俗的なヒューマニズムと等しいものだとする欧米の学者もいる。東南アジアにおける仏教の歴史的展開を、仏教が重要な役割を果たした政治闘争や社会変動に焦点を当てながら、学際的に考察していく。使用言語は日本語と英語。	
	東南アジアの宗教と文化Ⅱ	東南アジア島嶼部のイスラム化は概ね、ジハード(聖戦)ではなく平和的な手段によって敏速に行われた。インドネシア人とマレーシア人にとって、イスラム教は現代において最も強力な求心力となっていることは疑いない。東南アジアのイスラム教徒は中東の諸宗派の影響を強く受けながらも、ネオ近代主義と呼ばれる新しいイスラム宗派を発展させてきた。このように多くの社会習慣に関してイスラム教正統派とは異なる教義を展開してきたことが、東南アジアにおける現代イスラム国家の形成に重要な影響を及ぼした。今日のインドネシアとマレーシアに見られる人種、民族、ジェンダーをめぐる複雑な対応がどのようにして生まれてきたのかを探る。使用言語は日本語と英語。	
	東南アジア社会論Ⅰ	東南アジアの都市の貧困問題を知り、その原因を理解し、そして解決方法について一緒に考えることを目的とする。主な内容は、都市の階層間格差とスラムやH I V等の社会問題の拡大、農村から主要都市への労働力移動の増加、「農業の近代化」の下に拡大した農村の貧困の態様を理解することを目的とする。さらに、そのような都市や農村における社会問題の解決に向けて現地の人々が取り組んでいる新しい社会開発についても学んでいく。東南アジアだけでなく、構造的に同じ社会問題を抱える南アジアについても言及する。	
	東南アジア社会論Ⅱ	東南アジアの社会的特質について、社会の最小単位である家族とそれを取り巻く農村社会に焦点を当てて、一緒に考察していきたい。具体的には、ベトナム、タイ、マレーシアにおける家族の構成、関係、機能、周期等を理解していく。また、東南アジアの農村社会の特質についても同様に理解し、地域の多様性について共に学んでいく。東南アジアの社会を理解するための基本的な概念や基礎知識等を学ぶ機会となるので、これから東南アジアを深く知り、自身の研究を始めたいという学生の皆さん向けの内容となっている。また、現地で長期滞在した学生の皆さんにとっても、自身の経験を振り返り、整理し直す機会となるだろう。	
	東南アジア言語概論Ⅰ	東南アジアの諸言語には、単音節構造、声調、入破音、有気・無気の対立等をはじめ、音声学的に興味深い特徴がたくさんある。東南アジア諸語の音声・音韻面の概説を行う。時間に余裕があれば発音と綴り字の問題や形態音韻論についても若干の解説を行う。まずは東南アジアに話されるいくつかの言語の音声の特徴を母語や学習している言語の音声と比較してみることから始め、音声学的な基礎を学習していく。また、音韻分析の基本的な手続きにも多少触れる。この授業と併せ後期に開講される東南アジア言語概論Ⅱも履修すると良いであろう。	
	東南アジア言語概論Ⅱ	東南アジアの諸言語について言語学的に考察していく。統語論、意味論、語用論という言語学の基礎分野において、これまで東南アジアの言語(主にタイ語、ベトナム語、インドネシア語)がどのような研究され、分析されてきたのかを知ることから始める。東南アジアの諸言語は、出自が異なる、違う語族の言語であっても、語彙や文法あるいは語法などに似たところがあることが知られている。そうした共通の特徴を中心に、東南アジアの言語にはどのような特徴があるのか、具体例を参照しながら考察し、理解していく。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	地域研究	外国語を専攻する学生なら誰でも、語学力を身につけようと勉強するが、やがて「この語学を使って自分は何がしたいのか?」という疑問にぶつかるだろう。政治経済、宗教、教育、民族文化、芸術等、どんな分野でも、言語プラスアルファの専門分野(ディシプリン)を持つことで初めて研究として、また職業として成り立つ。「地域研究」とは、こうしたさまざまな専門分野の手法をもちいた学際的(インターディシプリナリー)な研究を指す。外国語を学ぶ者として、先入観やステレオタイプに囚われない「多角的視野」から国際社会を理解できるようになることを目指す。地域研究の具体的な方法や、自分の選んだ対象地域の分析といった「地域の読み方」を身につけ、それらを今後の留学や現場での活動に応用するために調査実習で確認してみよう。	
研究科目(学科指定なし)	日本語学概論	日本語が世界の言語の中でどのような特徴を持つ言語かということ意識しながら、日本語学の各分野を概観する。	
	日本語学Ⅰ	音声はどのようにして発せられるのか、どのような音を私達は用いているのか、そしてその音が言語の中でどのように位置付けられるのか、さらに日本語の音に関して概説する。	
	日本語学Ⅱ	日本語教師を目指す者が必ず知っておかなければならない日本語文法の基礎について、できるだけ網羅的に勉強する。テキストのうち、自習でも内容把握が困難でないと思われる部分については、自習項目とし、小テストで確認する。また、授業で取り上げる項目についても予習を前提とする。半期完結のコースで項目のすべてを終えるためには受講者の積極的な学習への取り組みが不可欠である。また、必要に応じて、生成文法の立場から教科書とは違った観点からより一般的に文法を捉える方法を講義する。	
	日本語教育概論	「日本語教育実習」を履修する予定の学生を対象とする。日本語を外国語として教えるための基礎的な知識について、コース・デザインを中心に学ぶ。授業計画を立てるまでの過程を理解できるようにする。	
	日本語教授法	「日本語教育実習」を履修する予定の学生を対象とする。日本語を外国語として「教える」という立場から、テキストの構成、練習問題の作成、教材の効果的な使用法について学ぶことを目的とする。授業は講義だけではなく、学生自身が考える課題が多く与えられる。教案作成についても学び、模擬授業を行う。	
	日本語教育実習	日本語の授業運営について実践的に学ぶことを目的とする。各自、『日本語教授法』で作成した「教授法ノート」をもとに、担当する学習内容の授業計画及び教案作成を行う。さらに、模擬授業、フィードバック、自己評価活動を経て教壇実習に進む(授業形態は、その年の履修人数によって異なる)。授業の2週目に、日本語教育(日本語学、日本語教授法)についての基礎知識を問う試験を行う。また、ブラザー大学(タイ)「日本語ティーチング・アシスタント」(8月)に参加する学生の指導も行う。	
	日本語表現法Ⅰ	日本語の文章を、正確にまた豊かな表現で書ける力を育てることを目的とする。実際に行うのは、以下の3点である。まず、漢字力・語彙力を向上させること。漢字・語彙の力は文章表現の基礎となる。次に、文章表現の基礎を学ぶこと。実際の例を見ながら、正確で分かりやすく、また誤解を生じさせない文章を書くための基礎を学ぶ。そして、多様な分野の文章を読んで、それぞれの文章で用いられる表現や概念を知り、論点をまとめる力を養う。授業では、毎回漢字・語彙のテストを行い、さらに多くの文章を読み、その要約を文章にまとめる練習を行う。	
	日本語表現法Ⅱ	優れた日本語の書き手となるための訓練を行う。そのためには、思考力の発達、幅広い知識の獲得、書くべき内容や論点の整理、語彙や表現法の獲得、文章力の発達を欠くことができない。これらの能力の総合的な発達を促すため、以下のような具体的な作業を毎週行ってもらおう。(1)漢字・語彙力の向上のための練習とテスト。(2)多様なジャンルからの文章をできるだけ多く読む。(3)その内容と論点を整理し、要約する。基本的に毎週一定量の文章を読み、その内容と論点を整理し、それを自分の頭の中で再構築し、文章としてまとめる作業を行う。	
	社会言語学	社会言語学の全般的入門。前半では、2冊のテキストを使って講義形式で社会言語学という大きな領域の概観をする。後半では、国会会議録というオンライン資料を使って各自がグループで分析を行い、ハンドアウトの作成とラスでの報告を求める。なお、各日一時間を割いて、その日の講義内容に関する質疑応答、リアクションペーパーの執筆・提出を行う。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目 (学科指定なし)	心理言語学	言葉の研究を通して心の仕組みや働きを探る「心理言語学」という領域とその課題・方法への理解を深めることを目的とする。前半は研究小史と言語の獲得を中心に、後半は発話や理解についての研究を中心に幅広い視点から言語を見る目を養いたい。語彙の獲得（例：子供達はどのようにものと名前を結びつけるのか、名詞と動詞はどう区別するのか、主語や目的語はどのように付与されるのか）と使用（例：発話にあたって語彙はどのように心の辞書から引き出されるのか）をめぐる課題について子供の自然発話や成人の言い誤り等のデータに基づいて実証的に迫りたい。	
	応用言語学	応用言語学は広範囲の学問分野であるが、本講義では、特に第二言語教育及び言語学習に焦点を当てる。言語と教育の有機的な関係を念頭に置き、文法、語彙、四技能の習得、教室談話、内容重視の英語教育、言語評価等さまざまな研究を概観し、第二言語教育の理論と実践の理解を深めていくことを目標とする。主に英語を対象言語とした研究を扱うが、本講義から得る知識や知見は他の言語の教育・学習にも応用できるであろう。将来、英語教育やその他外国語教育に携わろうとしている学生や第二言語習得プロセスに興味のある学生を対象とする。	
	意味・語用論	言語の最も重要な機能は情報伝達であるが、情報、即ち、意味は個々の発話場面において文の形で伝えられる。そして、文は伝える意味によってさまざまな形を取ると言われる。文の意味は一枚岩ではなく、いくつかの異なる種類の要因が重なりあって構成されている。主に英語の文法現象を資料として、文の意味の中でもテキスト形成的機能と対人関係的機能について学ぶ。	
	言語学特別研究	社会言語学という学問領域が扱うさまざまなテーマについて日本語で講義する。前半は、北アメリカの社会言語学の主流である言語のバリエーション（変異）の諸相を、地域、社会階層、エスニシティ、性、年齢等の社会的要因を切り口にして取り上げる。授業では、自然会話や朗読の録音、映画、音楽等を視聴して、さまざまな言語のバリエーションに親しむ。また、言語変化のメカニズムについて解説し、言語の規範について考察する。後半は、主に多言語社会における多言語使用の状況を取り上げる。北アメリカ、特にカナダで展開されてきたバイリンガリズム研究、言語政策研究に焦点を当てる。日本の言語政策についても触れる。	
	言語哲学Ⅰ	芸術を契機としたレトリック論を扱ったテーマの延長線として、記号論の基礎とその応用としての文化記号論を論じる。あらゆる記号論において、議論の出発点や理論の規範として「言語」が注目される。言語は、その音声や文字が「意味」というものを「指し示す（＝記号作用）」働きを常に持つからである。ここから、あらゆる現象に記号作用があると見立てる考え方が導出される。文化的現象は何かの「意味」を放つ存在であるとし得るが、その中でも衣服等の社会的現象や文化現象は独自の「意味」を放ってきたものである。これらの考え方を支える理論的根拠とその実際の場をみていきたい。	
	言語哲学Ⅱ	前期は、一般記号論の基礎とその応用としての文化記号論を論じた。後期は、一層、具体的な意味論的な領域に入って、領域を狭めて芸術記号論の理解を深めたい。具体的には、まず、芸術ジャンル上の意味論的差異がどのようなものであるのかについて論じたい。音楽作品の「意味」は、絵画作品の「意味」と同じであるというわけにはいかないであろう。では、前者の線的時間的表現で意味されるものと、後者の面的空間的表現で意味されるものとは何がどのように異なっているのだろうか。それは言語の場合と比較した時、どのような意味論的差異をつくっているのか。これらの問題を具体的な作品において検証しつつ論じていきたいと思う。	
	西洋古典語概論Ⅰ	印欧語族に属し、他の同族語（とりわけロマンス語諸語）の形成の基礎をなしたラテン語は、特に西洋中世における公用語の位置を占め、キリスト教世界は勿論、その後近代に至るまで、さまざまな学問分野における学術用語として使用され続けた。本講義ではそのラテン語の初歩を学習する。講義の性格上古典期のラテン語の学習に限定されるが、その知識によって、中世以降に書かれたラテン語文献についても、大方の読解は可能である。本講義から、近代印欧語に関する研究にとっても有益な知識を得てもらえれば、と考える。加えて、ラテン語同様、西洋古典語の基本言語であるギリシャ語についても、講義の進行にしたがい、可能な範囲で紹介してゆくりである。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目(学科指定なし)	西洋古典語概論Ⅱ	西洋の近現代語は古典ギリシャ語から多くの遺産を受け取っている。たとえば、英語の単語一つ取ってみても、我々は非常に多くのギリシャ語起源の言葉を、多くの場合、そうとは知らずに用いている。この科目では、近現代語との比較を交えながら、古典ギリシャ語の基本的な文法を学ぶとともに、古代ギリシャの文学や思想、習俗等にもできる限り触れ、西洋の言葉と文化への理解を深めていくための入り口としたい。	
	異文化コミュニケーション論Ⅱ	異文化へのイメージ、ステレオタイプ、また、その使い方の意味を読み取り、分析、理解する。この授業ではアメリカ、ヨーロッパ、アジア、日本の映画等を観ながら、話を進める。ここで扱う異文化の問題とは、異なるエスニシティに関わるだけではなく、少数集団やジェンダーの問題等を含めた広い意味で捉えることができる。私たちが意識的・無意識的に持っている異文化に対するイメージがどのように作られてきたか、またどのように人々に共有されているのかを見つめ直すことによって、異文化への新たな理解の第一歩を目指す。	
	組織コミュニケーション論Ⅱ	社会の活性化と個人の自己実現のためには、「ソーシャル・アントレプレナーシップ(社会起業家精神)」を身に付けることが今後ますます重要となる。そこでは、「人の役にたちたい」という思いにもとづく「社会的公益の追求」と、ビジネス的な効率や経営能力にもとづく「自立性・持続性の確保と発展」とを同時に両立させることが求められ、働くことの意味や人生の豊かさを考え直す上で多くの示唆に気づかされる。本講座では、そうした両立を目指す「ソーシャル・エンタープライズ(社会的企業)」の実例に学びつつ、実際に、事業企画案を自分で描いてみる中から、社会参画と社会的責任のあり方を現実即して考えるとともに、履修者自身の新たな発想の開発を試みる。	
	メディア・コミュニケーション論Ⅱ	神田外大にはKMS(KUIS MEDIA STATION)というウェブメディアがある。KMSはインターネットラジオとウェブマガジンから構成されて、文書、写真、音声、動画の情報が流れている。そこには学生達によって作られるところが用意されていて、この授業で作った作品はKMSを通じて世界に発信されることになる。インターネットラジオに載せるように『学生によるラジオ番組』を作ったり、著作権契約を結んだ音楽を使って、ミュージックビデオを作る。あるいは、先生の司会で学生のグループごとに一つトピックに対して議論討論番組を作る。このような番組作りを経験することによって、現在の最先端の情報メディアを意識し、自己表現活動を体験する。	
	非言語コミュニケーション論Ⅱ	非言語コミュニケーションで学んだ基礎概念を研究によってさらに深めていく。学期の初めに研究方法を学び、研究プロジェクトに取り組む。これはグループプロジェクトで、各グループで興味のあるトピックを選び、創造的な研究を行う。中間報告、最終発表・レポートを課題とする。	
	レトリカルコミュニケーション論	レトリカルな視点からコミュニケーションという行為/現象/出来事を捉え、分析、批判することで、我々が日常接するメッセージへの、その接し方を考えるコース。授業中には、政治スピーチ、小説、詩、映画、広告、携帯電話、Tシャツ等の題材を社会的政治的言説やメディアとして取り上げ、レトリック理論との関連を話し合う。前半は政治演説を主に題材にし、米国のスピーチ・コミュニケーション分野の歴史に沿った形で現代レトリックの発展を見ていく。後半はヨーロッパの影響を受けた学問・分野としてのレトリックがどう変容してきたかを鑑みながら、日本の文脈に併せて論じたい。コース内ではいくつかの批評手法とともにその例を出し、学生に短いエッセイを書いてもらうとともに、なるべく授業内での発言の機会を多く与えていきながら議論を進めたいと考えている。	
	国際ビジネス・コミュニケーション論Ⅱ	国際ビジネスコミュニケーション論Ⅰで学んだIT革命の基礎知識を基盤に、IT革命によって誕生し、進化し続ける新しいビジネス(eコマース、アウトソーシングビジネス等)のビジネスモデルについて事例を通じて学ぶ。ビジネスモデルを研究する前提として、企業と企業活動について基本的なポイントを講義する。さらに、グローバル化の中での日本企業のグローバル展開の実態、グローバル化の中で求められるグローバル材について実査に基づいた講義を行い、グローバルな世界を目指す学生に示唆を与える。一方通行の講義だけでなく学生全員の参加型の授業を行い、ビジネス・コミュニケーションの育成を図るため、学生による研究課題のプレゼンテーションを必修とする。研究課題のプレゼンテーションを通じて、「調査・分析の手法」「パワーポイントを使ったプレゼンテーションの手法」「ビジネスコミュニケーションの手法」を学ぶことを目的とする。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目(学科指定なし)	日本語スモールグループ・コミュニケーション	コミュニケーションや社会心理学の諸理論を概説するとともに、豊かな人間関係を築くうえで不可欠なソーシャルスキル(傾聴、アサーション等)についても取り上げ、授業で実施するグループワークやディスカッションを通して実践する。さらには、受講生自身のコミュニケーション・スタイルを再認識することも授業の目的とし、グループワークでの自分の行動や思考、感情等を記録して分析していくことを課題とする。	
	コンピュータ入門	利用者の立場でコンピュータの仕組みを学び、情報技術の基礎を習得する。講義形式で情報技術の仕組みへの理解を深め、その後の実習で実際にコンピュータに触れながらその仕組みを体験的に学んでいく。コンピュータの仕組みを理解して使うことによって、従来よりも楽しくなるだけでなく、トラブルになった時でも自分で対策を考えることができる。	
	インターネット実習	インターネットは世界のあらゆる地域との自由なコミュニケーションや、さまざまな情報へのアクセスを可能にする新しい情報流通環境である。インターネット実習では、ウェブページの理解と作成技術を習得することを目的とする。インターネットの仕組みとウェブプログラミングの基礎であるHTMLを作成する講義と演習を行う。ホームページ作成は、テキストエディターを使ってタグ文を書いて作成する。	
	マルチメディア入門	コンピュータを利用した映像制作を行う。レポートなどの印刷物や文字と写真を挿入したPowerPointなどのプレゼンテーションファイルと同様に、映像や音声、文字を総合的に駆使した映像は、相手に何かを伝えることのできるメディアの一つである。授業の中では、ステップ毎に設定された課題制作に取り組み、その成果について相互に発表を行う。そのプロセスの中で、自らの関心や社会の中で必要とされている情報をきちんと編集して伝えていくことの重要性を理解し、また、私達が普段目にしていくビデオ番組がどのように作られているのかについても考えていく。	
	ウェブサイトデザイン入門	ウェブサイトデザインを行う。単にウェブページを作るだけであれば、ソフトを使って簡単に行うことができるが、ここでは、自らが伝えたい情報又は相手が必要としている情報をわかりやすく表現し、提示することを意識してウェブサイト制作していくことを目標とする。授業の中では、ステップ毎に設定された課題制作に取り組み、その成果について相互に発表を行う。そのプロセスの中で、自らの関心や社会の中で必要とされている情報をきちんと編集して伝えていくことの重要性を理解し、また、私達が普段目にしていくウェブサイトがどのように作られているのかについても考えていく。	
	文化について考える	共通の文化的テーマに関するオムニバス形式の講義である。各教員が自らの専門分野からさまざまなアプローチを試みることににより、文化研究の多様さや面白さを伝え、学生の皆さんの知的好奇心を育むことを目的としている。ヒーローというテーマから文化について考える。ヒーロー/英雄はいつの時代、どの社会にも存在してきた。ギリシャ悲劇やインド古代叙事詩の主人公、イチロー選手のようなスポーツ界で活躍する選手、キング牧師や毛沢東等の歴史的変革の立役者、そしてアップルコンピューター創始者のスティーブ・ジョブスなど、ヒーロー像は多様である。ある特定の人物をヒーローとしてみる社会の存在があつて初めて、その人物はヒーローとなる。ヒーローは当該社会や時代の価値観や理想を映し出していると言える。時としてヒーローは誇張して語られたり、より偉大に見えるために武勇伝が捏造されたりもする。死後に初めて注目されることもある。そして、一度作り出されたヒーローのイメージは、本人の実像から離れて変化していく。ヒーローの原型/語源、ヒーローがたどる運命、ヒーローを生み出す社会的背景、ヒーロー像の政治的操作、時代によるヒーローの変化について、特定の人物を事例に話を進める。そして、ヒーローの条件、現代のヒーローを取り上げ、最後にKUIS生のヒーロー像を受講生と共に考える。 (オムニバス方式/全15回)(富松京一 8回)(奥田若菜 7回)	オムニバス
	比較思想 I	比較思想とは、二度の世界大戦への反省から、異文化理解の可能性を模索するために始まった比較的新しい学問である。この授業では、古代ギリシアからの西洋における比較思想的な営みから現代における学問としての比較思想の成立までの歴史を辿ると同時に、文化を比較することの価値を考察し、現代的な課題についても議論していきたい。	
	比較思想 II	この講座では「愛」について考えるが、受講したからといって「愛」についての実践的な影響や肯定的な効果や威力については何も保証しないので、その点、心構えが必要である。ただ、「愛」についての思想文化については知り得ると思うので、その分だけ自己の経験に留まりがちな「愛」の実践に多少なりとも影響があるかもしれない。それは自己責任ということで受講してほしい。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目(学科指定なし)	比較文学概論Ⅰ	アドルフはアウシュヴィッツ以後詩を書くのは野蛮だと述べているが、ホロコーストに関する文学的・芸術的な表象は不毛で不可能なのであろうか?この授業では、ホロコーストという筆舌に尽くせない体験が、文学や映画においてどのような形で表現されてきたのかを検証することを通して、今私達が何を考え何をすべきか、そして何ができるのかという倫理的な問題を考えてディスカッションする。	
	比較文学概論Ⅱ	性をめぐるわたしたちの<当たり前>感覚は、さまざまなメディアの影響を受けながら、また、それに対抗しながら形成されている。この授業では文学作品と映画分析に<ジェンダー/セクシュアリティ>という視点を援用し、性の二元論(本質論 対 構築論)という陥りがちな考え方にメスをいれながら、<当たり前>の正体が一体何であるのかを一緒に考えてみたい。先入観や固定観念をまずは捨てて柔軟な気持ちでこの授業を受講して欲しい。	
	民族・宗教問題研究	「9.11」以降の混迷する中東情勢を巡り、こうした宗教や信仰や感情がどのよう関連しあっているかを検証する。その根底には多様なアイデンティティ形成が関係していることを読み解いていく。この多様な異文化/多文化の世界観や宗教の在り方におけるアイデンティティの構築のなされ方は、フーコー、デリダ、ジジェク、パトラーらの諸理論によって理解や説明ができる。こうした諸理論を学びながら、アイデンティティの多様な動態の様相を考察する。	
	キリスト教文化論Ⅰ	宗教に対して、偏見と無理解しか有することのない現代日本社会において、キリスト教に対する客観的かつ批判的な理解を目指す。古典としても取り上げることのできる旧約聖書に見出される特異な人間像に注目していきたい。抑圧・隷属・絶望により沈黙し打算・駆け引きにより自己保存を目指す生き方から、自立・開放を目指して立ち上がることの困難、自立を強いる神等を取り上げることになる。	
	キリスト教文化論Ⅱ	目的はキリスト教文化論Ⅰと同じである。新約聖書に見出されるイエスの特異な言動に注目する。当時のユダヤ教社会の中で、ユダヤ教徒イエスの神観、人間観は周囲に波紋を引き起こす。抑圧された人々の心中には驚きを、支配階層には無関心又は憎悪・憤怒・殺意を引き起こした。やがてイエスは罪人として虐待・惨殺される。この死がキリスト教を成立させることになる。	
	イスラム文化論Ⅰ	基本的なイスラム思想を概説し、イスラム教と社会・文化との関わりを考える。なお、クルアーン(コーラン)の現物や現地で購入した物品、映像等を通じて、日頃は馴染みの薄いイスラム文化に少しでも親しんでもらうこととする。	
	イスラム文化論Ⅱ	近年イスラム世界と非イスラム世界双方で「他者」に不寛容な「原理主義」的見方が強まっており、イスラム文化との共存というテーマは21世紀の世界における重要な課題となっている。このような前提に立ち、現代のイスラム教と中東イスラム社会が抱える問題点、欧米文化との関わりを考察する。	
	文化心理学Ⅰ	人の知覚・記憶・思考等の認知過程は当然、種としてのヒトに共通の基盤を持つと考えられるが、一方、個人が成長し、生活する社会・文化の影響を受けている可能性も否定できない。このような文化と認知の関連性を扱った研究を概観する。	
	文化心理学Ⅱ	個人の自己観は、経験によって形成されるものであり、文化の影響を受けている。こうした文化的に異なる自己観が、人の認知・情動・動機づけなどの心理過程に影響を及ぼしていることを、種々の比較研究に基づいて検証する予定である。	
	スポーツ文化論Ⅰ	オリンピックを通してスポーツとは何かを考える。さらに、「私」、「私たち」にとってのスポーツとは何かについて考える。	
	スポーツ文化論Ⅱ	近代文化としてのスポーツの輸入は私たちに何をもたらしたのか。数多くのスポーツに親しむ私たち「日本人」とスポーツ関係について考察する。	
	文化人類学概論Ⅰ	さまざまな文化における日常生活において、アイデンティティの在り方は、さまざまな宗教とジェンダーを通じて多様に構築されている。その在り方には、その社会固有の価値観と同時にどの社会にもあてはまる普遍的ルールとが絡んでいる。異文化/多文化を理解するための視点や捉え方を、さまざまな社会や文化を比較し学んでいく。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目(学科指定なし)	文化人類学概論Ⅱ	さまざまな社会においてアイデンティティが、グローバリゼーションの影響を受けながら多様な形で形成されてきていることを、さまざまな事例から比較考察していく。グローバリゼーションは、世界を均質にしていく作用もあるが、文化の多様性をさらに複雑化させてもいる。その実情はどのようなものであろうか。具体的にはミクロネシア、アメリカ、ベドウィン、インド、スーダン、日本等において宗教心、ジェンダー役割、感情表現等がどのようにアイデンティティ構築に結びつくものか比較考察し紹介する。異文化を理解するための視点や捉え方を、多様な社会を比較しながら学んでいく。より深く異文化を理解するために、フーコー、デリダら、ポスト構造主義者と呼ばれる思想家達の捉え方の初歩的視点も紹介する。	
	文化人類学研究Ⅰ	グローバル化とIT革命によって、世界は合理化を進めてきているにも拘らず、人と人との間で誤解や摩擦や紛争が絶えない。理解し合っているよりは、その正反対のことが現実には起きている。何故であろうか。ここに実践力として役立つ学門が文化人類学である。日常に当然としている風景にさまざまな歴史的な文化的な要素が錯綜している。例えば、人が「癒し」を求めるとき、「美」を意識するとき、「健康」を願う時、「他者」と関わる時、様々な「装置」が隠されている。そこには、ローカルな要素とグローバルな要素が混交している。こうした事例を検証しながら、人間の存在理由を探るための文化人類学的思考とはどのようなものかを検証する。	
	文化人類学研究Ⅱ	食事を楽しむ、好みの洋服を買う、余暇を過ごすといった日常生活には、さまざまな文化的社会的ファクターがあると同時に、共通するルールも存在する。また、環境への配慮や適応にも密接な繋がりがあがる。文化人類学は、日頃我々が日常生活で当然としていることに「問い」を發して、人間の在り方とはどのようなものかを考察する。そこに潜む暗黙の了解を暴くことで、いかに我々はさまざまな社会的、政治的、歴史的状況に取り囲まれているのかが見えてくる。この授業では、「消費行動」を通じて、そこに潜むアイデンティティ形成が文化的側面、社会的側面、環境的要素があることを具体的に検証していく。	
	身体運動文化論	利便性の現代において身体性と文化の関係は希薄になりつつあるように思われる。日常の所作を中心に身体の在り方と文化の関連(変化と推移)を考察する。また、人間の基本動作と文化の関係性について考える。	
	健康科学論	文化を形成する人間の見事に創造された構造と機能について、生理学的側面から解説する。その上で、現代社会において深刻な問題となっている、生活習慣や加齢による身体機能への影響について理解を深める。	
	人権論	ソ連・東欧における共産主義体制の崩壊後、「人民の権力」「プロレタリアート独裁」等の言葉が時代遅れになるとともに、アジアの独裁的権力者たちは「アジア的価値観」という新たな政治用語を使い始めた。彼らは独裁体制を正当化するために過去の文化遺産に助けを求めようとしている。いくつかの政府はアジアの政治的・文化的伝統をふりかざして、国内の市民権拡大運動を残酷に弾圧しており、ミャンマー(ビルマ)や中国のように人権侵害が制度化されている国もある。独裁体制による人権弾圧の実態とともに、その指導者達の主張とは異なり、アジアの国々では一般民衆の人権運動を支える多様で力強い文化的伝統が息づいていることを明らかにする。使用言語は日本語と英語。	
	ジェンダー論	すでに<ポスト・ジェンダー>時代に突入したという見解も聞かれる中でジェンダー論の存在理由、射程と限界について改めて考えてみることは重要である。そもそもジェンダー概念とはどのようなプロセスを経て生み出され、どんな意味をもっているのだろうか。各自が自分らしく生きていくためには他者及び自分自身との対話的關係を続けていくことが重要である。<性>について自分が知っていると思っていることを、もう一度問い直す授業である。テキストを読むことと考えることを繋げながら<性>を巡る問題群を真摯に考察したい。	
	日本美術史Ⅰ	日本の仏教絵画について講義する。飛鳥・白鳳時代から平安時代までの仏画の代表的作例を取り上げ、関連する諸問題に言及しつつ、日本美術の特質について理解を深めることを目標とする。スライド・ビデオによる作品鑑賞を交えつつ講義を進める。	
	日本美術史Ⅱ	日本の絵画について講義する。平安時代から明治時代までの世俗絵画の名品を取り上げ、関連する諸問題に言及しつつ、日本美術の特質について理解を深めることを目標とする。スライド、ビデオによる作品鑑賞を交えつつ講義を進める。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目(学科指定なし)	日本芸能史Ⅰ	日本の芸能にはどのようなものがあり、また、それらはどのような時代背景のもとに成立したのか?前期ではく古代～近世>に誕生した芸能を取り上げ、特に<古典芸能>と呼ばれる日本芸能について広く理解を深めることを目的とする。	
	日本芸能史Ⅱ	日本の芸能にはどのようなものがあり、また、それらはどのような時代背景のもとに成立したのか?後期ではく近世～近代>に誕生した芸能を取り上げ、特に<大衆芸能>と呼ばれる日本芸能について広く理解を深めることを目的とする。	
	日本文学論Ⅰ	日本人のセルフはどのようなものとして検証されてきているか。さまざまなアプローチからの、日本人のセルフを検討する。トランスナショナルといわれる今日、日本人の持つ「文化」とはどのようなものとして捉えられるているだろうか。異文化との接触から捉えられる「日本人」には、どのようなステレオタイプが存在しているかを検証する。また、どのようにして、そうした「偏見」に対して日本人としてのアイデンティティを説明していけば良いだろうか。国籍や民族性の異なる異文化とのコミュニケーションが活発化している今日では、自らの文化的視点を把握しながら、相互理解を深めていく必要がある。文化人類学的視点を学びながら日本文化の理解/説明の在り方を検証する。	
	日本文学論Ⅱ	グローバル化と日本人のアイデンティティ形成の関係を探る。日本は西欧化、都市化、近代化されたものに取り囲まれているが、そこに、日本人のアイデンティティはどのようにして形成されているかを英語で議論し検証する。	
	日本大衆文化論	日本のアニメーションをテーマとして取り上げる。ジャパニメーションと呼ばれるようになってきている日本のアニメであるが、それらを検討していくにはいろいろな道筋がある。特に日本アニメの中でアメリカはじめ、世界で実画化されているものを見ていく。どのような要素が世界に受けているのか、実画化の問題点、影響等について考える。	
	アート・マネジメント	芸術であっても、政治・社会・経済システムから遊離して存在することはできない。芸術を巡る国家や自治体の関与としての文化政策を国際的な視野から概観するとともに、芸術創造を支えるマネジメントの理念と実際を考える。語学力を生かして国際的な芸術の場を支える人材を育成する。	
	児童文化論	3つの児童文学作品/映画を取り上げて、さまざまな社会的な現実(文化的、歴史的、政治的、経済的)をいかに表象し、どのような形で批判しているかを考察する。ミヒャエル・エンデの『モモ』、サン＝テグジュペリの『星の王子さま』、チャールズ・ディケンズの『クリスマス・キャロル』を熟読解釈することによって、<現実批判>の内実を検証していく。その際、内容はもちろんのこと、作品の<ことばのふるまい>と社会・文化の関係に留意しながら分析することを重視する。そして文字と映像という二つの表象メディアの差異を射程に入れて、文字文学と映像文学の物語世界の比較も行う。	
	演劇「実技」Ⅰ	The aim of the course is to provide students with practice in basic performing/ improvisation skills, culminating in a performance in English. (仮訳) 基本的な演技や即興の技術を習得し、英語で演劇を行うことができるようにすることを目的とする。	
	演劇「実技」Ⅱ	15分～20分のミュージカル台本をテキストとして、最終授業時の舞台発表に向け、演技・歌・ダンスの基礎を学びつつ稽古を重ねていく。学生達の発想・意見を生かしつつ、ワークショップ的に作品を創りあげていく。ミュージカルを演じることを通し、身体で表現すること、自己を開放すること等を感じ得ていく。	
	日米比較教育論	日本と米国との教育制度を、主に大学・大学院等の高等教育分野を中心に相互の歴史や文化又は社会を比較し、教育が果たしている社会での役割を考えていく。特に、教育が個人をどのように変容させるかを日米の異文化に視点を当てて議論する。さらに、幼稚園から高校までの教育制度も視野に入れ、政治的経済的な政策として教育内容がどのように変遷してきたかを社会的歴史的な観点からも検討する。また、近來のグローバリゼーションというインフォメーションテクノロジーの飛躍的な進歩を基礎とした世界的な経済変化の中で教育がいかに変化しているのかを個人の発達に視点を当てて考えていく。	
国際機構論Ⅰ	20世紀以降の国際社会の象徴的側面として、国際社会の組織化すなわち国際機構の相次ぐ設立とその機能の拡大・進歩が特筆される。これら国際機構が国際社会においてどのような理念と機能を担い、国際社会の秩序形成と発展にいかなる貢献をしているのかを、国際連合を中心に講義する。主要テーマは、国際社会の組織化と国際機構、国際連合の成立と組織、国際連合の機能と課題、国際機構とNGOの活動、日本の国際貢献と国連。		

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目(学科指定なし)	国際機構論Ⅱ	国際機構論Ⅰの続編として、国連の主要専門機関(specialized agency)について講義する。これら専門機関ないし関連機関のうち重要性の高い機関を採り上げる。講義の順序としては、活動内容が比較的理解しやすい機関から、より専門性の高い機関へと進む。講義の主要テーマは、国際労働機関(ILO)、国連教育科学文化機関(UNESCO)、国連食糧農業機関(FAO)、世界貿易機関(WTO)、世界銀行(IBRD)、国際通貨基金(IMF)。	
	国際取引法Ⅰ	国際ビジネス取引に関連する法律を学ぶ。国際取引法は基礎編で、各国のビジネス背景の違い、国際化の意味、国際交渉、国際取引紛争の原因、法律の相違、契約意識の相違、権利意識の相違、訴訟観の相違、紛争解決の困難性等を概説する。また貿易取引の手順等も説明する。毎回国際ビジネス関連ニュースの発表を求める。リーガルマインドを養う授業でもある。	
	国際取引法Ⅱ	国際ビジネス取引に関連する法律を学ぶ。国際取引法ⅠはⅡより具体的なテーマを扱う。企業の海外進出の事業形態、外国の裁判制度、製造物責任法、独占禁止法、知的所有権法、国際契約法、国際取引紛争解決等の諸分野を解説する。毎回国際ビジネス関連ニュースの発表を求める。リーガルマインドを養う授業でもある。	
	国際マーケティング論	マーケティングとは、企業その他の組織が顧客満足獲得のために行う諸活動を意味する。企業行動に影響を及ぼす多様なステークホルダー(利害関係者)のうち、特に顧客に焦点を合わせた経営学の一分野であるとも言える。主要な講義テーマは、マーケティングの歴史とマーケティング思想の変遷、マーケティング戦略とマーケティング・ミックス～価格政策とプロモーション(販売促進政策)を中心に、消費者行動の理論と分析、マーケティング調査の基礎、スポーツ・マーケティングとスポーツ・スポンサーシップ。	
	多国籍企業論	“多国籍企業”をキーワードに、企業活動のグローバル化の諸相について講義する。関連科目として国際経営論が開講されている。多国籍企業論と国際経営論に本質的な違いがあるわけではないが、便宜的に次のように区別して講義を進める方針である。すなわち、国際経営論では伝統的な経営理論のグローバル経営への応用編を講義し、多国籍企業論では多国籍企業の歴史とコース(Ronald H. Coase)の内部化理論を中心に、企業活動のグローバル化に関わる主要理論について講義する。主要テーマは、多国籍企業概念及びその歴史、多国籍企業の事例研究、多国籍企業と法、企業の多国籍化と直接投資、企業の多国籍化に関わる主要理論～内部化理論およびOLI理論を中心に、企業の多国籍化と組織及び人的資源、多国籍企業と国際課税。	
	国際協力入門	国際協力を王道なし。技術移転は1日にして成らず。これまでに国際協力を経験した人も、そうでない人も、人類共存という課題についてどのような考えを持っているのだろうか。本講義では、21世紀を迎えた国際情勢の中における発展途上国の立場を理解するとともに、それらの国々が抱えている貧困問題や、環境問題、民族紛争問題に対して、国際社会がどのように対処しているのかを調べ、これからの課題を検討していく。そして、日本の援助はどのように貢献し、また、その一方でどのような課題を抱えているのかを明らかにし、講義終了時には、学生諸君がそれぞれの視点に基づいて協力方法を提言できるようになることが望まれる。	
	国際平和論Ⅰ	20世紀ほど世界が戦乱に明け暮れ、膨大な人々が被害を被った時代はない。同時に、20世紀ほど真剣に世界平和が希求されてきた時代もない。本講義では、20世紀を対象に、こうした「戦争と破壊の嵐」と「国際平和の希求」とが複雑に交錯してきた流れを歴史的かつグローバルに振り返る中から、これまでの経験と課題を学び取り、将来の展望と選択肢を考える。今日に至っても、世界に平和が訪れたとは言いがたい。依然として民族紛争や内戦は後を絶たず、国際テロや核開発等は大きな脅威のままである。経済危機は地球規模に広がり、貧困は拡大して「人間の安全保障」も大きな課題となっている。そうした中で、「平和」を創り出すためには我々は何をしなければならないのか、何をすべきなのか。共に力を合わせて「平和」を創り出していく道筋を考えたい。	
	国際平和論Ⅱ	国際平和論Ⅰの講義を踏まえて、平和実現のための武力介入、平和維持(PKO)、平和構築、国防といった課題を国際政治と国内政治の両面から複合的に考える。特に、世界の平和構築に果たすべき日本の役割に重点を置き、1991年の湾岸戦争以降に日本が経験してきた分岐点と選択肢を分析する中から、戦後日本の在り方を考え直し、これからの日本の課題と可能性を考える。授業と同時進行的に展開する最新の国際情勢に触れることも多いので、履修者には絶えず新聞・雑誌等で情報を収集し、その意味を考えることが求められる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目(学科指定なし)	国際ボランティア	「ボランティアには興味はあるが、どのようにしたら良いのかわからない」という人は多いのではないだろうか。また、「ボランティアをすればきっと喜ばれるに違いない」と考える人もいるであろう。本講義では、さまざまなNGO団体や個人の人々の活動を知り、国際社会の貧困問題や文化摩擦等に触れながら、国際ボランティア活動の形態や実施方法等について考えていく。授業に出ればボランティア活動ができるという性質のものではなく、ボランティア活動を受け入れている人々やコミュニティがどのような立場に置かれているのかを学生諸君それぞれが考えて、自分の力でできるボランティア活動を見つけることが望まれる。	
	東アジア政治経済論Ⅰ	主題は世界金融危機と東アジアである。日本・中国・朝鮮半島・アセアンを巡る日々のニュースや資料等を使いながら、東アジアの現状を読み解いていく。そのプロセスで政治、経済、社会、外交の相互作用を学んでいく。講義の目的は、ニュース報道というバラバラの情報を、いかにして「かたち」にしていくか、その方法論を体得することである。また、「受身」の情報受信を超えて、発信する力を身に付ける。	
	東アジア政治経済論Ⅱ	前期に続き、テーマは世界金融危機と東アジアである。日本・中国・朝鮮半島・アセアンを巡る日々のニュースや資料等を使いながら、東アジアの現状を読み解いていく。そのプロセスで政治、経済、社会、外交の相互作用を学んでいく。講義の目的は、ニュース報道というバラバラの情報を、いかにして「かたち」にしていくか、その方法論を体得することである。また、「受身」の情報受信を超えて、発信する力を身に付ける。	
	ヨーロッパ政治経済論Ⅰ	欧州連合(EU)では2009年12月にリスボン条約が発効し、欧州統合はさらなる統合の段階を迎えつつある。この講義では、欧州統合の歴史やEUのしくみ、EUの諸課題について説明し、欧州統合とはどのように進められて来たのか、そして今後どのように進もうとしているのかについて理解を深める。	
	ヨーロッパ政治経済論Ⅱ	EUの外交・安全保障政策や他の国際機関(NATOやOSCE等)について焦点を当て、統合が進む中でヨーロッパの政治がどのような課題を抱え、国際社会の中でヨーロッパが対外的にどのような政策を進めているのかについて理解を深めるとともに、いくつかの欧州諸国の政治動向についても取り上げ、欧州統合の過程の中でそれぞれの加盟国がどのような意図で動いているのかについても理解を深める。	
	アフリカ研究入門Ⅰ	アフリカを取り上げ、政治・社会・経済のさまざまな面から総合的な理解を深めることを目標とする。アフリカに生きる人々について、新聞・テレビ等のマス・メディアでは、残念ながらまだまだ深く知ることができないのが現状だ。特に、人々の普段の暮らし、また紛争、貧困、一党独裁等さまざまな問題を理解するカギとなる、奴隷貿易や植民地化の歴史、独立に至る政治変動については、日常で接する機会が非常に少ないと思う。授業では、これらの点について、パワーポイントや写真を使いながら、より深い理解を目指す。可能な場合はビデオ素材も使用する予定である。	
	アフリカ研究入門Ⅱ	サハラ以南アフリカ諸国へのより深い理解を目標とし、中心国の一つケニア共和国に焦点を当て、政治史を手がかりに深く掘り下げた考察を進める。「アフリカなのになぜケニア一国だけを取り上げるのだろうか?」「政治ってなじみがないけど…。政治で何が分かるのだろうか?」——こうした疑問にも講義の中でじっくり答えていく。授業では、パワーポイントや写真(素材があればビデオ映像も)を使い、より良い理解を目指す。	
	憲法Ⅰ	社会のさまざまな問題を「憲法的」に思考する視点を獲得することである。憲法という名前の法は「法典」という形で存在しているが、憲法上の問題は社会の至るところに存在している。分かりやすいところにあるものもあれば、一見しただけでは分からないところに隠れているものもある。社会に存在する憲法問題を発掘する眼力を身に付け、他者の基本的人権に対して敏感になることで、憲法をただの紙に書かれた無味乾燥な言葉としてではなく「生きた」ものとして捉えることができるようになるだろう。	
	憲法Ⅱ	日本国憲法には、基本的人権に関する条文とともに国家の統治機構に関する条文が備わっている。憲法が英語で「constitution(骨格)」と表されるように、日本国憲法には、まさに国家の骨格について書かれているのである。基本的人権条項が思想的骨格ならば、統治機構の条文はそれを支える形式的骨格であると言える。統治機構について学ぶことは、日本国憲法の想定する「国家像」を学ぶことになる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目(学科指定なし)	現代国家論Ⅰ	古代ギリシヤ以来、国家についてさまざまな論じられてきたことは事実であるが、現在の我々がイメージする「国家」と古代の国家とはかなり異なっている。現代の国家は、古代の「都市国家」でも中世的「帝国」でもなく、その歴史はそれほど長いものではない。ヨーロッパに源流を持つ「近代国家」は、主権と領土(国境)と国民からなる「主権国家」、「領域国家」、「国民国家」である。ところが、その近代国家は、今、EU統合に見られるように、その発祥の地において新たな展開を見せ始めている。できるだけ多くの生の現実に当たることで、「国家」を巡るさまざまな現状を把握することに努めたい。	
	現代国家論Ⅱ	「国家」の存在は自然なものであり、理論的に正当化される必要のないものだと考えられる場合もある。しかし、長い政治哲学、倫理学の伝統は、ある意味で国家を正当化しようとする試みであったと見ることもできる。まして、歴史的に新しく、しかも理論的正当化作業を経て形成されてきた近代国民国家がいろいろな点で綻びを見せ始めている現在、その正統性の根拠と限界を見極めることはきわめて重要なことである。実際、「テロ」と言われるものと正当な抵抗権の行使あるいは軍隊による武力行使との違いはどこにあるのだろうか。日本においても、靖国問題や防衛論争、在日の人々や難民の処遇等、国家の正当性問題と深く関連する問題がある。前期の現状認識を踏まえた上で、こうした点について思想的及び理論的に考察していきたい。	
	社会調査法Ⅰ	社会という集合現象を調べるために、社会調査を行なう必要がある。社会調査を行うために、多くの社会事象を理解する専門的な知識や訓練が必要である。本講義の目的は、社会調査とは何かを理解した上、その基礎技術を身に付けることである。社会調査を成功させる重要条件といえ、まず社会調査の道具アンケート用紙を作成することであろう。しかし、アンケートの作成は決して聞きたいことを質問にするだけの簡単なものではなく、調査対象や調査テーマをいかに決めるか、理論仮説をいかに組み立てるか、アンケートの言語問題をどう考えるか、質問をいかに合わせるか等々の問題を解決しなければならない。さらに、アンケートを配るために、サンプリングの方法も勉強する必要がある。本講義は、社会調査の設計とアンケート用紙の作成を中心に社会調査の流れをできるだけ具体的な事例に基づいて説明し、多くの練習を行う内容を持っている。	
	社会調査法Ⅱ	社会調査を通して得た統計的データを分析する必要がある。経験社会学の重要内容は調査データの解析である。現在、コンピュータの普及によって社会調査においてもその応用が多くなっているので、昔手間を取る調査データの解析が簡単にできるようになった。本講義では、まず調査票の整理という準備段階から始め、そして社会科学統計ソフトSPSSを利用してデータベースを作成し、データ解析することへ進みたい。授業の目的は、専らコンピュータの知識や統計学の知識を勉強することではなく、むしろ事例に基づいてSPSSや社会調査データ解析の知識を応用することである。実践的練習によってコンピュータに馴染み、社会統計の基礎知識を身に付けるように指導したい。	
	環境科学Ⅰ	人間社会は自然環境の中に包含され、自然環境による恩恵なくしては存続不可能である。この講義では、教室での講義と生物観察の両面から、自然環境と生物多様性について学ぶ。生物学Ⅰ(前期)、環境科学Ⅱ(後期)も併せて履修することが望ましいが、必須ではない。講義時間内に学内の植生調査を行う。講義時間外の「南房総小湊海岸の磯における生物観察」「雑木林における生物観察」は、土日・祝日に行う。	
	環境科学Ⅱ	環境考古学的知見も踏まえて、自然環境の破壊により人間社会がどれほどのダメージを蒙るか理解し、我々を取り巻く環境(特に陸上と海洋)に現在起きている問題とその原因について学ぶ。東京湾のプランクトンを実際に顕微鏡を用いて観察する。環境科学Ⅰを履修していることが望ましいが、必須ではない。途中で数度小テストを課し、自己採点により理解を深める(小テストは成績には含めない)。講義時間外に行う「野外における生物観察」(長作市民の森又は谷津干潟を予定している)は、土日・祝日に行う。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目(学科指定なし)	企業財務Ⅰ	企業経営と戦略を理解する上で避けては通れない企業財務を平易な内容で解説することを目的とする。授業は、(1)企業財務を理解する上で出発点となる財務諸表の読み方、(2)財務諸表の枠組みを理解した上での、財務分析の基本的な手法、(3)企業が財務戦略を行う上で不可欠な企業調達や資金運用の仕組み等の講義から構成される。企業財務Ⅰにおいては、財務諸表の仕組み、財務分析の基礎、さらに間接金融による資金調達手法に特に焦点を当て、授業を進める。講義のはじめは簿記の初歩からの講義となるが、企業財務理解の上で不可欠な知識である点を念頭に置き、積極的に講義に出席することが求められる。	
	企業財務Ⅱ	企業財務Ⅰで学んだ企業会計知識を前提に、企業の資金調達、運用に焦点を当てて講義を進める。特に、近年企業の動きが活発化している証券市場を通じての資金調達・運用については、多くの時間を割く方針である。また、M&A(合併と買収)など企業財務にかかわる最近の金融市場の動向についても、論じていきたい。	
	民法概論Ⅰ	法と経済という二つの視点から、民法・経済法(独占禁止法)に関する基礎知識を修得しつつ、社会生活で生じる現代的課題にどのように対処すべきかについて検討する。日本の民法・独占禁止法についての基礎理論(法的三段論法、法解釈、法律要件と効果、法律行為、近代市民法原理・原則そして競争原理等)を解説し、民法で規定される家族関係や社会生活における財産所有・契約取引関係だけでなく、現代的で特殊な取引、労働・社会福祉・環境そしてこれらの相互の関係について、履修生が、法律学と経済学等の視点から検討し得る能力を涵養することに最終目標を置く。この目標は、刑事事件の裁判員制度に選任された履修生に求められる能力とほぼ一致する。	
	民法概論Ⅱ	自由市場経済において、個人が財産を自由に使用し、収益をあげて、処分(生産し流通)し得る法制度—財産権の私的側面—について学ぶ。資本主義経済社会は、このような財産の私的側面保護法(民法)を基礎に形成されている。しかし、現代社会の法律問題は、財産権の私的側面が強調されすぎるとともに、経済独占、労働、知的財産及び自然・社会環境という各々の分野において生じる民事法上の諸請求(以下では環境問題という)として現れる点の特徴とする。関係する社会法分野に属する独占禁止法、経済学そして産業組織論の視点から、財産権を分析し、環境問題発生の法的原因(日本において財産権の社会的側面の欠如)を明らかにして、21世紀にあり得べき財産権について検討することに重点を置く。	
	商法概論Ⅰ	事業は会社組織を通じて行うことが一般的である。そこで、まず会社の概念・会社の種類・会社法総則等について説明した後、株式会社を中心として株式会社の設立・株式・新株の発行・新株予約権等について説明する。次に、会社の組織及び意思決定・業務執行過程について、法律の定めと現実の会社組織内の実情とを対比させながら、具体的に解説する。続いて、計算、持分会社、社債、組織再編、外国会社等について解説する。ビジネスの世界で必要とする基本的な知識を広く取り上げて解説するので、将来のために、意欲的に学習に取り組むことを希望する。	
	商法概論Ⅱ	企業は、まず法人組織(会社)を作り、次に他の法人及び個人等と取引をすることによって収益を上げ発展する。取引は、どのように行われていくのか。そこにはどのような問題が発生し解決されているのか。最終的に決済はどのように行われるのか。海外との貿易取引はどのように行われ、どのような問題があるのか等、ビジネスの現場で必要となる知識について幅広く解説する。講義の順序としては、前期の「商法概論」を引き継いで、最初の2～3回において、「商法」の中の「商法総則」「商行為法」を講義し、次に取引の決済(手形・小切手)、貿易取引、インターネットによる(貿易)取引(電子商取引)、通常のビジネスにおける取引上のさまざまな問題へと順次解説を進めていく。社会に出て、ビジネスの現場で必要とするさまざまな知識を一つ一つ話していく。40年以上にわたる実社会における長い経験を基に数々の実例を織り込んで興味深く解説するので、将来必ずや役に立つと思う。	
	英国文化実地研究	イギリスの一般家庭に滞在しながら、イギリスの大学でイギリスの文化、社会、政治、経済、教育について学ぶ。大学での授業は、講義、討論、プレゼンテーションの形態をとり、一人一人の積極的な参加が求められる。また、日帰りの旅行、市内見学、大学の学生との交流等を通してイギリス文化の実体験をする。この研修は春学期休業中に実施される。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目 (学科指定なし)	米国文化実地研究	アメリカの一般家庭に滞在しながら、カリフォルニア州モンテレー国際大学でアメリカ文化、社会の諸相について学ぶ。教室内での授業だけでなく、現地の人を招いてのパネルディスカッション、コミュニティーの人達との交流、フィールドトリップ等を通してアメリカ文化を実地体験する。また、現地の小・中学校を訪問して日本文化を紹介する活動も含まれている。ディスカッション、発表、インタビュー等、英語を使ってインタラクションをすることが中心のプログラムになっているので、英語コミュニケーションに対する積極的な態度が既に備わっていることが重要である。なお、サンフランシスコ市への旅行が研修に含まれている。この研修は春期休業中に実施される。	
	オセアニア文化実地研究	オーストラリア又はニュージーランドの一般家庭に滞在し、現地の大学でオセアニアの文化、社会、政治、経済、言語事情について学ぶ。授業は、講義、討論、プレゼンテーション等の形態をとり、オセアニアの文化事情に対する理解を深めることがその目的である。なお、現地の観光地への小旅行も研修に含まれている。夏期休業中に実施する。	
	カナダ文化実地研究	カナダの一般家庭に滞在し、首都オタワにあるカールトン大学でカナダの歴史、文化、社会、政治、経済、言語事情等について学ぶ。授業での講義、プレゼンテーションを通して、カナダの文化事情を把握し理解することがこの研修の主な目的である。キャンパス外での活動や日帰り旅行もこの研修に含まれている。この研修は夏期休業中に実施される。	
研究演習	研究演習	テキストを読み、資料を調べてプレゼンテーションを行い、討論を行うことで、読解力・リサーチ力・発信力を養うとともに、書く作業を通して、情報を文字にして発信する力も養成する。主なテーマは次のとおり。 ( 2 興梠 一郎) 中国関係等 ( 3 仲野 昭) 企業の行動原理の実際と分析手法等 ( 4 窪田 高明) 神が人にかかって語らせた言葉等 ( 5 富松 京一) 現代スポーツ文化のあり方等 ( 6 浜之上 幸) 韓国語学等 ( 7 岩井 美佐紀) 東南アジアの社会問題等 ( 8 重富 Supaporn) タイ関係等 ( 9 小菅 伸彦) 現代の経済問題等 (10 Aye Chan (英 一文)) 現代東南アジアの歴史・文化等 (11 白銀 志栄) 中国・中国語等 (13 花澤 聖子) 中国の社会・文化等 (16 林 史樹) 文化人類学、韓国関係等 (17 舟田 京子) 言語政策研究等 (18 皆川 厚一) アジアの音楽文化等 (19 春日 淳) 言語学等 (20 高橋 清子) 認知言語学等 (22 青木 ひろみ) 日本語及び日本語教育等 (23 菊地 達也) 宗教と社会に関わる諸問題等 (28 豊島 悠果) 韓国朝鮮又は日本の女性・家族史等	
卒業論文	卒業論文	卒業論文。	
自由選択科目	キャリアデザイン	未だ職歴(=キャリア)を持たない履修生を対象として、職歴を描く力を養う。力とは、スキル、知識及びマインドセットである。世間に同一の家族が存在しないのと同様に、他人と同一のキャリアは存在しない。自身のキャリアを描く、という本質的には孤独な作業の能力を、この科目においては履修生同士の演習を繰り返すことで高めてゆく。もっとも易しいカリキュラムを目指す、自身と向き合うことが易しいとは限らないので多くの気づきを得ることができよう。授業計画には通商産業省が提唱する『社会人基礎力』向上の訓練を含む。「なぜ、いま、ここで、これを学んでいるのか」をより明確にすることで、貴い大学生活を更に充実させる弾みとして欲しい。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	キャリア開発	自己のキャリアを考える時、3つの観点から自己分析をすることが重要である。①自分は何に興味があるのか?②自分の価値観は?③自分の能力は?本コースは、将来のキャリア設計にあたり、最もベースとなる「自分自身の理解」を他者とのコミュニケーションを通じて深めていくユニークなコースである。毎回テーマが与えられ、そのテーマに沿ったグループ討論やスピーチを行う。また、ゲスト講師を適宜招請して業界情報や現場で必要とされるコミュニケーションのノウハウを学習する。本コース終了までに次の能力を習得することを目指す。1) 自己のキャリアビジョンが描ける能力、2) より良い人間関係を築く能力、3) ストレスや悩みを克服する能力、4) 人前で自分の考えを堂々と話す能力。自分が将来進むべき道が分からずに迷っている方、自分自身をどうしたらもっと自由に表現できるのかと悩んでいる方、積極的な自分になりたいと思っている方の履修を歓迎する。	
	ビジネス・インターンシップⅠ	ビジネス・インターンシップは次のような学生のために授業内容が企画された。(1) 自分が実社会でどのように社会人として生計を立てて生きていくのか実感が湧かない学生、(2) 企業とは何か、どのように企業を知ればよいのか、そして企業での仕事とは何なのかを知りたい学生、(3) 企業リサーチやマーケティングの方法を実際に使うことに興味がある学生、(4) 企業に就職することが不安であり、どのように企業に応募して良いのか心配な学生、(5) グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーションを通じて講師や他の学生と意見交換をしたい学生。このインターンシップを最後までやり遂げれば、課題をやり遂げた達成感も得られる。さらに就職活動の際にインターンシップを行ったことを具体的な体験として企業にアピールできる。なお、授業はゲスト講師も含め、15名程度の小グループゼミナール制にして進めていく。	
自由選択科目	ビジネス・インターンシップⅡ	前期ビジネス・インターンシップⅠを履修し、夏季ビジネス・インターンシップを修了した学生がグループディスカッションを通して相互の情報や意見交換を行う。そして、インターンシップで得たデータ内容をまとめ、プレゼンテーションを行い、報告書を作成する。このようなプロセスのなかで、インターンシップにおける方法の評価、コミュニケーションとしての良いプレゼンテーションの仕方、分かりやすい報告書の書き方等を学んでいく。さらに学生個人としての企業の選択の仕方又は企業への志望動機・理由を考えていく。加えて将来の就職活動のために、エントリーシートの書き方の練習や模擬面接も行っていく予定である。そして社会人基礎力のより深い理解を図るため、グループで「ドラマ」をつくり、プレゼンテーションを行う。	
	学習支援活動ボランティア	大学生は、自らの時間を主体的に設計し、勉学、サークル活動及びボランティア活動に励むことができる十分な時間があるといえよう。現在、本学の学生はさまざまな地域支援や海外ボランティアに参加しているが、本ボランティアは教育機関における活動である。本科目は、教育委員会と連携を図り、学校教育機関において既に展開されている学習支援関連のボランティア活動に対し、単位を授与するものである。ボランティア実践については、初回の合同オリエンテーション時に示す3種の公的機関である。本支援活動の目的は、教育機関で行われている継続的なボランティア活動について、教師等ヒューマン・サービスに携わる学生に対し、学校における地域貢献活動を通じて、参加者が児童生徒を支援することの喜びを体験し、他者理解を深め、そして、学校教育について理解を深めることを目的とする。	
	国際ボランティア体験	近年、異文化交流や国際理解の機会(実地体験授業)を要望する学生の声が多く聞かれるようになった。かかる事情を考慮して、大学では、平成14年度から国際教育交換協議会(CIEE)が主催する「国際ボランティアプロジェクト」への参加者の中から希望者に対して単位を認定する制度を導入している。「プロジェクト」を通じて異文化理解と国際交流を実体験することが狙いである。単位取得希望者には、CIEE主催の説明会への出席、報告書の作成と提出、体験談の発表等の課題が課されることになる。	
	インドネシア文化実地研究	春期、夏期の2回、1ヶ月間の語学研修を行う。研修地はインドネシア、東部ジャワ州のマラン市にあるマランセスワラ大学及び中部ジャワ州のジョクジャカルタ市にあるサナタ・ダルマ大学である。午前中は大学での語学研修、午後はチューターとの課外活動及びインドネシアの伝統文化を学ぶ実習を行う。インドネシアの一般家庭に滞在し、大学では日本で学んだ個人個人のインドネシア語習得力の再確認と日本では学べない別の角度から見たインドネシア語を学習し、さらに実際にインドネシアの伝統、文化を学んでもらう。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	ベトナム文化実地研究	毎年夏季休暇中に本学のベトナムの2つの提携大学、ホーチミン市人文社会科学大学とハノイ大学において実践的な語学研修を受けるプログラムである(研修期間全体は自由時間を含め約1ヶ月)。ベトナムでの語学授業はさまざまなタイプの教員と触れる良い機会であり、現地生活そのものも語学力を伸ばす絶好の機会である。現地で越越辞典や越英・英越辞典等、語学学習に不可欠なツールを各自購入すること。通常の授業の他、両校の日本語を学習する学生達との交流会も開催される。	
	タイ文化実地研究	タイのチョンブリにあるブラパー大学で、1日当たり6時間のタイ語の授業を12日間受講する。滞在中、学生はタイ人ホストファミリーの元で生活する。学生のタイ語上達、文化的意識及び動機を高めることを目指す。	
	英語資格基礎Ⅰ	実践的なビジネスシーンで活用できる語彙、リーディング、リスニングのトレーニングにより、ビジネススキルであるTOEICスコア『550点レベル以上』に相当する英語力を身に付ける。すでにそれ以上のスコアの学生にとっても、語彙力と文法力、速読力と速聴力の強化により、さらなるスコアアップが期待できる。さらにTOEFLのアカデミックスキルとして、外国の大学で学生生活を送り、自然科学、社会科学、人文科学を英語で学ぶための『教養と語彙力』『リーディング力とライティング力』を強化する。	
	英語資格基礎Ⅱ	実践的なビジネスシーンで活用できる語彙、リーディング、リスニングのトレーニングによりビジネススキルであるTOEICスコア『650点レベル以上』に相当する英語力を身に付ける。すでにそれ以上のスコアの学生にとっても、語彙力と文法力、速読力と速聴力の強化により、さらなるスコアアップが期待できる。さらにTOEFLのアカデミックスキルとして、海外の大学で学生生活を送り、自然科学、社会科学、人文科学を英語で学ぶための『教養と語彙力』『リスニング力とスピーキング力』を強化する。	
	トライ・中国語	中国語の基礎を集中的に学ぶことで、中国語がどのような言語であるか体験する。授業内容は、中国語Ⅰ前期分(発音と初歩的な文法)に相当することを学ぶ。音楽的な美しい響きを持つ中国語を楽しく学ぶ。	
自由 選択 科目	トライ・スペイン語	スペイン語は世界で3億5千万以上の人々によって話されている国連の公用語である。日本とスペイン・中南米との結びつきはますます強まり、スペイン語を話し、スペイン語圏の文化を理解する人材がビジネス社会や地域社会において求められている。講義を通じ、旅行等で役立つ簡単な日常表現を覚えながら、スペイン語の文法システムを概観する。併せて、スペインや中南米等スペイン語圏の文化を紹介する。受講後、スペイン語への関心が高まったら、来年度選択外国語「スペイン語Ⅰ」に進んでほしい。本講義は良いスタートを切るための下地となることだろう。ここで取り扱う文法の内容は、主に文字と発音、名詞、冠詞、形容詞、前置詞、動詞(現在形を中心に)等である。	
	トライ・韓国語	韓流映画、韓流ドラマ、K-POPS、サッカー等を通じて、韓国語に関心を持つ人達が以前にも増して多くなってきたようである。この授業では、5日間という短い期間で韓国語の初歩の初歩を学ぶことを目的とする。主に焦点を当てることは以下の基本的な事柄である。「ハングル」という独特の文字の習得、音韻体系(母音と子音の発音)、よく使われる挨拶言葉、旅行会話として必要な表現。	
	トライ・フランス語	フランスにいつか行ってみたい、フランス語がどんな言語なのか少しでも知りたい。こうした願いを持つ人のための講座である。フランス語の発音、語彙、基本表現等をポイントを絞って学び、フランスやフランス語圏の文化のミニマル・エッセンスを概観する。フランスに旅行する前に言葉を少しでも学んでおきたい、フランス語を話す知り合いとフランス語を少しでも交えてコミュニケーションしたい、フランス語の音をフランス語らしく発音できるようになりたいといったニーズに応える。フランスやフランス文化についても映像や映画等を使って積極的に紹介する。	
	トライ・ドイツ語	挨拶や自己紹介、趣味、食べ物や飲み物の好み、買い物等、日常的な事柄の表現の仕方についてパートナーとの練習を中心に進めていく。表現練習の中で、発音の決まりや基礎的な文法についても解説する。また、若干だが、ドイツ事情、特にミュンヘンについても触れたい。この授業を通して、ドイツに今まで以上に関心を持ち、ドイツに行ってみよう、あるいはドイツ語を本格的に勉強してみたいという気持ちを抱くことを願っている。	
	トライ・イタリア語	イタリア語の基礎的なしくみを理解し、併せて日常生活や旅行等で使う簡単な会話を勉強する。イタリアの生活や文化にも触れる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
自由 選択 科目	トライ・ロシア語	ロシアを旅する時町で目にするほとんどの標示は独特のロシア文字で書かれている。だから何はさておきこの文字が読めるということが不可欠になる。逆に言えば文字が読めればかなりの強みになるわけである。そして文字さえ読めれば発音はほぼ文字通りなので、それほどむずかしくはない。案外「レストラン」とか「カラオケ」とか馴染みの言葉だったりする。本講座ではロシア語の文字を覚え、発音に慣れるところからじっくりと指導していく。挨拶をはじめ、簡単な日常会話も随時盛り込む。またロシアの生活や文化に纏わる話も交えながら、短期間でロシア語の概略を学ぶ。	
	トライ・アラビア語	アラビア語は、モロッコからイラクに至る北アフリカ、西アジアに暮らすアラブ人(22カ国、2億人以上)が使っている言語で、国連の公用語にもなっている。また、東南アジアのイスラム教徒であっても礼拝の言葉はアラビア語で唱え、聖典コーランをアラビア語で唱えている。アラビア語は10億人を越える世界中のイスラム教徒にとっての共通語だとも言えるだろう。さらに、アル=ジャズィール放送に代表されるアラビア語衛星チャンネルは、英語が支配する現代メディアへの挑戦としても注目されている。このようにアラビア語は現代世界では極めて重要な言語だが、日本では勉強する機会が少なく、勉強している人もほとんどいない。この授業では、食べ物、衛星放送、アニメ等に見られる現代アラブ文化を紹介しながら、アラビア文字と初歩的な文法と会話を学ぶ。	
	トライ・ベトナム語	初めてベトナム語を学習する人を対象に、ベトナム語の発音と綴り字の練習から始まり、いくつかの状況に応じた会話を4日間(1日3時間)という短い時間の中で集中的に学ぶ。	
	トライ・インドネシア語	インドネシア語は文字がアルファベットであり、音も子音と母音の組み合わせが多く、日本人には発音しやすく、また学びやすい言語である。講義時間をフルに使い、現地へ行ってインドネシア人、マレーシア人と簡単なコミュニケーションができる程度になることを目標とする。初歩のインドネシア語文法は複雑ではなく、単語力があればある程度まで上達するので、単語に力を入れる。また、DVDを使用して、現地の文化、伝統等も紹介する。	
	トライ・ポルトガル語	ブラジル、ポルトガル語、5つのアフリカ諸国等、ポルトガル語を公用語とする人々は現在約2億人を数え、世界で7番目に多く話されている言語である。本授業では、最も多くのポルトガル語人口を持つブラジルのポルトガル語を対象とし、どのような言語であるか、その特徴について解説し、初心者向けのポルトガル語習得を目指す。近年ブラジルはめざましい経済発展を遂げ、日本企業の進出が増えている。また、2014年にはサッカーのワールドカップが、2016年にはリオデジャネイロ市でオリンピックが開催されるため、注目度がますます高まっている。授業では、視聴覚教材を使って、Jリーグのサッカー選手や、K-1等の格闘家、ボサノヴァの歌手等、日本でもなじみの深いブラジル人が実際に話している言葉を実際に聞いてみる。	
	トライ・タイ語	In this 4-day intensive, students will be able to see a general picture of the Thai language. They will be introduced to language used in daily life as well as the Thai writing system. (仮訳) 4日間の集中講義で、タイ語概要を掴む。タイの筆記体系と同時に、日常生活で使用する言葉も紹介する。	
教職に 関する 科目	教師論	教職の意義及び教師の役割について、教員の職務内容(研修、服務規律、身分保障の実態等を含む)や学校現場の現状等に触れながら理解し、教師に課せられた使命の大きさ、果たすべき役割等についても具体的事例を交えながら講じ、教職を目指す上で必要な資質の基礎を養う。	
	教育原理	教育の理念、歴史、思想等を選び、教育の意義や学校の社会的意味、公教育のあり方等を考えるとともに現代の学校教育を巡る課題を理解して、教職を目指す上で必要な資質の基礎を養う。	
	教育心理学	教員採用問題を網羅した教育心理学の基本技法・理論の理解を深め、学校現場で活用していくことを目標とする。初期は、教育心理学の概論、自己理解のための性格検査の体験、人格・発達について学び、中期は、知能・学習面の諸理論を習得し、末期は、教育心理学の学校現場での活用について、最新のストレス・マネジメント教育、障害のある生徒の心身発達及び学習過程を具体的事例を採り入れて学習していく。テキストやプリントに基づき進行し、また、ビデオ・OHP・スライド教材も用いる。講義の合間には、性格検査等の個人ワーク及び討論等の小グループ・ワークを導入する。また、受講者が内省的に考えていく過程が大切なので、期間中、適時3回、講義終了20分前に課題に対する「感想レポート」を作成する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職に関する科目	教育社会学	教育社会学とは、教育に関わるすべての営みとそれに関わるすべての社会現象を対象とし、生じている教育問題の構造やメカニズムを明らかにする学問である。本講義では、特に「子どもの社会化」に焦点を当て、(1) 家族・学校・地域社会の状況、(2) 子供の人間関係の構築、ハビトゥス獲得、セルフイメージの確立、(3) 社会における役割観や地位指向の形成が、各々どのように関連しているのかを整理する。(4) 非行や問題行動はどうして起こるのかを分析し、教育基本法第1条にある「社会の形成者として必要な資質を備えた・・・国民の育成」とはどうあるべきかを検討する。	
	教育行政学	私達の住む現代社会は、法律がもとになって動いている。一見関係がないように思われる教育でも、その背景には、法律、行政の制度があって毎日の教育活動が行われている。これらについて基本的な知識を身につけて初めて良き教育者となることができる。そこに教育法規や教育行政を学ぶ必要性が出てくる。今日、教育を取り巻く環境は大きく様変わりしつつある。このことに理解を深めつつ、学校教育に必要な基礎的な法律、制度の仕組みを中心に、教育課程、学校事故等、具体的な問題にも触れ、教育行政についての体系的知識の修得を目指すことにする。	
	教育課程論	各学校は学校の教育目標等を達成するため教育課程を編成する。教育課程編成に係る法体系等を概観するとともに、中学校学習指導要領の「総則」を通して、教育課程に関する基本的な知識を得て、同課題を検討する。	
	英語科教育法Ⅰ	中学校の英語教師を志す人のために、実践的な英語指導技術の習得を目指す。目標は、「なぜ英語を学ぶのか(教えるのか)」について考えること、基礎的な英語教育理論を学び、中学校の授業での応用のしかたを考えること、優れた英語教育実践を学び、自分自身の理想の英語授業指導案を考えることという3つの柱からなる。中学生の指導に焦点を当てるため、Classroom Managementについても折に触れて言及する。前期は英語教育理論の一部を紹介し、教育現場での応用を考える。基本的には講義形式の授業だが、随時教え方を実演し、ディスカッションも重視する。真摯な姿勢と向上心を持ち、きちんと準備して休むことなく授業に臨める学生であること、本学の定めるB基準を満たしていることが履修の条件である。	
	英語科教育法Ⅱ	中学校の英語教師を志す人のために、実践的な英語指導技術の習得を目指す。目標は、「なぜ英語を学ぶのか(教えるのか)」について考えること、基礎的な英語教育理論を学び、中学校の授業での応用のしかたを考えること、優れた英語教育実践を学び、自分自身の理想の英語授業指導案を考えることという3つの柱からなる。中学生の指導に焦点を当てるため、Classroom Managementについても折に触れて言及する。後期は公立中学での授業のビデオの視聴を通して、授業の進め方を分析・ディスカッションする。また、講師自身の、中学・高校・大学・幼稚園での英語教育の経験を生かして、授業で使える楽しい教材・アイデアの数々を具体的に紹介する。真摯な姿勢と向上心を持ち、きちんと準備して休むことなく授業に臨める学生であること、本学の定めるB基準を満たしていること、が履修の条件である。	
	英語科教育法Ⅲ	中学校・高等学校の英語教師を志す3年生及び4年生のために、実践的な英語指導技術の習得を目指す。英語科教育法Ⅱでは扱えない分野についてできれば少人数のゼミ形式で教師と学生で討論をしながら考え、指導技術を高めていく。4年生には、4月、5月の期間、教育実習で行う予定の教材を用いてOral Introduction等の練習を行い、指導技術を検討する場を提供したい。その後は、学生の要望に応じて教員採用試験の準備等に当てる予定である。3年生には、英語科教育法Ⅰで学ぶThe Oral Methodの指導技術に対する考えを深めるとともに、授業全体の流れの中で効果的に用いる活動について検討してもらう。	
	英語科教育法Ⅳ	中学校・高等学校の英語教師を志す3年生及び4年生のために、実践的な英語指導技術の習得を目指す。英語科教育法Ⅲでは扱えない分野について、少人数のゼミ形式で教師と学生で討論をしながら考え、指導技術を高めていく。listening, speaking, reading, writingの指導法から一つ選び、自ら10週間体験学習してその指導法に効果があるかどうか検証する。学期の最後に検証の結果をクラスで共有する。	
	中国語科教育法Ⅰ	高校生に中国語を教える教師として、当然習得しておくべき中国語や中国に関する基礎知識を授業計画に従って学んでいく。中国語の免許を必要としない学生で、中国語の基礎をもう一度確認したい学生にも有意義な内容となっている。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職に関する科目	中国語科教育法Ⅱ	受講者が模擬授業を行い、その模擬授業にコメントを加える形で具体的に中国語の文法の教え方や授業の進め方及びわかりやすい説明の仕方等を指導していく。また、教案の書き方も指導する。模擬授業で使われる教材は、主な文法事項を総復習できるように組み立てられており、教えるべき内容とそれ以外に教授者として把握しておくべき内容にまで触れることによって、受講者の中国語の能力を伸ばすことにも心がける。	
	韓国語科教育法Ⅰ	高等学校の韓国語の授業を行なう際に必要となる能力を養うことを目的として、主に次の事柄を行なう。(1)日本における韓国語教育の歴史と現状(明治維新以降日本の教育制度の中で韓国語教育がどのように位置づけられてきたかということについて意識を深め、問題点を考える。次に、日本の大学と高等学校における韓国語教育の現状を紹介する。)、(2)望ましい入門教材のあり方(授業の中心である教材について、どのような内容のものが適当であるのかについて、文法項目の提示の順序、到達度の画定を中心に議論を行う。)	
	韓国語科教育法Ⅱ	高等学校の韓国語の授業を行う際に必要となる能力を養うことを目的として、韓国語教育法に続いて主に次の事柄を行う。(1)『好きやねんハングル』の教師用マニュアルの概説と指導案の作成(入門用教材を教えるに当たって、言語学や言語教育の観点から知っておかなくてはならない背景知識を考える。また、授業に当たっての指導案の作成も指導する。)、(2)様々な教育法(アプローチ・メソッド・ストラテジー)の検討(第二言語の教授、習得にあたっての様々な理論を紹介する。)、(3)高等学校における韓国語教育の実情(実際に高等学校で指導に当たっている先生が報告した取り組みに関する報告や実態調査を読んでいく。)、(4)模擬授業による実際の教室運営(『好きやねんハングル』を教材として実際に模擬授業を行い、参加者同士で模擬授業の内容の細部にわたって建設的なディスカッションを行う。)	
	道徳教育の研究	道徳は人間が「人間らしく」生きようになるとともに発生してきた。この道徳は人々により思索され、吟味され、次の世代に引き継がれていく。なぜなら道徳教育は私たちがより善い社会を構成し、その中で一人ひとりが善く生きていくためには不可欠であるからである。ではどのような道徳教育がこのために必要なのか。この問いに答えるために、授業では道徳教育に関わる具体的問題を取り上げ、討議を行う。すなわち、それぞれの主張を提示し、その吟味を行うことによって、道徳教育の本質や、その実践を考える。	
	特別活動論	現行の学習指導要領では、体験学習が重視されており、特別活動への期待が高まっている。本講座では、特別活動の内容→学級(ホームルーム)活動・生徒会活動・学校行事→についての指導の原理・方法を習得するとともに、学校の活性化を図るための課題を明らかにしていきたい。授業は、講義・発表等を併用する。	
	教育工学	教育実践現場において、教師によるマルチメディアの授業への導入、学習教材の開発、学級運営の向上、教育問題の解決・改善等、教育学の知識を利用していくことが期待される。このためには、諸種の研究方法や情報機器を利用した効果的活用法を理解し、科学的・論理的思考方法を習得していることが前提となる。教育現場で有効な実践的研究方法、特にアクション・リサーチを習得・体験していくことにより、教育工学の基礎的な視点と分析力が習得されることを目標とする。なおアクション・リサーチとは、問題の発見→計画立案→計画の実行→分析→現場へのフィードバック→さらなる改善点の発見→の円環的な、かつ実践的な研究方法である。	
	生徒指導論(進路指導を含む)	近年、児童・生徒の学校不適応や問題行動が多発し、生徒指導の果たす役割が一層重要になってきており、教員には生徒指導に関する知見や指導力の一層の向上が求められている。本講座では、生徒指導の基本的事項について理論と実践の両面から学んでいきたい。授業は、講義とテキストを中心とした発表・討論を併用する。	
	教育相談	不登校、いじめ、非行問題に教師が適切に対応していくためには、教育相談(学校カウンセリング)を学級活動や生徒指導に採り入れることが重要である。本講義では、基礎的なカウンセリング理論の習熟と、学校場面における具体的な応用について考えていく。本講義の構成は、(1)初期は学校における教育相談の概論とカウンセリングの基礎技法を学び、(2)中期は代表的カウンセリングの諸理論を習得し、(3)末期は予防的なカウンセリング支援や生徒・保護者への関わりについて事例を織り交ぜ、実践方法を検討する。講義形式は、授業内容を概略したプリントを配布し、ビデオ・OHP教材も用いる。講義の合間には、フォーカシング等の個人ワークや討論等の小グループ・ワークを導入する。また、受講者が内省的に考えていく過程が大切であるので、期間中、適時3回、講義終了20分前に課題に対する「感想レポート」を作成する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部アジア言語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職に関する科目	総合演習	教育課程の柱の一つである「総合的な学習の時間」に対する理解を深めると共に各自が課題を設定して調査研究活動を行う。また、それらを生徒に指導するための指導法や指導形態を含めた指導案の作成、模擬授業を実際に行い、実践的取り組みをしたい。最終的には各自の調査研究をレポートにまとめ発表する。	
	介護等体験実習	「介護等体験実習」は原則として特別支援学校で2日間、社会福祉施設等で5日間、併せて7日間にわたり障害を持つ方や高齢者をはじめとする施設利用者に対する介護・介助の実際を見聞し体験する実習である。これらの貴重な体験を積むことによって個人の尊厳、社会連帯の重要性を認識し、教員としての資質の向上に役立てるものである。	
	教育事前事後実習	4年生で実習する学校現場実習のための事前指導である。指導は、本学教職担当者以外に、県・市教育行政機関職員、中・高等学校教員等、外部の専門家を招いて実施する。	
	教育実践実習Ⅰ	「教育実践実習」は、教職課程の履修の総まとめとして、中学校・高等学校において行われる現場実習である。「教育実践実習Ⅰ,Ⅱ」には、現場実習が開始される前に開催される直前講義・実習、千葉県及び千葉市教育委員会の先生方招いての本年度教員採用試験説明会、教育実習終了後（後期）に実施される事後指導が含まれる。	
	教育実践実習Ⅱ	「教育実践実習」は、教職課程の履修の総まとめとして、中学校・高等学校において行われる現場実習である。「教育実践実習Ⅰ,Ⅱ」には、現場実習が開始される前に開催される直前講義・実習、千葉県及び千葉市教育委員会の先生方を招いての本年度教員採用試験説明会、教育実習終了後（後期）に実施される事後指導が含まれる。	

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の場合、収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
英語科目	Freshman English (a) (CSK)	実用的コミュニケーションに必要な英語力の基礎を身につけることを目標とする。特に読解力、聴解力及び発話力の向上を重点的に行うが、語彙力、文法力の補強も行う。読解は、比較的易しい英文を素早く読み理解できるように、聴解は、自然なスピードで話す教員の説明やなじみのある話題に関する英語を理解できるように、発話は、基礎的な会話を行うことができ、簡単な内容についてディスカッションやプレゼンテーションを行うことができるようにする。	
	Freshman English (b) (CSK)	実用的コミュニケーションに必要な英語力の基礎を身につけることを目標とする。特に読解力、聴解力及び発話力の向上を重点的に行うが、語彙力、文法力の補強も行う。読解は、比較的易しい英文を素早く読み理解できるように、聴解は、自然なスピードで話す教員の説明やなじみのある話題に関する英語を理解できるように、発話は、基礎的な会話を行うことができ、簡単な内容についてディスカッションやプレゼンテーションを行うことができるようにする。	
	Sophomore English (a) (CSK)	Freshman Englishで培った基礎をもとに、さらに実用的な読解力、聴解力及び発話力の養成を目指す。読解は、次の3点ができるようにする：比較的易しい英語で書かれた70ページ程度の本を1週間で読むことができる。ネイティブスピーカー向けに書かれた易しい英文を辞書を使って読むことができる。多様なジャンルの英文を理解し、読んだ内容をもとにタスクを行うことができる。聴解は、次の2点ができるようにする：自然なスピードで話す教員の説明を理解できる。やや複雑な内容の英語を聞いて理解できる。発話は、自分で調べた事柄について英語でディスカッションやプレゼンテーションをすることができるようにする。	週2回の授業を日本人教員と英語の母語話者教員が担当。
	Sophomore English (b) (CSK)	Freshman Englishで培った基礎をもとに、さらに実用的な読解力、聴解力及び発話力の養成を目指す。読解は、次の3点ができるようにする：比較的易しい英語で書かれた70ページ程度の本を1週間で読むことができる。ネイティブスピーカー向けに書かれた易しい英文を辞書を使って読むことができる。多様なジャンルの英文を理解し、読んだ内容をもとにタスクを行うことができる。聴解は、次の2点ができるようにする：自然なスピードで話す教員の説明を理解できる。やや複雑な内容の英語を聞いて理解できる。発話は、自分で調べた事柄について英語でディスカッションやプレゼンテーションをすることができるようにする。	週2回の授業を日本人教員と英語の母語話者教員が担当。
	Advanced English (a) (CSK)	Freshman English及びSophomore Englishで培った基礎をもとに、ビジネス英語も取り入れながら、さらに実用的な読解力、聴解力及び発話力の養成を目指す。読解は、次の2点ができるようにする：ネイティブスピーカー向けに書かれた英文を辞書を使って読むことができる。多様なジャンルの英文を理解し、読んだ内容をもとにタスクを行うことができる。聴解は、次の2点ができるようにする：教員が自然なスピードで話す英語の説明を理解することができる。複雑な内容の英語を聞いて理解することができる。発話は、自分で調べた事柄と共に自分の意見も混ぜながら、英語でディスカッションやプレゼンテーションをすることができるようにする。	週3回の授業を日本人教員と英語の母語話者教員が担当。
	Advanced English (b) (CSK)	Freshman English及びSophomore Englishで培った基礎をもとに、ビジネス英語も取り入れながら、さらに実用的な読解力、聴解力及び発話力の養成を目指す。読解は、次の2点ができるようにする：ネイティブスピーカー向けに書かれた英文を辞書を使って読むことができる。多様なジャンルの英文を理解し、読んだ内容をもとにタスクを行うことができる。聴解は、次の2点ができるようにする：教員が自然なスピードで話す英語の説明を理解することができる。複雑な内容の英語を聞いて理解することができる。発話は、自分で調べた事柄と共に自分の意見も混ぜながら、英語でディスカッションやプレゼンテーションをすることができるようにする。	週3回の授業を日本人教員と英語の母語話者教員が担当。
	時事英語 I	世界の主要な新聞紙から、社会・文化・政治経済・情報・言語・教育・科学・環境・娯楽・スポーツ等のあらゆる分野を網羅した記事を題材に、読み、聞き、話し、書く楽しさを育みながら、多角的にそして複眼的に英語運用力を培うことを目的とする。	
	時事英語 II	政治・経済・外交・軍事・環境からスポーツに至るまで多方面の英語ニュースを理解すること、時事的な事柄や問題に関して英語でコミュニケーションを行うことの二つを学ぶ。	
Freshman English I (ML)	実用的コミュニケーションに必要な英語力の基礎を身につけることを目標とする。特に読解力、聴解力及び発話力の向上を重点的に行うが、語彙力、文法力の補強も行う。読解は、比較的易しい英文を素早く読み理解できるように、聴解は、自然なスピードで話す教員の説明やなじみのある話題に関する英語を理解できるように、発話は、基礎的な会話を行うことができ、簡単な内容についてディスカッションやプレゼンテーションを行うことができるようにする。		

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
英 語 科 目	Freshman English II (ML)	実用的コミュニケーションに必要な英語力の基礎を身につけることを目標とする。特に読解力、聴解力及び発話力の向上を重点的に行うが、語彙力、文法力の補強も行う。読解は、比較的易しい英文を素早く読み理解できるように、聴解は、自然なスピードで話す教員の説明やなじみのある話題に関する英語を理解できるように、発話は、基礎的な会話を行うことができ、簡単な内容についてディスカッションやプレゼンテーションを行うことができるようにする。	
	Sophomore English I (ML)	Freshman Englishで培った基礎をもとに、さらに実用的な読解力、聴解力及び発話力の養成を目指す。読解は、次の3点ができるようにする：比較的易しい英語で書かれた70ページ程度の本を1週間で読むことができる。ネイティブスピーカー向けに書かれた易しい英文を辞書を使って読むことができる。多様なジャンルの英文を理解し、読んだ内容をもとにタスクを行うことができる。聴解は、次の2点ができるようにする：自然なスピードで話す教員の説明を理解できる。やや複雑な内容の英語を聞いて理解できる。発話は、自分で調べた事柄について英語でディスカッションやプレゼンテーションをすることができるようにする。	
	Sophomore English II (ML)	Freshman Englishで培った基礎をもとに、さらに実用的な読解力、聴解力及び発話力の養成を目指す。読解は、次の3点ができるようにする：比較的易しい英語で書かれた70ページ程度の本を1週間で読むことができる。ネイティブスピーカー向けに書かれた易しい英文を辞書を使って読むことができる。多様なジャンルの英文を理解し、読んだ内容をもとにタスクを行うことができる。聴解は、次の2点ができるようにする：自然なスピードで話す教員の説明を理解できる。やや複雑な内容の英語を聞いて理解できる。発話は、自分で調べた事柄について英語でディスカッションやプレゼンテーションをすることができるようにする。	
	Media English I (ML)	The Media English course develops the students' ability to understand English as used in the mass media. Coursework covers all skills, including reading, writing, speaking, and listening, and it will also develop students' group discussion skills. (仮訳) マスメディアで使われる英語を理解するための能力を身に付ける。読む・書く・話す・聞くの4技能を含むあらゆる技能を高めるとともに、グループ・ディスカッションに関する技術の向上も図る。	
	Media English II (ML)	The Media English course develops the students' ability to understand English as used in the mass media. Coursework covers all skills, including reading, writing, speaking, and listening, and it will also develop students' group discussion skills. (仮訳) マスメディアで使われる英語を理解するための能力を身に付ける。読む・書く・話す・聞くの4技能を含むあらゆる技能を高めるとともに、グループ・ディスカッションに関する技術の向上も図る。	
	英語総合講座 (ML)	This course is a survey of the grammar of modern English with an emphasis on gaining (a) an overall knowledge of English and (b) skill in the use of English grammar. The course rapidly reviews a wide range of grammar patterns, especially those that cause problems for non-native students. Much effort is spent on getting students to learn to express their ideas clearly and correctly and to use more advanced grammar patterns in their own writing and speaking. The course will be limited to 20 students. (仮訳) (a) 英語の全般的な知識及び (b) 英語文法を使用するためのスキルを習得することに重点を置き、現代英語文法を概説する。特に非ネイティブの学生にとって問題となりやすい広範囲の文法パターンを駆け足で概説する。明確かつ正確に自らの考えを表現する方法や、ライティングやスピーキングにおいて、より高度な文法パターンを使用する方法を学習するためには、多大な努力を必要とする。受講者は20名限定。	
	SALC Learning Course (ML)	This course gives students further opportunities to develop the skills needed to become effective language learners. Students individualise their learning by creating and implementing a learning plan making use of the SALC and other resources effectively. The skills that are learned in this course are relevant for studying any language. (仮訳) 効果的に語学を学ぶことのできる学習者になるために必要なスキルの身につけ方を学ぶ。SALCや他のリソースを有効活用しながら学習プランを立て、実際に学習を進めることによって、個人に見合った学習をしていく。このコースで学んだスキルはあらゆる語学を学習する際に応用できる。	

授 業 科 目 の 概 要 (外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
英 語 科 目	Basic Writing I (ML)	This class focuses on improving English writing through creative genres. Students will develop their overall writing skill through various creative writing genres such as short stories, personal essays, and autobiographies. (仮訳) さまざまな創作様式を通して英語のライティングを改善することに焦点を合わせる。学生は、短編、エッセイ及び自叙伝等のさまざまなジャンルの創作文章を通じて、全般的な文章技術を身に付けることができる。	
	Basic Writing II (ML)	This class focuses on improving English writing through creative genres. Students will develop their overall writing skill through various creative writing genres such as short stories, personal essays, and autobiographies. (仮訳) さまざまな創作様式を通して英語のライティングを改善することに焦点を合わせる。学生は、短編、エッセイ及び自叙伝等のさまざまなジャンルの創作文章を通じて、全般的な文章技術を身に付けることができる。	
	Business English I (ML)	This semester will be focused on developing English language skills used in various business situations, such as using polite language, using the telephone in business settings, making appointments, expressing opinions, making job applications and participating in job interviews. (仮訳) 今学期は、礼儀正しい言葉遣いやビジネス現場での電話応対、アポイントの取り方、意見を言葉で表現すること、求人への応募や採用面接への参加等、さまざまなビジネスシーンで使われる英語の技能を身に付けることに焦点を置く。	
	Business English II (ML)	This semester will be focused on developing English language skills through working on projects that will deal with an overview of certain aspects of business, including marketing and setting up a company. (仮訳) 今学期は、マーケティングや会社の立ち上げを含む、ビジネスのある局面での概要を取り扱うプロジェクトでの共同作業を通して、英語の技能を身に付けることに焦点を置く。	
	Language Lab (ML)	The objective of this course is to learn to recognize and correct your own pronunciation errors. You will study techniques to improve your pronunciation and be exposed to various world Englishes and their accents. Learning to improve your pronunciation requires active participation, as such a large focus is placed on productive skills and student interaction. (仮訳) 本講義の目的は、自らの発音の誤りを認識し、修正することを学ぶことである。発音を改善する技術を学習し、世界のさまざまな英語やアクセントを知る。発音の改善方法を学ぶため積極的な参加が求められる。	
	Oral Communication (ML)	Sometimes, even if your grammar, vocabulary, and pronunciation are fine, you can still have problems with communication. This area of language is called pragmatics, and is the focus of this course. Pragmatics deals with what is appropriate and inappropriate language for different situations, and how people actually use language to interact with other people. In other words, pragmatics is about understanding why and how people are saying something, not just what they are saying. The many examples of 'the right English at the right time' given in this course will help you to make your English sound more natural. (仮訳) 素晴らしい文法、語彙力及び発音を身に付けていても、コミュニケーションに問題を抱えることがあるだろう。この分野は語用論と呼ばれ、本講義の焦点である。語用論は異なった状況において、何を適切、不適切な言語とするか、そして人間が実際にはどのように他者と対話するために言語を使用するかといった事柄を取り扱う。言い換えれば、語用論は人間が何を言っているかということだけでなく、いかにして、どのように何かを言っているのかを理解するものである。適切なタイミングで適切な英語を使用するサンプルに触れることで、英語の発音がより自然なものとなる一助となるだろう。	
	Communicative Grammar (ML)	The course aims to encourage you to analyse and share with the class not only the grammar that you will study, but also the processes of studying/learning grammar. Learn effective study techniques from your fellow students! (仮訳) 文法を学習するだけでなく、文法を学んだり、習ったりする経過をクラスで分析したり、共有することを目的としている。クラスメートと共に効果的な学習方法を身に付けよう。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イベロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
地域言語科目	スペイン語基礎Ⅰ(a)	スペイン語の言語特徴及び言語構造を理解し、読む・聞く・書く・話すという4つの要素を総合的に養うことを目的としている。スペイン語学習においては動詞の活用が極めて重要であり、スペイン語によるコミュニケーションをとる場合、動詞の活用によって人称、数、時制、叙法が判別できる。したがって動詞の活用は基本的な要素である。授業は30人レベルの小クラスで行い（会話は15人レベル）、文法・作文・講読・会話からなる。理論と実践を交互に繰り返すことで、スペイン語の基本的表現を身に付けることを目標とする。言語のみならずスペイン語圏の文化を総体的に学ぶことも視野に入れている。	
	スペイン語基礎Ⅰ(b)	スペイン語学習においては動詞の活用が極めて重要であり、スペイン語のコミュニケーションをとる場合、動詞の活用語尾で人称、数、時制、叙法等が判別できる。したがって動詞の活用は基本的な要素である。スペイン語の言語構造や言語的特徴を理解し、読む、聞く、書くという4つの要素を総合的に養うことを、さらに推し進め、スペイン語に慣れ親しんでいくことが求められる。そのためにも文法理解が何よりも重要である。後期の授業では特に接続法に重点を置いて勉強していく。	
	スペイン語基礎Ⅱ(a)	スペイン基礎Ⅰで獲得した知識をさらに発展させ、より幅広い応用能力と知識を養うことを目的としている。そのために文法力と読解力、会話運用能力を高めることを目指し、多角的な教育を与えるように構成されている。したがって到達目標は、自らの力でスペイン語を読み書き、発信できるようにすることである。そのために日本人及びネイティブによる会話と作文に力点が置かれ、内容重視の講読が行われる。	
	スペイン語基礎Ⅱ(b)	スペイン基礎Ⅰで獲得した知識をさらに発展させ、より幅広い応用能力と知識を養うことを目的としている。そのために文法力と読解力、会話運用能力を高めることを目指し、多角的な教育を与えるように構成されている。したがって到達目標は、自らの力でスペイン語を読み書き、発信できるようにすることである。そのために日本人及びネイティブによる会話と作文に力点が置かれ、内容重視の講読が行われる。	
	スペイン語研究Ⅰ	スペイン語に関する読み物を講読する授業である。文法の知識を活用して文を解読する技術を学ぶ。いわゆる文法訳読方式の授業である。近頃はこの方式は評判が悪い。この方式の授業のみだと困るが、コミュニケーションの授業が用意されている場合、このような文法訳読の方式の授業を行うことによって、読む力を身に付けることができる。読む力は、読むことによってしか、身につかない。	
	スペイン語研究Ⅱ	スペインの文学・思想・歴史・文化に関するスペイン語テキストを精読することを通して、スペイン語の運用能力のよりいっそうの向上を期するとともに、内容のより深い理解を目指すものである。したがって、受講者は十分なテキストについての予習が求められる。アメリカ・カストロの『スペインの歴史的現実』の第一章を読む。この書はスペイン史に関する基本文献であり、これを紐解かねばスペイン史の実相は把握しがたい。履修者はカストロの関連書を読んで、知識を蓄えていることが望ましい。	
	スペイン語研究Ⅲ	秋季、国際的なスペイン語検定であるDELE中級（Intermedio）取得を目指す。毎回、前もって指定された問題（読解、文法、聴き取り各1～2題）を予習した上で出席すること。講義中、学生を指名し答え合わせをしながら、解説をしていく。	
	スペイン語研究Ⅳ	平易なスペイン語で書かれたテキストの「精読・読解」を通して、ラテンアメリカの歴史、文化、政治、経済、社会について理解を深めるとともに、語彙力及び読解力をつけ、より高度なスペイン語の運用能力を養う。具体的には、20テーマのテキストを読み進めながら、ラテンアメリカの歴史・文化・社会を学ぶ。適宜、ビデオを觀賞しながら授業を進める。	
	スペイン語研究Ⅴ	スペイン語専攻の学生に対して、スペイン語で書かれた歴史書を精読することを通じて、スペイン史に対する理解を深め、スペイン語の読解力を高めることを目的とする。ほぼ時間の流れに沿って、スペインの先史時代や古代・中世について学ぶ。そこでは、ローマ帝国の文明やイスラム文明がスペインの形成にどれほどの影響を与えたかについて注目する。	
	ポルトガル語基礎Ⅰ	最も多くのポルトガル語人口を持ち、日本とも歴史的に馴染みの深いブラジル・ポルトガル語を対象とし、日本人とネイティブスピーカー教員による授業を行なう。週5時間の授業内容は、前期・後期を通じて文法（2時間）、会話（2時間）、作文/講読（1時間）とする。前期ではまずポルトガル語の音や綴り、イントネーションに慣れた上で、最も重要である動詞活用、名詞・形容詞の性数変化等を身に付けるとともに、基礎的な会話の訓練を行う。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イベロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
地域言語科目	ポルトガル語基礎Ⅱ	前期の「ポルトガル語基礎」に続き、ポルトガル語の基礎運用能力を身に付ける。文法に関しては初級文法（各時制における動詞活用、直説法と接続法の違い等）をマスターする。作文・講読については簡単な文章作文、新聞記事の読解能力を身に付ける。さらに会話では前期に続いて、よく使われる表現・構文等を利用して、実際に自分の言いたい内容を相手に伝える練習を行う。	
	ポルトガル語基礎Ⅲ	「ポルトガル語基礎Ⅰ及びⅡ」に続き、ポルトガル語の基礎学力の向上を目指す。週4時間の授業内容は、前期・後期を通じて、文法（1時間）、会話（2時間）、講読と作文（1時間）である。文法については、既習の文法事項を確認するとともに応用力を養う。作文・講読では、新聞や雑誌記事を題材に、文法知識、読解力、作文力等、総合的なポルトガル語運用能力を身に付けることを目的とする。会話の授業ではこれらの知識を用いてネイティブスピーカーとの意見交換がスムーズに行えるよう、さらなる能力の向上を目指す。	
	ポルトガル語基礎Ⅳ	前期の「ポルトガル語基礎Ⅲ」の継続である。「ポルトガル語基礎」という授業は翌年度も前期後期に各1コマずつ必修で用意されているが、基本的に3年次以降はより実践的で応用能力を要する授業になる。そのため2年次後期の「ポルトガル語基礎Ⅳ」はこれまで学んだポルトガル語の基礎を総合的にチェックする内容となる。受講生自らも基礎知識の再確認作業を行い、疑問点を解消していく姿勢が必要である。多くの授業で、テキスト以外に新聞記事やビデオ教材等を用いていく予定である。	
	ポルトガル語基礎Ⅴ	学生にポルトガル語の読解及び作文の能力を身に付けさせることを目的としている。毎回の授業では、学生の語彙数を増やすためのポルトガル語の文章が用意され、その教材を用いて作文能力を高めるために適した指導を行う。授業中に使用された文章の内容は、そのまま作文作成の課題のテーマとなる。作文上おかしやすい間違いは毎授業の最初に注意される。	
	ポルトガル語基礎Ⅵ	前期開講の「ポルトガル語基礎Ⅴ」の続きであり、作文能力のさらなる向上を目指す。書き言葉の文章に焦点を当て、学生が特定のテーマに関する自分のアイデアや視点、主張を書き纏めることができるようにする。	
	ポルトガル語総合	時事問題を扱った記事や資料を読みながら、ブラジル研究を行う上で必要不可欠な読解能力を身に付ける。事前に配布された記事や資料を各自で読んでから出席すること。ポルトガル語の映画やドラマの台本を用いた寸劇を通じて自然なポルトガル語の習得を目指す。	
	選択外国語科目	中国語Ⅰ(a)	中国語の基礎を身に付けるための第一歩を固めることを目標とする。中国語は発音が非常に重要なので、初めの数回は母音、子音、声調の習得に特に時間をかける。それから、簡単な文を学習し、初歩的なコミュニケーションが出来るようにする。
中国語Ⅰ(b)		中国語Ⅰ(a)を修了した学生を対象とし、発音の習得を確認しながら、初歩的な中国語を身に付けることを目標とする。場面に応じたさまざまな簡単な文を学習し、初歩的なコミュニケーションができるようにする。	
中国語Ⅱ(a)		中国への旅行・短期研修や日本国内での中国語母語話者との出会い・交流等において体験するであろう場面を想定した会話練習を行う。ペアやグループでのスキット作成やロール・プレイ、インフォメーション・ギャップを利用した練習等、教室内外での現実の言語使用を可能な限り反映させたコミュニケーション型なタスクに基づく言語活動の中で、基本的文法事項や常用文型が身に付くよう訓練する。また、毎回発音のワン・ポイント・レッスンをを行う。	
中国語Ⅱ(b)		中国への旅行・短期研修や日本国内での中国語母語話者との出会い・交流等において体験するであろう場面を想定した会話練習を行う。ペアやグループでのスキット作成やロール・プレイ、インフォメーション・ギャップを利用した練習等、教室内外での現実の言語使用を可能な限り反映させたコミュニケーション型なタスクに基づく言語活動の中で、基本的文法事項や常用文型が身に付くよう訓練する。また、毎回発音のワン・ポイント・レッスンをを行う。	
中国語Ⅲ(a)		中国語の基礎文法を習得済みの学生を対象とする。これまで把握した文法を復習しながら、より高度な聴解力、会話力及び作文力を身に付ける。また、中国語のレベルの向上を目指すと同時に中国社会、とりわけ文化生活方面の事情に対する理解も深める。	
中国語Ⅲ(b)		中国語の基礎文法を習得済みの学生を対象とする。これまで把握した文法を復習しながら、より高度な聴解力、会話力及び作文力を身に付ける。また、中国語のレベルの向上を目指すと同時に中国社会、とりわけ文化生活方面の事情に対する理解も深める。	
スペイン語Ⅰ(a)		スペイン語の「読み」「書き」「聴き」「話す」基礎能力を習得することを目指す。日本人講師が文法指導を担当し、ネイティブ講師が会話演習を行う。外国語上達のコツは大きくははっきりとした声で「音読」すること及び基本の反復である。また、一度に長時間勉強するよりも、毎日少しずつ続けた方が効果的である。一日のサイクルで特定の時間をスペイン語の勉強に当てることを勧める。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イベロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択外国語科目	スペイン語Ⅰ (b)	前期に引き続き、スペイン語の「読み」「書き」「聴き」「話す」基礎能力を習得することを目指す。日本人講師が文法指導を担当し、ネイティブ講師が会話演習を行う。1年次は動詞の現在形を中心に学習する。外国語上達のコツは、大きくはっきりとした声で「音読」すること及び基本の反復である。また、一度に長時間勉強するよりも、毎日少しずつ続けた方が効果的である。一日のサイクルで特定の時間をスペイン語の勉強に当てることを勧める。	
	スペイン語Ⅰ (a)(ポルトガル語専攻)	南米の共同市場が急成長を遂げ、日本を含めた環太平洋経済圏の結びつきが強まる現在、将来ブラジルポルトガル語を使って仕事をしたい人にとり、スペイン語を習得することは極めて重要だ。スペイン語を通じ、ブラジル以外の中南米地域及びイベリア半島の文化、政治経済、歴史にも関心を持ち、視野を広げて欲しい。ポルトガル語の文法知識を前提として、スペイン語の基本文法を習得することを目指す。本講義を修了した後は、「商業スペイン語」「スペイン語学概論」「ラテンアメリカ文学特殊研究」「メキシコ特殊研究」等の研究科目を受講し、スペイン語力を発展させて欲しい。	
	スペイン語Ⅰ (b)(ポルトガル語専攻)	南米の共同市場が急成長を遂げ、日本を含めた環太平洋経済圏の結びつきが強まる現在、将来ブラジルポルトガル語を使って仕事をしたい人にとり、スペイン語を習得することは極めて重要だ。スペイン語を通じ、ブラジル以外の中南米地域及びイベリア半島の文化、政治経済、歴史にも関心を持ち、視野を広げて欲しい。ポルトガル語の文法知識を前提として、スペイン語の基本文法を習得することを目指す。本講義を修了した後は、「商業スペイン語」「スペイン語学概論」「ラテンアメリカ文学特殊研究」「メキシコ特殊研究」等の研究科目を受講し、スペイン語力を発展させて欲しい。	
	スペイン語Ⅱ (a)	「スペイン語Ⅰ」で扱った文法項目（動詞の現在形、目的語、代名詞等）の基礎を確認しつつ、過去の事柄を表現できるようになることを含めて、より幅広いスペイン語能力の獲得を目指す。	
	スペイン語Ⅱ (b)	前期に引き続き、直説法現在形以外の時制を中心に学習する。未来の事柄を表現する時制とともに、直説法、命令法、接続法といった形にも触れていくことによって、より幅広いスペイン語能力の獲得を目指す。	
	スペイン語Ⅲ (a)	接続法・命令法を用いたコミュニケーションに焦点を当てる。接続法は多くの履修生が初めて学ぶ文法項目なので、1年間かけてじっくりと活用と用法を学習していく。併せて、直説法の復習やさまざまな構文の練習も行う。また、スペイン語検定4級、DELE入門～初級の取得を目指す。（※DELE: Diploma de Espanol como Lengua Extranjera スペイン教育省のスペイン語検定）	
	スペイン語Ⅲ (b)	接続法・命令法を用いたコミュニケーションに焦点を当てる。接続法は多くの履修生が初めて学ぶ文法項目なので、1年間かけてじっくりと活用と用法を学習していく。併せて、直説法の復習やさまざまな構文の練習も行う。また、スペイン語検定4級、DELE入門～初級の取得を目指す。（※DELE: Diploma de Espanol como Lengua Extranjera スペイン教育省のスペイン語検定）	
	韓国語Ⅰ (a)	日本語母語話者と韓国語母語話者の2名の教官が担当し、文法と会話の両面を常に反復し、習熟度を高める効果を狙う。また言語背景となる文化的な事柄にもふれるなど、厚みのある言語習得のために工夫を凝らしたい。受講者には、途中下車することなく、楽しみながら韓国語を習得してもらいたい。	
	韓国語Ⅰ (b)	韓国語Ⅰ (a) を継続し、韓国語の基礎習得を目指す。文字や発音を終えて仕組みがわかりはじめると急速に理解度が増し、記号にすぎなかった韓国語が受講者のものとなっているはずである。	
	韓国語Ⅱ (a)	韓国語の入門及び初級レベルの学習を終えた学生を対象とし、中級学習者に求められるさまざまな文法事項を学ぶ。なお、発音の変化を丁寧に学び、話す力と聞く力のアップを目指す。さらに書き取りの訓練を通じてハンガルの書く力と読む力をしっかり身に付ける。	
	韓国語Ⅱ (b)	韓国語Ⅱ (a) を履修した学生又はそれに準ずる学習レベルの生徒を対象とし、韓国語を最大限活かした授業を目指す。簡単な日常会話ができるように、中級レベルで求められる基礎語彙と文型をしっかりと身に付ける。	
	韓国語Ⅲ (a)	韓国語の表現能力を習得することを目指す。授業はすべて韓国語で進行する。会話の習得を行うと同時に、テーマに対する各自の考え方やテーマに基づいて書いた作文等を、授業で実際に発表することを通じて、韓国語の表現能力を高める。	
	韓国語Ⅲ (b)	「韓国語Ⅲ (a)」の内容を引き継ぎ、さらに発展させつつ、韓国語の口頭表現能力を高める。能動的、積極的な参加が望まれる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択外国語科目	フランス語Ⅰ(a)	パリに住むピエールとユゴーという二人の男の子が主人公で、ユゴーのおばさんが住む南フランスの村まで旅をする。親友同士の二人と一緒に田舎の空気を味わいながら、フランス語でよく使われる日常会話を素材としてフランス語の基礎を学んでいく。旅の様子や、ダイアログ、エクササイズ、フランスとフランス語の文化的トピック満載の美しいDVDが付いているので、映像を見ながら楽しく継続して学んでいくことができる。	
	フランス語Ⅰ(b)	前期と同じ教科書を使用し、同じ方針で授業する。パリに住むピエールとユゴーという二人の男の子が主人公で、ユゴーのおばさんが住む南フランスの村まで旅をする。親友同士の二人と一緒に田舎の空気を味わいながら、フランス語でよく使われる日常会話を素材としてフランス語の基礎を学んでいく。旅の様子や、ダイアログ、エクササイズ、フランスとフランス語の文化的トピック満載の美しいDVDが付いているので、映像を見ながら楽しく継続して学んでいくことができる。	
	フランス語Ⅱ(a)	言葉の仕組みの解説だけでなく、文化事項も紹介していく。とにかく話せるようになってもらいたいので、会話やプレゼンテーション等、オーラルの練習を重視する。また、Moodleを用いた情報交換やジュネーブ大学日本語学科とのメール交換なども行い、教室で習った内容の実践も行っていく予定。フランス語だけを使用する授業も1-2回行う。恥ずかしがらず、堂々と振舞うことが求められる。「間違いを恐れず、大きな声で一気にしゃべる。」これが基本である。結果的に、フランス語圏での旅行をスムーズに行える会話能力だけでなく、11月のフランス語検定3級を目指す総合力を身に付ける。	
	フランス語Ⅱ(b)	前期に続き、「使えるフランス語」の習得を目指す。言葉の仕組みの解説だけでなく、文化事項も紹介していく。とにかく話せるようになってもらいたいので、会話やプレゼンテーション等、オーラルの練習を重視する。また、Moodleを用いた情報交換やジュネーブ大学日本語学科とのメール交換なども行い、教室で習った内容の実践も行っていく予定。フランス語だけを使用する授業も2-3回行う。恥ずかしがらず、堂々と振舞うことが求められる。「間違いを恐れず、大きな声で一気にしゃべる。」これが基本である。最終的には、フランス語検定3級レベル以上に到達できるはずである。	
	フランス語Ⅲ(a)	フランスの文化、社会、フランス人の日々の生活に関するテキストを読みながら、フランス語力をさらにアップしていく。ワインとシャンパン、フランスのマンガ・アニメブーム、エッフェル塔の120年、ハートのレストラン、フランス名物ストライキ、原発大国フランス、EUの牽引車フランス等々、さまざまなトピックを取り上げる。また、そのテーマに関する映像、映画、さらにインターネットのサイトにもアクセスし、授業を楽しく有益なものにしたい。キーワードは「楽しい!」。自分の関心や好みを大切にしながら、フランスの言語文化が持つさまざまな側面に触れ、フランス語を学ぶことを通してどのような世界にアクセスできるのかを具体的に見ていく。	
	フランス語Ⅲ(b)	フランスの文化、社会、フランス人の日々の生活に関するテキストを読みながら、フランス語力をさらにアップしていく。ワインとシャンパン、フランスのマンガ・アニメブーム、エッフェル塔の120年、ハートのレストラン、フランス名物ストライキ、原発大国フランス、EUの牽引車フランス等々、さまざまなトピックを取り上げる。また、そのテーマに関する映像、映画、さらにインターネットのサイトにもアクセスし、授業を楽しく有益なものにしたい。キーワードは「楽しい!」。自分の関心や好みを大切にしながら、フランスの言語文化が持つさまざまな側面に触れ、フランス語を学ぶことを通してどのような世界にアクセスできるのかを具体的に見ていく。	
	ドイツ語Ⅰ(a)	ドイツ語の初級文法を理解し、平易なドイツ語を読み、書き、話し、聞く力を身に付けることを目的とする。まず、文法を分かりやすく説明し、その後で対話形式の本文を読み、簡単な練習問題に取り組む。本文(和訳)と練習問題は宿題となる。11月に実施されるドイツ語検定4級合格を目指す。	
	ドイツ語Ⅰ(b)	ドイツ語の初級文法を理解し、平易なドイツ語を読み、書き、話し、聞く力を身に付けることを目的とする。まず、文法を分かりやすく説明し、その後で対話形式の本文を読み、簡単な練習問題に取り組む。本文(和訳)と練習問題は宿題となる。11月に実施されるドイツ語検定4級合格を目指す。	
	ドイツ語Ⅱ(a)	文法の復習も兼ねながら、さまざまドイツ語の表現に触れる。ドイツ語は基本的な文法をマスターすれば読むのは比較的簡単だが、もちろん読むだけではなく、語彙(これが案外重要である)を増やしながらか、表現練習に多く時間を割きたい。ドイツ語検定試験の4級にまだ合格していない人は、まずこの試験にチャレンジしてもらいたい。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イベロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選 択 外 国 語 科 目	ドイツ語Ⅱ (b)	前期と同じテキストを使用しながら、さらに読解力をつける練習をする。聞き話す練習も当然ながら続けていき、できるだけ多くの例文を覚えてもらう。ドイツ語検定試験3級の合格を目指して勉強してもらいたい。	
	ドイツ語Ⅲ (a)	文章読解、対話練習、ヒアリングを通して「読む、話す、聞く」という総合的な力を養成することを目標とする。文章理解、文法説明、文法問題、作文、聞き取り、対話練習の順で進めていく。音楽、携帯電話、買い物、学業等、現代のドイツ文化・生活にかかわるさまざまな事柄をテーマとして扱う。	
	ドイツ語Ⅲ (b)	文章読解、対話練習、ヒアリングを通して「読む、話す、聞く」という総合的な力を養成することを目標とする。ドイツ語Ⅲ (a)に引き続き、同じ教科書を用いてⅢ (a)と同様の授業を進めていく。扱われるテーマは、多文化、食事、環境、博物館等。	
	ロシア語Ⅰ (a)	ロシア語Ⅰ (a) (b)では、基本的な初等文法をマスターすること及び会話を通じて日常生活で必要とされるロシア語を習得することを目標に学習を進めていく。一年でやさしい文章を読むことができ、ロシアに旅行して現地の人々と交流することのできる語学力を習得する。月曜日はスピーキング、リスニングにライティングも加えて、身体を使ってロシア語に慣れていく。水曜日はやさしい会話の他、ロシア語の道しるべである文法のポイントを教科書にそって学ぶ。	
	ロシア語Ⅰ (b)	前期でロシア語を学び始めたあなたもキリル文字を自由に読み、書けるようになって、ロシア語の骨組みにも慣れてきたところだろう。後期はちょっと骨のある文法や表現に挑んで、ロシア語の面白さを知ろう。会話の守備範囲も広げて日常生活のなかに文化的トピックスを入れていこう。ビデオでロシアの姿を紹介する。	
	ロシア語Ⅱ (a)	ロシア語Ⅰで使用した教科書『ジーリ・フィリ』の後半に沿って学習を進める。会話中心の内容だが、まとまった文章もではじめて、訳読の力も付けていく。教科書のテーマにそって他の教材（雑誌、新聞、ビデオ等）も活用し、ロシア語とともに、ロシア人の生活や文化への理解を深める。	
	ロシア語Ⅱ (b)	今までの学習でロシアへの旅行や、ロシア人との交流に必要なミニマムな力はあるが、さらに内容豊かな交流をするためには、文化的な知識を増やし、表現技術を磨く必要がある。ロシア語、ロシア文化の中に興味あるものを見いだすことが、学習の一番のモチベーションとなる。	
	イタリア語Ⅰ (a)	簡単な日常会話を題材として、イタリア語の初歩を学ぶ。基礎的な文法事項の学習と会話表現の練習を並行する形で進め、イタリア語の発音と文法の知識を身に付けるとともに、挨拶、自己紹介、お礼の言い方等、ごく基本的な会話ができるようにする。	
	イタリア語Ⅰ (b)	イタリア語Ⅰ (a)に引き続き、イタリア語の初歩を学ぶ。基礎的な文法の知識を確実にするとともに、過去や未来のできごとを伝える、命令する、等の表現も身に付ける。	
	イタリア語Ⅱ (a)	イタリア語Ⅰに引き続き、さらに文法を深め、聞き取りの力もつける。また、イタリア語の文章を読んだり、イタリア語で表現したりする。	
	イタリア語Ⅱ (b)	イタリア語初級文法をさらに発展させ、表現力を身につける。	
	イタリア語Ⅲ (a)	学生がイタリアの生活や文化を理解し、イタリア人とイタリア語でコミュニケーションがとれるようにすることを目的とする。いろいろな興味深いトピックについて、少人数グループやペアワークで会話練習やロールプレイをし、イタリア語を話すことに慣れる。また併せて中級レベルの文法も確実に身につくように学習する。	
	イタリア語Ⅲ (b)	学生がイタリアの生活や文化を理解し、イタリア人とイタリア語でコミュニケーションがとれるようにすることを目的とする。いろいろな興味深いトピックについて、少人数グループやペアワークで会話練習やロールプレイをし、イタリア語を話すことに慣れる。また併せて中級レベルの文法も確実に身につくように学習する。	
	アラビア語Ⅰ (a)	アラビア語の文字、文法、初歩の会話を学習する。初習者は、まずは字母28文字を習得する。その後徐々に発音や書き取りの練習を重ねて新しい文字に慣れた後に、初級文法を学習する。また、中東アラブ地域の文化に関わる映像・音響素材を随時紹介することで、文化への理解も深める。	
	アラビア語Ⅰ (b)	後期は人称代名詞の説明に入る。アラビア語文法で最も重要なのは動詞である。後期はこの動詞に挑戦し、完了時制と未完了時制を修得する。	
	アラビア語Ⅱ (a)	アラビア語Ⅰの発展編であり、本授業をもってアラビア語文法の学習は終了となる。アラビア語Ⅰで使用したテキストを使ってこれまで学習した内容を復習し、さらに不規則動詞と動詞派生形を学習する一方で、アラビア語の会話表現に関するテキストも用いて、会話表現の中に見られる文法事項を確認していく。なお、アラビア語文法を既に修得済みの学生が出席する場合には適宜対応する予定なので、その際には相談すること。辞書や参考書については最初の授業で紹介する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択外国語科目	アラビア語Ⅱ (b)	アラビア語を実践的に使えるようになることを目的とする。会話表現と文章読解に取り組む。衛星放送局アル=ジャズイーラを筆頭とするアラビア語メディアは世界的に注目されているので、現地の新聞やインターネットの記事、衛星放送の映像等を素材として、まずは辞書の引き方と文章の読み方を学習する。その後は児童向け絵本やアラブ圏の小学校教科書等、平易なテキストを講読する予定。	
	ポルトガル語Ⅰ (a)	最も多くのポルトガル語話者を有する国ブラジルのポルトガル語を勉強する。サッカー選手やボサノヴァの歌手をはじめ、日本でもなじみの深いブラジル人が実際に使っている言葉を身に付ける。すぐに使える会話表現、基礎文法、そしてポルトガル語圏の文化や社会について学ぶ。	
	ポルトガル語Ⅰ (b)	前期に引き続き、ブラジル・ポルトガル語の日常会話と基礎文法を学ぶ。後期の授業では、実際にブラジルでポルトガル語を使いそうな状況を想定してコミュニケーションに必要な表現を学ぶ。これまでに習った基礎文法の応用練習を中心とした授業内容となる。また、ブラジルの文化や社会について紹介したポルトガル語の文章も読んでいく予定。	
	ポルトガル語Ⅰ (a)(スペイン語専攻)	スペイン語学習経験者を対象にした授業となる。スペイン語はポルトガル語とよく似ているため、通常よりアップテンポで授業を進めていく。また、つづりの発音の違いやアクセントの規則の違い、文法の違い等にも十分に留意しながら、本授業で会話力と読解力を付けていくことができる。基礎的な文法、会話と語彙の他、ブラジルの歌や習慣等も紹介し、ポルトガル語を楽しく身に付けることができる内容となっている。	
	ポルトガル語Ⅰ (b)(スペイン語専攻)	前期に引き続き、この授業はスペイン語学習経験者を対象とする。基本的には前期と同様に、スペイン語とポルトガル語が似ていることを考慮した上で、通常よりアップテンポで授業を進めていく。また、つづりの発音の違いやアクセントの規則の違い、文法の違い等にも十分に留意し、本授業で会話力と読解力を付けていくことを目標とする。基礎的な文法、会話と語彙の他、ブラジルの歌や習慣等も紹介し、受講者の関心に添った教材選びをする。	
	ポルトガル語Ⅱ (a)	ポルトガル語Ⅰを履修した学生又は同等の知識を有する学生向け。これまで学んだポルトガル語を復習しながら、ポルトガル語Ⅰで十分に学ぶことができなかった文法や表現を身に付ける。また、新聞やビデオ、音楽等も活用しながらブラジルの習慣や文化に触れる。	
	ポルトガル語Ⅱ (b)	An intensive introductory course that teaches fundamental communication skills—understanding, speaking, reading and writing—and introduces students to the cultures of the Portuguese-speaking world through textbooks exercises, readings, films and music. This course will also bring a deeper understanding of the Brazilian culture and society. (仮訳) 基本的なコミュニケーション技能（理解すること、話すこと、読むこと及び書くこと）を教え、教科書の練習、読書、映画及び音楽を通してポルトガル語を話す世界の文化を紹介する徹底的な初級コースである。本講義を受講することで、ブラジルの文化と社会性をより深く理解することができる。	
	ベトナム語Ⅰ (a)	ベトナム語専攻以外の学生でベトナム語を初めて学ぶ人を対象に、発音と綴り字の練習から始め、日常生活でよく使われる簡単な表現の習得を目指す。	
	ベトナム語Ⅰ (b)	ベトナム語Ⅰ(a)に引き続きベトナム語の基本表現を学んでいく。	
	インドネシア語Ⅰ (a)	言葉の学習を通じて受講生が東南アジア社会とりわけインドネシア社会に関心を抱くようになることを目標とする。周知のように、インドネシア語はアルファベットで表記され、発音もローマ字読みであり、文法にしてもある程度までは学習が容易であるため、単語さえしっかり覚えておけば初歩の会話はすぐ出来るようになる。半期終了時にはサバイバル・レベルのインドネシア語運用力が身につくことを目指して、楽しい雰囲気の中で授業を進めたい。インドネシアの社会事情をより深く理解してもらえよう、適宜ビデオを上映する予定。	
	インドネシア語Ⅰ (b)	言葉の学習を通じて受講生が東南アジア社会とりわけインドネシア社会に関心を抱くようになることを目標とする。周知のように、インドネシア語はアルファベットで表記され、発音もローマ字読みであり、文法にしてもある程度までは学習が容易であるため、単語さえしっかり覚えておけば初歩の会話はすぐ出来るようになる。半期終了時にはサバイバル・レベルのインドネシア語運用力が身につくことを目指して、楽しい雰囲気の中で授業を進めたい。インドネシアの社会事情をより深く理解してもらえよう、適宜ビデオを上映する予定。	
	インドネシア語Ⅱ (a)	前年度にインドネシア語を履修した学生及びインドネシア語の基礎文法を既に修得している学生を対象に、インドネシア語の運用能力をさらに養うことを目標とする。馴染みのある教材を用いて、これまで学んできた文法事項を復習すると同時に、新たな文法知識を身に付ける。また、適宜ビデオを見ることでインドネシア社会に対する理解をさらに一層深める。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択外国語科目	インドネシア語Ⅱ (b)	前年度にインドネシア語を履修した学生及びインドネシア語の基礎文法を既に修得している学生を対象に、インドネシア語の運用能力をさらに養うことを目標とする。馴染みのある教材を用いて、これまで学んできた文法事項を復習すると同時に、新たな文法知識を身に付ける。また、適宜ビデオを見ることでインドネシア社会に対する理解をさらに一層深める。	
	タイ語Ⅰ (a)	タイ国やタイ語に関心のある学生を対象に、タイ語文字読み書きのルールを習得し、正しい発音でタイ文字を読むことができるように指導する。	
	タイ語Ⅰ (b)	タイ国に関心のある学生対象に、タイ語文字読み書きのルールを習得し、正しい発音でタイ文字を読むことができるように指導する。タイ文字で書かれた料理メニューや広告等を正しい発音で読み、内容を把握する。辞書を引き、語彙の意味を調べ、短文の内容を把握する。タイ国小学生の教科書を読み、文化・生活の違いについて理解する。	
基礎科目	基礎演習	これから大学で学び、研究していくための基礎を身につけることを目的とする。高校までの勉強と大学における勉強は違う。自分で調べ、考え、他者の意見も踏まえて、自分の考えを口頭および文章によって説得的に伝えていく能力が求められる。テーマの探し方、文献・情報の検索の仕方、テキストの読み方、データの処理法、プレゼンテーションの方法、レポート・論文作成の方法等の基礎を、実践的に学ぶ。	
	情報基礎Ⅰ	ITの基礎力を育成する。企業へのメール、情報検索と収集、案内文の作成等のビジネスでの活用も意識した実践的な学習をする。また、情報モラル、e-mail、Internet、WordといったITの基礎からITを活用した日本語での表現力まで習得する。コンピュータを勉学に活かし、社会人に必要とされるIT能力の基礎を培うことを目標にしている。インターネットを利用して、文字・音声・静止画・動画・CG等のマルチメディアを活用したWBT(Web Based Training)講座であるため、各ステップを自分のペースで自由な時間に学習でき、学内でも自宅でも受講できる。	
	情報基礎Ⅱ	ITの基礎力と応用力の強化を目的とする。企画書やプレゼンテーション資料の作成、データ分析と報告書のまとめ方等、ビジネスでの活用をも意識した実践的な学習によって、Power Point、ホームページの基礎、WordとExcelの応用を習得する。コンピュータを勉学に活かし、社会人に必要とされるIT能力の強化を目標にしている。インターネットを利用して、文字・音声・静止画・動画・CG等のマルチメディアを活用したWBT(Web Based Training)講座であるため、各ステップを自分のペースで自由な時間に学習でき、学内でも自宅でも受講できる。	
	日本語表現力基礎	大学生として、やがては社会人として必要とされる、日本語表現力の基礎を身につけることを目的とする。講義の聴き方、ノートの取り方、文章の読み方、目的に応じた話し方、情報の調べ方・整理の仕方、効果的な思考法、文章の読み解き方、レポートの書き方、プレゼンテーションの仕方等、日本語の表現方法を基礎から総合的に学ぶ。日本人学生は、より正確で、幅広い日本語表現方法を学ぶことにより、その表現力をいっそう高めることができる。日本語を学ぶ留学生も同様である。インターネットを利用した講座であるため、自分のペースで自由な時間に繰り返し学習でき、学内でも自宅でも受講できる。	
	本を読む	一冊の本を読み通すことを通じて、本を読む面白さ、奥深さを体験し、読書する習慣を身につけてもらうことを企図したものである。さまざまな分野の教員が自らの専門の見地から、学生に読んでほしい本（新書等）を推薦している。本を推薦した教員は、本に書かれていることを解説するというよりも、読者自身が感動したり気づいたりしたことを、対話によって引き出し、考えを深める手助けをする。この授業を契機として、これからの読書経験を豊かなものにして欲しい。	
	歴史学Ⅰ	高校までの授業で学んだ日本史は、何年にどのような事件が起きたのか、という歴史的事実のみである。しかし、本来歴史学とは、史料をもとに考える学問である。日本古代史をテーマとして、考える日本史を講義する。日本史が暗記科目であるという意識からの脱却を目指したい。	
	歴史学Ⅱ	「近代化遺産」は、「近代遺跡」とも呼ばれ、幕末・明治以来日本が近代化していく中で形成された遺跡のことである。たとえば、東京駅丸の内口のレンガ駅舎、横浜に残るかつての船の修理施設（現在の「ドックヤードガーデン」）等である。身近な歴史的建造物を通じて歴史的なものを見方を学ぶ。本講義では西日本のものを取り上げる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎科目	哲学Ⅰ	合理性と宗教性の両方がソクラテスの哲学的な活動と生き方を動機づけ方向付けているわけであるが、その弟子プラトンがしっかりとこの姿を見て学んだのである。プラトンの思想は合理性と宗教性とが一つの見事な全体を成す思想となり、他者との合理的な言説のやりとりを通じて人間の魂の浄化と神的な知への上昇をめざす思想となったのである。理性と理性を超えたものとの間で何が起きているのか。この授業ではそれを考えていきたい。	
	哲学Ⅱ	前期で学んだプラトニズムの原型を基礎にしつつ、西洋の文化や思想は新たな展開を見せてくる。西洋文化の第二の原型とあって差し支えないその展開とは、キリスト教の台頭である。西洋の古典古代文化は、キリスト教から見れば異教である。それにもかかわらず、キリスト教は自らの思想の基盤としてプラトニズムを利用したのであった。その結果、キリスト教文化には、プラトニズムを反映する理論的な思索や文化的なパラダイムが多く見られ、その最も特徴的な要素は主に次のキリスト教哲学者の思想に現れている。その思想の展開はプラトニズムの系譜と言って良いものである。後期はこれを見てみたい。	
	倫理学Ⅰ	「現代」という時代を、「日本語」や「日本文化」と関わりながら生きている我々は、これらのものによって、どのように「方向づけ」られているのだろうか。この講義では、さまざまなテーマをとりあげて、こうした「方向づけ」について考えていく。	
	倫理学Ⅱ	人と人が関わりあう時、言葉と言葉が交差し、これにより意味が生まれたり、取り替えられたりする。言葉一つで倫理はそのありようを変えてしまう。この講義では、言葉と言葉の関わりあいによって、倫理や意味がどのように生成変化するかを、具体的に感じとりつつ、考えていきたい。	
	宗教学Ⅰ	まず、宗教とはいかなるものを指すのか、それを理解するための手段である宗教学とはどんなものであるのかを解説する。その後で、宗教学の視点と手法を用いて、日本の宗教伝統、国家神道と天皇制、新宗教と現代の宗教問題(オウム真理教や江原啓之)について考察する。	
	宗教学Ⅱ	宗教学Ⅰで学んだ理論的な事柄を背景として、現在世界人口の半数を占めるセム系一神教の具体的な信仰形態、特徴、思想について基本的諸知識を提供する。	
	文学Ⅰ	国際化時代にあつて、異文化理解は必須の課題であろう。そのためには、さまざまな方法があるが、世界の国々の文学作品を通して、諸国民の考え方・感じ方、つまりは「心性」を探り、併せて当該時代の「社会の在り様」を見聞するのも、一方法であろう。本授業では、「世界文学とは何か」、「どんな作品を読んだらよいか」を皮切りに、ドイツ・フランス・ロシア・英米文学等の主要文学作品(小説・戯曲等)を鑑賞・分析しながら、それぞれの国の文学の特性を探り、上述の目的にアプローチする。講義資料として、折りに触れて、DVD等映像も利用する。	
	文学Ⅱ	国際化時代にあつて、異文化理解は必須の課題であろう。そのためには、さまざまな方法があるが、世界の国々の文学作品を通して、諸国民の考え方・感じ方、つまりは「心性」を探り、併せて当該時代の「社会の在り様」を見聞するのも、一方法であろう。本授業では、「世界文学とは何か」、「どんな作品を読んだらよいか」を皮切りに、ドイツ・フランス・ロシア・英米文学等の主要文学作品(小説・戯曲等)を鑑賞・分析しながら、それぞれの国の文学の特性を探り、上述の目的にアプローチする。講義資料として、折りに触れて、DVD等映像も利用する。以上、目的・内容は文学Ⅰと同じだが、扱う作家・作品・講義資料等は異なるので、文学Ⅰを受講した学生も引き続き受講して欲しい。	
	美術史学Ⅰ	日本を除く東洋諸地域(南アジア、東南アジア、中央アジア、東アジア)の仏教美術について概説する。各地域の仏教美術の代表的作例、世界遺産等を取りあげ、その伝播と変遷の様相について理解を深めることを目標とする。スライド、ビデオによる作品鑑賞を交えつつ講義を進める。	
	美術史学Ⅱ	日本の仏教美術について概説する。飛鳥時代から鎌倉時代までの仏像彫刻の代表的作例を取りあげ、同時代の東アジア美術の様相に言及しつつ、日本の仏教美術の展開について理解を深めることを目標とする。スライド、ビデオによる作品鑑賞を交えつつ講義を進める。	
言語学Ⅰ	人間の「ことば」について考える入門の授業である。その機能と構造はもちろんのこと、人間の認知能力とのかかわりや、社会、文化といった言語外との関係をも視野に入れた広い立場から考察していく。ただし、あくまでも身近な具体的事例を分析することを重んじる。すべての事柄をまんべんなく取り上げるのではなく、いくつかのトピックを取り上げる方式で授業を進める。ことばの研究がふつうに考えられているより広い地平へと通じていることを知ることもこの授業の目標の一つである。		

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎科目	言語学Ⅱ	「ことばの意味」について考える入門の授業である。ことばの意味とは何か、ことばの意味の構造はどのようになっているかを、あくまでも身近な具体的事例を分析しながら考えていく。人間の認知能力との関わりや、社会、文化といった言語外との関係をも視野に入れた広い立場から考察していきたいと思う。すべての事柄をまんべんなく取り上げるのではなく、いくつかのトピックを取り上げる方式で授業を進める。ことばの研究がふつうに考えられているより広い地平へと通じていることを知ることもこの授業の目標の一つである。	
	社会学Ⅰ	社会学が扱うのは「社会＝人と人との関わり」で、家族、教育、労働、宗教、経済、政治、犯罪等、私たちを取りまく身近な環境にあるものすべてである。社会学は、このような人間に関する現象や人間生活のしくみ（制度）を観察し、分析し、理解することによって、現代がどのような社会なのかを明らかにしようとする学問である。日常の身近な例を取り上げ、個人のパーソナリティや社会的行為に注目する「個人から社会へのアプローチ」と個人間の「相互作用から社会へのアプローチ」から社会のしくみを読み解き、社会学的な思考や考え方を学んでいく。	
	社会学Ⅱ	社会学が扱うのは「社会＝人と人との関わり」で、家族、教育、労働、宗教、経済、政治、犯罪等、私たちを取りまく身近な環境にあるものすべてである。社会学は、このような人間に関する現象や人間生活のしくみ（制度）を観察し、分析し、理解することによって、現代がどのような社会なのかを明らかにしようとする学問である。自分の身の回りからより広い社会へと視野を広げ、背景にある社会構造の視点（社会から個人へのアプローチ）から現代社会のさまざまな現象や社会問題（例えば、学校教育、宗教、少子高齢化、グローバル化、格差の拡大、不平等化等）について考えていく。	
	法学Ⅰ	法学の基本的な知識を得ることを目的とする。法学とは実際に社会で通用している「法律」を対象とする学問なので、社会に対して目を向け、そこから敏感に何かを感じ取るという姿勢が大切になる。そこで、本講義においては、具体的な模擬的事案を用いて、その事案の中に存在する法について学んでいくという手法を採る。進行状況によっては、テキスト内容とは別に時事的問題について取り上げることもある。	
	法学Ⅱ	法学の基本的な知識を前提にして特に「判例」に着目して勉強を進める。判例には、裁判所に持ち込まれた争いを法律を用いて解決した際に下された判断について、結論に行き着いた理由や考え方が書かれている。そのため、判例は法と社会の関係や法についての考え方を学ぶ絶好の教材でもある。判例を通じてさまざまな法の基本原理を学びとっていく。	
	経済学Ⅰ	国内総生産（GDP）のしくみとその決定メカニズム、経済成長と景気循環、生産と消費、物価とインフレーション、対外経済取引と国際収支・為替レート、財政と金融政策等、マクロ経済学の基本的な概念、分析手段等について解説する。経済学的な考え方を身につけて、現実の経済を見る目を養うことにより、新聞等で目にする機会の多い景気の動きや経済政策の解説記事等を十分に理解できるようになることを目標にする。	
	経済学Ⅱ	経済理論や経済政策の歴史的変遷、需要と効用、企業と生産、消費者余剰と生産者余剰、市場と価格メカニズム、競争と独占、外部経済と外部不経済（公共財の理論）等ミクロ経済学の基本的な概念、主な学説の基本内容等について解説する。経済学的な考え方を身につけて、現実の経済を見る目を養うことを目的とし、規制緩和の意味や、経済と環境のかかわり等についても理解できるようになることを目標にする。	
	心理学Ⅰ	大学生という時間的にゆとりのある“モラトリアム”の時期には、自己理解を深め、将来に向けた自己成長のために心理学を学習することは意義深い。本講義では、主に1・2年生を対象とし、心理学の入門として、心理学の諸種テストを体験することにより、個人の自己理解・自己洞察を深めることを目標とする。講義形式は、テキスト各章のテーマに基づき、恋愛や職業選択等の身近な題目について、各種心理テストを体験し、それについての解説を行う。また、講義内容を補足したプリントを利用し、課題に対する小グループ討論も行う。受講者が内省的に自己理解を深めていく過程が大切であるので、期間中、適時3回、講義終了20分前に課題に対する「感想レポート」を作成する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎科目	心理学Ⅱ	本講義の受講者の大多数は、将に“若者”（青年期）の最中にあり、卒業後、社会人としての人生生活を前にした基盤となる重要な時期を迎えている。大学生は、4年間という一種“モラトリアム”の中で、自分自身のアイデンティティを形成していくことであろう。しかし、この青年期は、さまざまな社会的な影響を受け、ストレスや悩みにさらされる時期であり、精神的な疾患が顕著になってくる時期でもある。本講義は、同世代によくみられる心理的特質及び精神的な問題について理解を深めることを目標とする。その結果、自分自身の確固たるアイデンティティ形成に役立て、さらに、他人への支援にも役立てることを期待する。	
	教育学	我が国の学校教育制度の現状及び近年の改革動向を把握することを目的とする。義務教育学校では頻りに学級崩壊やいじめが話題となり、不登校児童生徒の出現率や高等学校での中途退学者の発生率は低下せず、子ども達の学校教育への不適応が顕著となっている。大学は全入時代を迎えて伝統的な高等教育が揺らぎ、新しい方向を模索している。各々の学校の教育目的や内容、達成されるべき学力、教員の指導力がこれほど論議され、さまざまな角度から検討されて、改革に次ぐ改革が繰り返されている時代は今をおいてないだろう。こういった状況を踏まえ、各国の教育制度も比較しながら、望ましい教育制度とはどうあるべきなのかを探っていきたい。	
	経営学Ⅰ	経営学の主たる研究領域を構成する組織論と戦略論のうち、組織論に関する入門的講義を行う。組織論は、さらにマクロ組織論（狭義の組織論）とミクロ組織論（組織行動論）に大別できるが、講義の順序としては、まずマクロ組織論を取り上げ、次いでミクロ組織論に言及する。	
	経営学Ⅱ	経営学の2つの研究領域である組織論と戦略論のうち、経営学Ⅰの組織論の続編として、経営学Ⅱでは戦略論について講義する。ただし、組織論と戦略論はほぼ独立した分野であるから、組織論の知識がなくとも、戦略論の受講に支障はないはずである。	
	統計学Ⅰ	データ解析の実践を主目的とし、現実の統計データの記述に関する基本事項から出発し、データ解析の基本と考えられる回帰分析までを講義する。実践演習を多く取り入れた授業内容であり、必要上、パソコンを用いた授業となるが、パソコン初心者者を考慮した授業を心がける。パソコンの初心者には情報基礎を併せて履修することが望ましい。	
	統計学Ⅱ	前期の統計学Ⅰで学んだ回帰分析を基礎として、主成分分析、因子分析、判別分析、クラスター分析等々の多変量解析を中心とした講義を行う。授業は統計解析の実践演習を主として行う。統計データ処理に興味を持つ人にとって、統計解析の醍醐味を満喫することができる授業内容である。統計解析ソフトとして、SPSSを使用するが、随時、Excel等の表計算ソフトも併用していく。	
	生物学Ⅰ	人体各組織の構造と機能について、次いで細胞の構造と機能、特にエネルギー獲得方法と細胞の運動について理解を深める。生物学Ⅱも合わせて履修することが望ましいが、必須ではない。途中で数度小テストを課し、自己採点により理解を深める。講義時間外に、目黒寄生虫館と国立科学博物館自然教育園の見学により、生物相互の関係について体験的に学ぶ。	
	生物学Ⅱ	生物が生まれ出る時に何が起きているか、卵・精子形成について学び、生物を構成する設計図、遺伝子とその働きについて、遺伝子発見までのストーリーを交えつつ勉強する。遺伝子解析により急速に進みつつある生物分類体系（＝進化）についても理解を深め、我々生物の歴史を概観する。そして我々動物の体内で常に起きている情報伝達・防御反応についても学ぶ。生物学Ⅰ（前期）を履修していることが望ましいが、必須ではない。途中で数度小テストを課し、自己採点により理解を深める。講義時間外に、国立科学博物館自然教育園の見学により、生物相互の関係について体験的に学ぶ。	
	化学Ⅰ	化学という学問を一口で表すと、「物質を扱う学問」と言える。生きていく上に必需である、空気、水、食物等々全て物質である。すなわち、物質は私達の身の回りに在る全てのものである。だから、化学はとて身近なじみやすい学問だ。化学を知ると日常生活にも役に立つし、いろんなことに興味がわいてくる。そこで、化学に興味を持ってもらえるように、基礎的な事柄を易しく講義する。	
	化学Ⅱ	化学という学問を一口で表すと、「物質を扱う学問」と言える。生きていく上に必需である、空気、水、食物等々全て物質である。すなわち、物質は私達の身の回りに在る全てのものである。だから、化学はとて身近なじみやすい学問だ。化学を知ると日常生活にも役に立つし、いろんなことに興味がわいてくる。そこで、化学に興味を持ってもらえるように、基礎的な事柄を易しく講義する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎科目	物理学 I	ミクロとマクロをテーマに19世紀までの近代物理学を文系的視点と生活者の立場で学び、生きる力を身につける。難しい数式を使わずに身近な事柄を通して自然科学を学び、論理的洞察などの科学的思考力を養い、非言語能力（図や記号、数字を読み解く力）としての数学のセンスも磨く。身に付けたことは就職でのSPI対策や留学のTOEFL対策にもなるのはもちろんのこと、自然を見る目が変わり、世界が今までと違って見えてくる。	
	物理学 II	時間と空間と確率をテーマに20世紀に明らかになった現代物理学を難しい数学を使わずに文系の視点から学ぶ。SPI対策や留学のTOEFL対策になることはもちろんのこと、時間と空間の科学は私たちの世界観を豊かにし、偶然に支配され観測にも依存する物質たちの挙動を知ると、物質にも生命の源を見いだすであろう。時間とは何だろうか？人の運命は決まっているの？エネルギーって一体何だろうか？生命とは？授業の中で今まで知らなかった新しい発見がある。	
	自然科学概論 I	人類はおよそ200万年の昔から、宇宙や地球の自然現象と闘いながら、これを理解し、利用する中で、今日の科学・技術文明を築きあげてきた。さまざまな発明発見は、人類の生活と自然観を変革した知的遺産である。科学・技術の本質とは何か。とかく、文科系の学問には遠ざけられがちな科学・技術を人間、社会との相補的発展から、その本質に迫りたい。自然科学に対する新しい視点となる。	
	自然科学概論 II	今日の生活が、科学・技術の恩恵なしには考えられないことは、誰もが認めることだが、一方で、ますますそのあり方が問われている状況である。産業革命期以降の急速な科学・技術の発展を分析する中で、人類と自然との真の共存とは何かに対する展望、突破口を見い出したい。	
	体育・スポーツ	( 5 富松 京一) テニス、カヌー&キャンプ、オリエンテーリング&登山 ( 67 市瀬 良行) フットサル、卓球、フライングディスク、フィットネス、マウンテンバイク・ツーリング ( 93 小関 清美) バスケットボール、スクーバダイビング、ダイエットエクササイズ、実践急法、スキー (180 井島 章) 武道・剣道 (187 江川 潤) バドミントン (188 江藤 幹) バレーボール (196 佐藤 伸一郎) 武道・柔道 (206 土井 忍) ダンス (221 吉川 滋) 武道・合気道	
研究科目 (イペロアメリカ言語学科指定)	イペロアメリカ研究入門	各専攻の専任教員が、それぞれの専門分野の学問領域について、分かりやすく説明・解説する。研究入門という名称ながら、専門性よりも一般性を重視し、イペロアメリカ地域の言語、文学、文化、社会、経済、政治等の幅広い知識を与えることを目的とし、後期の専門分野のプログラム選択及び研究演習・卒業論文への導入部分を構成する。 (オムニバス方式/全15回) ( 36 本田誠二/2回) イペロアメリカの文学史と現代文学の特徴等 ( 58 S・ゴンサレス/1回) イペロアメリカの言語と現代文化の特徴等 ( 59 高木耕/3回) イペロアメリカの政治史、講義全体の導入・まとめ ( 74 青砥清一/1回) イペロアメリカにおける言語の特徴と分布等 ( 77 奥田若菜/1回) ブラジル社会の特徴と文化等 ( 78 吉野朋子/1回) ポルトガル語の特徴や言語的位置づけ等 (223 江藤一郎/1回) スペイン語の特徴と他言語との比較等 (224 A・プラーボ/2回) イペロアメリカの社会と文化等 (225 柳沼孝一郎/2回) イペロアメリカの歴史及び日本との関係等 (226 ハビエル・カマーチョ/1回) スペインの言語と現代文化の特徴等	
	スペイン語学概論 I	スペイン語の児童文学を読みながら、スペイン語の文法構造について講義する。とりわけ、点過去と線過去、接続法、定冠詞等、初級学習者にとって理解の難しい項目について、物語の文脈に沿った形で談話における役割を考察する。その他、プリントを配布し、言語学に関する概説も行う。	
	スペイン語学概論 II	スペイン語の児童文学を読みながら、スペイン語の文法構造について講義する。とりわけ、点過去と線過去、接続法、定冠詞等、初級学習者にとって理解の難しい項目について、物語の文脈に沿った形で談話における役割を考察する。その他、プリントを配布し、言語学に関する概説も行う。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イベロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究 科目 （イ ベロ ア メ リ カ 言 語 学 科 指 定	スペイン語音声学Ⅰ	授業の前半の30分は理論の授業である。スペイン語の調音音声学を、外国人のためにスペイン語で書かれた音声学の教科書(Sanchez y Matilla: Manual practico de correccion fonetica del espanol, ESGEL, Madrid, 1984)を使って学ぶ。日本語の調音器官、調音点及び調音法の用語も学ぶ。英語、日本語の音の違いも指摘する。後半は短い文や虫食いの文を聞き取って穴埋め等を行う聞き取りの練習である。即ちCALL教室でdictation( dictado)の授業を行い、スペイン語独特の音の繋がりを聞き取るだけでなく、スペイン語の単語力アップも目的にしている。	
	スペイン語音声学Ⅱ	前期の音声学の復習と音韻論を学ぶ。スペイン語の単音がその発音される環境によって、少しずつその調音点を変えること、即ち音素と条件異音の考えを学ぶ。単語は音の連続からなり、また文は単語同士がつながって発音されるのが、スペイン語では普通である。これを耳で聞いて、頭で文法的に理解することがスペイン語の発音を聞き取ることであり、スペイン語会話がうまくなるこつである。授業の後半ではスペイン語会話を聞き取って書く、即ちdictado (dictation) の授業になる。英語で書かれたクイズ形式の音声学、音韻論の教科書(Jerald R. Green: Spanish Phonology for teachers, 1970)を使う。	
	スペイン語史Ⅰ	スペイン語は、ラテン語から生まれたロマンス語の一つで、フランス語やイタリア語と姉妹関係にある。ローマ帝国に支配され、その言葉ラテン語のスペイン方言からスペイン語が生まれたのである。スペイン語史を学ぶことは、スペインの歴史を学ぶことである。ゲルマン民族の大移動のために、5世紀にスペインにやってきた西ゴート族に支配された影響で、英語やドイツ語と共通する単語が存在する。また8世紀にイスラム教のムーア人に侵入され、それから8世紀に亘り支配されたためにアラビア語起源の単語が4千もある歴史を、歴史言語学の観点から講義する。	
	スペイン語史Ⅱ	語史を通時的に変化の歴史と捉えて形態だけ学ぶのは無味乾燥と思われるので、中世スペイン語の古典作品を現代スペイン語訳と対照させながら読み進み、現代の「西和辞典」を使って、内容を理解しながらどのように言葉が変化したかを講義する。「古きを温めて新しきを知る」ことを体験させたい。スペイン語史Ⅰでは、スペインの歴史と語史を重ねて教えているが、前期受講しなかった学生のことも考えて、作品購読をしながら、語史にも触れていく予定。	
	アメリカスペイン語特殊研究Ⅰ	スペイン語がスペインからアメリカへ持ち込まれた時期にどのようなものであったか、またその持ち込まれたスペイン語がその後アメリカにおいてどのように変遷していったかを、スペイン語で書かれた原著の文献を読みながら学び、考察していく。	
	アメリカスペイン語特殊研究Ⅱ	現在のアメリカ大陸の色々な地域又は国のスペイン語に各々どのような特徴があるのかを、音声、文法、語彙の面から見ていく。そのために、スペイン語で書かれた原著の文献を読みながらそれらを学習し、考察する。	
	日西語対照研究Ⅰ	母語である日本語とスペイン語とを比較する目的で開講されている。ただ、即座に疑問がわいてくるかも知れない。本当に比較することは可能か、何のために比較するのか。比較が難しそうに思えるのは日本語とスペイン語の表記システムの違いにも理由がある。もちろん文法でも両言語は大きく隔たっている。この授業の目的の一つは日本語で通常使われる表現を単語毎にスペイン語に置き換えても、往々にして意図が通じないことを知るためでもある。	
	日西語対照研究Ⅱ	母語である日本語とスペイン語とを比較する目的で開講されている。ただ、即座に疑問がわいてくるかも知れない。本当に比較することは可能か、何のために比較するのか。比較が難しそうに思えるのは日本語とスペイン語の表記システムの違いにも理由がある。もちろん文法でも両言語は大きく隔たっている。この授業の目的の一つは日本語で通常使われる表現を単語毎にスペイン語に置き換えても、往々にして意図が通じないことを知るためでもある。	
	商業スペイン語Ⅰ	本講義では、ビジネススペイン語の「プロ級」を目指す。主に次の項目についてスペイン語の演習を行う。スペイン圏の社会インフラと企業社会、経済記事、契約書類、財務諸表、調査報告書、スピーチ。	
	商業スペイン語Ⅱ	本講義では、ビジネススペイン語の「プロ級」を目指す。主に次の項目についてスペイン語の演習を行う。スペイン圏の社会インフラと企業社会、経済記事、契約書類、財務諸表、調査報告書、スピーチ。	
	スペイン語圏マス・コミュニケーション論Ⅰ	このコースの主要な目的は、マス・コミュニケーションの原理を知り、さまざまな伝達手段におけるコンテンツの研究を通じて、スペイン語圏の文化的背景と現状に関し意見を考え述べることである。	
	スペイン語圏マス・コミュニケーション論Ⅱ	このコースの主要な目的は、マス・コミュニケーションの原理を知り、さまざまな伝達手段におけるコンテンツの研究を通じて、スペイン語圏の文化的背景と現状に関し意見を考え述べることである。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目 (イペロアメリカ言語学科指定)	スペイン語スピーチ・コミュニケーションⅠ	新聞、ラジオ、テレビ、書籍といったマスコミュニケーションの手段を通じて、スペイン語による会話を学ぶことを目的とする。同時に、スピーチコンテストのための基本や、公式的な場での言葉の使い方も学ぶ。	
	スペイン語スピーチ・コミュニケーションⅡ	新聞、ラジオ、テレビ、書籍といったマスコミュニケーションの手段を通じて、スペイン語による会話を学ぶことを目的とする。同時に、スピーチコンテストのための基本や、公式的な場での言葉の使い方も学ぶ。	
	スペイン語通訳法Ⅰ	スペイン語通訳の学習体験を踏まえて、将来、社会人として、より高度なスペイン語の運用能力を発揮するための選択肢を検討・模索する。受講生が既に習得しているスペイン語の知識を活用して、基礎的な通訳の訓練をひとりひとりが体験する。	
	スペイン語翻訳法Ⅰ	本授業における目的は、さまざまな分野のスペイン語文献をいかに実用的でしかも美しい日本語に翻訳するかということ学ぶことである。そのために理論と実践の両面から、個々の訳文を検討し、その問題点を探っていくつもりである。翻訳にとって最大の問題は、原テキストの理解と同時に翻訳の対象となる言語(日本語)の十分な理解である。日本語の難しさを理解しないかぎり、良き翻訳は生まれない。日本語の内包する問題点をしっかり把握することがまず第一歩である。	
	スペイン語翻訳法Ⅱ	スペイン文化と文学にかかわるさまざまな分野の翻訳を検討し、どのような形で日本語に訳されているかを、理論と実践の両面から探っていくことを目的とする。そのための手段として、原文と訳文を例示し、訳文の持つ問題点を指摘して、よりふさわしい訳文となっているかをさまざまな面から検討する。翻訳の持つ原理的な側面と同時に、翻訳という営みの広がりについても考察する。	
	スペイン語映像翻訳法Ⅰ	スペイン語ドラマの映像素材を使い、字幕翻訳の基本的手法を学ぶ。字幕翻訳のルール、ハコ書き(映像と台本を見ながら、原語の台詞のどこからどこまでを一つの字幕にするのかを決めていく作業)、スポッティング(1枚の字幕の長さ(時間)を測る作業)、字幕表現の制約等を習得し、実際に字幕翻訳を行う。字幕翻訳の実習には字幕制作ソフトSSTG1を用いる。その操作についても習得する。字幕翻訳の演習では、予め決められた範囲を文章翻訳し、授業で内容の確認をする。それから字幕翻訳を行い、それを講評する。	
	スペイン語映像翻訳法Ⅱ	スペイン語ドラマの映像素材を使い、字幕翻訳の基本的手法を学ぶ。字幕翻訳のルール、ハコ書き(映像と台本を見ながら、原語の台詞のどこからどこまでを一つの字幕にするのかを決めていく作業)、スポッティング(1枚の字幕の長さ(時間)を測る作業)、字幕表現の制約等を習得し、実際に字幕翻訳を行う。字幕翻訳の実習には字幕制作ソフトSSTG1を用いる。その操作についても習得する。字幕翻訳の演習では、予め決められた範囲を文章翻訳し、授業で内容の確認をする。それから字幕翻訳を行い、それを講評する。	
	スペイン文化研究Ⅰ	スペインの歴史に沿って、スペインが世界的に貢献してきた文化を文学、絵画、建築、歴史等の、より重要な観点から全体像を掴んでいく。範囲が広く、また題材も豊富であるため、時代ごとに最も重要だと思われる人物を取り上げる。文化的な知識はもちろん、スペイン語の知識を広げることも重要な目的である。	
	スペイン文化研究Ⅱ	後期はアメリカ大陸『発見』以降のスペインを見ていく。アメリカ大陸の「発見」はスペイン人が世界史上、最も大きな役割を果たしたとも言え、スペイン語の形成にも大きく影響した。また黄金時代、あるいはここ100年の間に優れた芸術をもたらした芸術家たちにも目を向ける。	
	スペイン文学史Ⅰ	今日のスペインの精神的遺産のほとんどすべてがスペイン黄金世紀(16、17世紀)において形成された。この時代はまた葛藤と対立の激動の時代でもあった。この講義ではスペイン人の精神史を辿るべく、スペイン人が形成された12世紀から、黄金世紀が終了する17世紀終わりまでの約500年にわたるスペイン文学の精華を概観することによって、スペイン的なものの本質に迫ることを目的とする。	
	スペイン文学史Ⅱ	今日のスペインの精神的遺産のほとんどすべてがスペイン黄金世紀(16、17世紀)において形成された。この時代はまた葛藤と対立の激動の時代でもあった。この講義ではスペイン人の精神史を辿るべく、スペイン人が形成された12世紀から、黄金世紀が終了する17世紀終わりまでの約500年にわたるスペイン文学の精華を概観することによって、スペイン的なものの本質に迫ることを目的とする。	
	現代スペイン文学Ⅰ	この授業の目的は、スペインとスペイン人の本質を、現代文学を通じて問い直すことにある。そのために第二の黄金世紀ともいべき20世紀初頭のいわゆる《98年の世代》の作家達から始め、ゴンゴラの再評価をきっかけに生まれた《27年の世代》の詩人達及び近代スペインの最大の悲劇たるスペイン内戦(1936-1939)後の亡命知識人の活動に焦点を当て、さらにフランコ以後の自由なスペイン、ヨーロッパ統合後の今日のスペインの作家たちの動向に目を向けていく。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イベロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目 (イベロアメリカ言語学科指定)	現代スペイン文学Ⅱ	この授業の目的は、スペインとスペイン人の本質を、現代文学を通じて問い直すことにある。そのために第二の黄金世紀ともいべき20世紀初頭のいわゆる《98年の世代》の作家達から始め、ゴンゴラの再評価をきっかけに生まれた《27年の世代》の詩人達及び近代スペインの最大の悲劇たるスペイン内戦（1936-1939）後の亡命知識人の活動に焦点を当て、さらにフランコ以後の自由なスペイン、ヨーロッパ統合後の今日のスペインの作家たちの動向に目を向けていく。	
	現代ラテンアメリカ文学Ⅰ	現代ラテンアメリカ文学の代表的小説作品を読む。	
	現代ラテンアメリカ文学Ⅱ	現代ラテンアメリカの代表的文学作品を読む。	
	ラテンアメリカ文学特殊研究Ⅰ	主に次の3点を目標にイベロアメリカ文学の中から比較的簡潔な作品や物語を取り上げていく。A) イスパノアメリカ文学において最も代表的な作家（Cortazar, Borges, Neruda, Asturias, Paz, Rulfo, Gabriela Mistral, Garcia Mistral, Garcia Marquez, Vargas Llosa, Carpentier, Isabel Allende等）についての知識を深める。B) 原文を読むことで文章読解力、単語力をつける。C) 幅広い文法事項の学習。	
	ラテンアメリカ文学特殊研究Ⅱ	主に次の3点を目標にイベロアメリカ文学の中から比較的簡潔な作品や物語を取り上げていく。A) イスパノアメリカ文学において最も代表的な作家（Cortazar, Borges, Neruda, Asturias, Octavio Paz, Juan Rulfo, Isabel Allende, Gabriela Mistral, Garcia Mistral, Gabriel Garcia Marquez, Mario Vargas Llosa, Carpentier等）についての知識を深める。B) 原文を読むことで文章読解力、単語力をつける。C) 幅広い文法事項の学習。	
	スペイン美術史Ⅰ	中世から現代に至る、スペインの重要な2地域（カタルーニャ及びバスク）における文化と芸術を扱う。授業ではこの2つの地域において、芸術と文化、社会、政治がどのようなかたちで緊密に結びついているかを明らかにする。	
	スペイン美術史Ⅱ	中世から現代に至る、スペインの重要な2地域（カタルーニャ及びバスク）における文化と芸術を扱う。授業ではこの2つの地域において、芸術と文化、社会、政治がどのようなかたちで緊密に結びついているかを明らかにする。	
	ラテンアメリカの文化と文学	文学と映像、音楽や文化的表象を通じて、ラテンアメリカ的性格のありようを理解すると同時に、《文化的偏見》の持つ意味やその特色、表現形態といったものを理解することを目的とする。	
	スペイン史概論Ⅰ	スペインの歴史や文化に少しでも興味を持つ学生に対して、スペイン史のエッセンスを教授することを目的とする。主に講義の形式をとるが、質問もしばしば挟む。前期では、先史時代に始まり、古代を経て、中世の終わりまで、言い換えると、紀元前100万年くらいから15世紀末までを総攬する。この間のスペインの歴史に、ローマ文明とイスラム文明がどれほどの影響を与えたかをしっかりと把握して欲しい。講義に当たっては、二つの視点を強調しておく。一つは、現在の複雑なスペインを解く鍵が過去にあると認識すること。もう一つは、スペインを国内で完結した歴史と捉えないこと。すなわち、地中海世界、ヨーロッパ世界、世界史という三つの異なった空間の交差する場として捉えて欲しい。事実、移民であれ、財政危機であれ、そうした見方が必要なことを改めて確認させられる。また必要に応じ、イベリア半島のもう一つの国ポルトガルの歴史についても触れる。	
	スペイン史概論Ⅱ	スペインの歴史や文化に少しでも興味を持つ学生に対して、スペイン史のエッセンスを教授することを目的とする。主に講義の形式をとるが、質問もしばしば挟む。後期では、近世史と近現代史、言い換えると、15世紀末から2011年までを総攬する。この間のスペインは、新大陸を掌握して大帝国を築き、19世紀前半にラテンアメリカ諸国が独立することでイベリア半島の小国に転落するという変転を経験する。世界帝国も国民国家も経験したスペインの姿をしっかりと把握してほしい。講義に当たっては、前期と同様、二つの視点を強調しておく。一つは、現在の複雑なスペインを解く鍵が過去にあると認識すること。もう一つは、スペインを国内で完結した歴史と捉えないこと。すなわち、地中海世界、ヨーロッパ世界、世界史という三つの異なった空間の交差する場として捉えてほしい。事実、移民であれ、財政危機であれ、そうした見方が必要なことを改めて確認させられる。また必要に応じ、イベリア半島のもう一つの国ポルトガルについても触れる。スペインとの共通点や違いをはっきり押さえて欲しい。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イベロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目（イベロアメリカ言語学科指定）	スペイン現代史Ⅰ	スペインは20世紀初頭の欧州で社会の近代化が最も遅れた国であった。近代化を進めるべき諸改革は1930年代になって着手されるものの、改革を巡る社会階層間の利害対立は激しくなるばかりであった。ついには国民を敵と味方とに分断させる「スペイン内戦」（1936～39年）という悲劇が生まれたのである。内戦後はフランコ将軍による独裁体制が樹立された。国際環境・国内事情の変化に適応したフランコ独裁体制は、フランコ自身が死去する1975年まで36年間もの長き期間にわたって存続した。1976年から民主主義への移行が行われ、民主憲法の制定（1978年）、EU（当時のEEC）加盟（1986年）等を経て、民主主義体制が確立した。その後、政権交代を繰り返しながらスペインは西欧型民主主義社会を深化させている。本講義では、長期的な歴史の流れを見た後、第二共和政、内戦、フランコ独裁体制、民主化、政権交代へとつながるスペインの現代史を解説する。スペインの現代史から得られる示唆は多様かつ豊かである。	
	スペイン現代史Ⅱ	スペイン現代史Ⅰで学んだ内容を簡潔に復習した後に、社会労働党政権（ゴンサレス政権1982～1996年）、政権交代、国民党政権（1996～2004年）の政治と社会変化について考察する。そして2004年以降、今日まで続く社会労働党政権（サパテロ政権）の政治を分析し、現代スペインが直面するさまざまな課題について考える。特に、移民の送り出し国から移民受け入れ国になったスペインの移民問題、言語正常化運動（バスク、カタルーニャ）を含む地方分権問題、終息に向かいつつあるETAテロ問題等を採り上げる。	
	スペイン経済論Ⅰ	16～17世紀に世界の強国であったスペインは、19世紀には産業革命の波に乗り遅れ、20世紀になると欧州の極貧国になってしまった。まずはスペイン経済史を紐解くことにより、経済発展と衰退の諸要因について考えたい。貧しいスペインが大きく変貌するのは1960年代以降のことである。1950年代末に「封鎖経済体制」から「開放経済体制」に移行することによって貿易と投資が活発になり、1960年代には日本に次ぐ高度成長を遂げた。これが第一の転機である。第二の転機は、EU（当時のEEC欧州経済共同体）への加盟（1986年）である。関税同盟の完全実施と1993年の市場統合（ヒト・モノ・サービス・カネの域内自由移動）に対応するために、スペインは一連の構造改革を行った。第三の転機は、欧州経済通貨統合への参加（ユーロの採用）である。このテーマは「スペイン経済論Ⅱ」で詳しく分析するので、「スペイン経済論Ⅰ」では概説にとどめる。	
	スペイン経済論Ⅱ	欧州単一通貨ユーロを導入（非現金取引1998年、現金流通2002年）したスペインは、経済収斂（しゅうれん）の努力を行ったこともあってマクロ経済の安定性が増し、2000年代には長期にわたる高成長を達成した。EU諸国の中でスペインはアイルランドとともに最も高い経済成長率に恵まれ、一人あたりのGDP（国内総生産）が飛躍的に伸びた。ただし、長期にわたる好況とユーロの低金利政策の結果、不動産バブルが発生してしまった。アメリカ金融危機（2008年）が欧州に波及すると、スペインでは不動産バブルが破裂し、経済は一転して深刻な不況に直面するようになった。スペイン経済は低成長、高い失業率、大幅な財政赤字に悩まされている。ギリシア経済危機を発端とするユーロ危機の中であって、スペインは「PIIGS問題」（ポルトガル、アイルランド、イタリア、ギリシア、スペインのように財政赤字が深刻で、財政赤字を補填すべき国債発行が危ぶまれる困難な状況）の一角を占めている。財政再建、経済成長戦略の見直し、労働市場改革、年金改革などスペインは実施が容易ではない課題に直面している。ユーロ導入前と導入後のスペイン経済の推移とユーロ危機の中にあるスペイン経済の現状と課題について学ぶ。	
	ラテンアメリカ史概論Ⅰ	ラテンアメリカは、33の独立国と11の非独立領土からなる地域の総称である。スペイン語、ポルトガル語、フランス語等ラテン語から派生した言語（ロマンス諸語）や宗教（カトリック教）等ラテン系の伝統文化を共有し、継承する、いわゆる「ラテン民族・文化のアメリカ」を意味し、アングロサクソン・アメリカに対する文化的な概念からラテンアメリカと称される。ラテンアメリカの歴史変遷は、先スペイン時代、スペインやポルトガルによる植民地統治時代、そして独立から近現代の3つの時代に区分されるが、「ラテンアメリカ史概論Ⅰ（前期）」では、先スペイン時代すなわちコロンブスが到達し、スペインによって征服される以前の時代、いわゆる「先コロンブス時代」におけるアメリカ大陸の古代文明の形成過程とその文化的特徴や社会経済構造等について、ビデオを観賞し、解説を加えながら学ぶ。	
	ラテンアメリカ史概論Ⅱ	1492年のコロンブスの新大陸到達に象徴される「大航海時代」に始まる旧世界と新世界の遭遇と衝突、スペイン領アメリカが形成されたスペイン植民地統治時代（1500年代から1800年代）、独立革命の時代（1810年代）、国民国家の樹立時代から近代化と従属化の時代（19世紀末から20世紀初頭）、メキシコ革命に代表される社会改革の時代（1910年代）、第二次世界大戦から冷戦時代、そして21世紀の現代までのラテンアメリカの歴史変遷について、ビデオを観賞し、解説を加えながら授業を進める。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目 (イペロアメリカ言語学科指定)	ラテンアメリカ現代史 I	19世紀末にはラテンアメリカ諸国は輸出経済発展の時代に入った。しかし、外国資本に極端に依存した経済の発展によって「近代化と従属化」という相反する構造が確立され、外国資本と結びついた寡頭支配層に富と権力が集中し、政治腐敗と社会的不正が顕在化した。ラテンアメリカ諸国は歪んだ発展に根ざす厳しい現実と深刻な問題をはらんだまま20世紀を迎えた。前期では、「北の巨人」と称されるアメリカ合衆国のラテンアメリカ進出を軸に、20世紀のラテンアメリカ諸国の歴史変遷について学ぶ。適宜、ビデオを観賞し、解説を加えながら授業を進める。	
	ラテンアメリカ現代史 II	ラテンアメリカの1980年代は「失われた10年」と呼ばれるが、1982年9月にメキシコで発生した金融危機に象徴されるように、ラテンアメリカ諸国は深刻な経済危機に陥り、ハイパー・インフレーションによって国民生活は困窮し、一部の国・地域ではゲリラ活動が活発化し、政情不安を招いた。また80年代は、米国のレーガン政権の干渉によって「中米紛争」が泥沼化し、カリブ海域では政治的混迷を深めた時代でもあった。後期では、「冷戦」の終結とラテンアメリカ、北米自由貿易協定(NAFTA)が締結された1994年元旦に武装蜂起したメキシコの「サパティスタ民族解放軍(EZLN)」等の民族闘争、ネオリベリズム(新経済自由主義)とグローバル化、そして21世紀の現在における反米左派政権が誕生した背景を検証し、ラテンアメリカの21世紀を展望する。適宜、ビデオを観賞し、解説を加えながら授業を進める。	
	ラテンアメリカ経済論 I	植民地時代から独立期、一次産品輸出経済期、輸入代替工業化期を経て1980年代の経済危機に至るまでのラテンアメリカ経済を歴史的かつ構造的に概観する。現代ラテンアメリカ経済の形成過程を理解することが本講義の目的である。また、取り扱うテーマも、経済を中心に関連する政治・社会的分野も解説する。本講義と後期に行われるラテンアメリカ経済論IIは一組の講義であり、できる限りIとIIの両者を履修することを薦める。	
	ラテンアメリカ経済論 II	本講義は前期に行われたラテンアメリカ経済論Iの後を受けて、現代ラテンアメリカ経済に関わる諸問題を解説します。現代ラテンアメリカ経済との関係で、社会保障、貧困、左派政権等、経済以外の分野も解説する。本講義は前期のラテンアメリカ経済論Iを履修していることを前提に授業を行うので、できる限りラテンアメリカ経済論Iを履修すること。	
	ラテンアメリカ研究入門 I	ラテンアメリカは、一方では多くの共通した面を持ちながらも、他方では独自性を有する地域である。地域としてのラテンアメリカを、自然環境、人種構成、社会、文化構造等の観点から多面的にアプローチし、ラテンアメリカ地域を総合的かつ体系的に学ぶ。より専門的なラテンアメリカ地域文化研究すなわちラテンアメリカの歴史、文化・文学、国際政治・経済、国際協力等について、より研究を進展させる研究演習(ゼミナール)につなげる科目でもある。具体的には以下の内容に沿って、適宜、ビデオを観賞し、解説を加えながら授業を進める。	
	ラテンアメリカ研究入門 II	日本とラテンアメリカ諸国の関係は、第二次世界大戦をはさんで戦前期と戦後期に時代区分されるが、戦前期においてはメキシコ、ペルー、アルゼンチン、ブラジルへの「中南米移住」の歴史であった。戦後期においては、ボリビア、パラグアイ、アルゼンチン、ブラジルとの間に締結された「移住協定」による日本人の集団移住、1960年代の技術移住者及び日本企業の中南米進出、経済・技術協力による技術者の送出国など移住形態が多様化した。後期は、フランス・スペインの日本渡来に始まる大航海時代における日本・メキシコ・スペインそしてポルトガルとの交渉関係について概観し、鎖国政策に至った背景を考察し、明治時代から戦後における日本とラテンアメリカ諸国との移住関係、経済・貿易関係、経済・技術援助等、ODA関係、文化交流関係等、総合的な関係について、ビデオを観賞しながら、解説を加えつつ授業を進める。	
	ラテンアメリカ政治論 I	ラテンアメリカは米国の外交政策上、重要な地域の一つであり、ラテンアメリカもまた歴史的に(また地政学的に)米国との関係に大きな比重を置いている。しかしながら、両者の関係は必ずしも友好的というわけではなく、これまでたびたび激しく対立することがあった。とりわけ現在のラテンアメリカにおいては、対米関係のスタンスは国によって多様である。親米的な国家もあれば、敵対的な態度を見せる国家もある。しかしながらラテンアメリカの国際関係において米国が大きな影響力をもっていることは明らかである。2001年9月11日(いわゆる9.11)以降、米国の外交政策に対する批判が世界的に多くなる中で、ラテンアメリカは米国の外交政策においてどういう位置づけになっているのか。また、ラテンアメリカは米国の外交をどう評価しているのか。本講義では、米国の対ラテンアメリカ政策を歴史的に振り返ることを通して、現在の米国・ラテンアメリカ関係を理解していきたい。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イベロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目（イベロアメリカ言語学科指定）	ラテンアメリカ政治論Ⅱ	近年ラテンアメリカ各国で広がる反ネオリベリズムや反グローバリズムの動きについて考察する。21世紀に入ってからラテンアメリカではいわゆる『左派政権』が続々と誕生している。国民はこうした左派政権に90年代以降広がったネオリベリズムのもとで悪化した貧困問題の解消より公正な社会の実現を期待するが、各国政府は果たしてそうした国民の期待に応えているか。またラテンアメリカのこうした動きを隣国の米国はどう見ているのか。ブラジルやベネズエラ等を事例に、ビデオ（ニュースやドキュメンタリー等）の視聴覚教材を用いながら、21世紀のラテンアメリカ政治の潮流を分析する。	
	メキシコ特殊研究Ⅰ	バハ・カリフォルニアからユカタンまで、メキシコの国土は日本の5倍以上である。変化に富む貴重な自然、そしてそこに育まれた先史、古代さらに現在までの特有な文化を反映した世界遺産を通してメキシコを理解すること。また、授業はスペイン語で行い、語彙と理解力を向上することも目的とする。	
	メキシコ特殊研究Ⅱ	前期に引き続き、植民地時代以降の世界遺産を紹介する。また、学生は一つのテーマ（世界遺産）を選び、研究の上クラスで発表してもらう。	
	ブラジル研究入門	ブラジルは近年めざましい経済発展を遂げており、日本企業の進出も増えている。2014年にはサッカーのワールドカップ、2016年にはリオデジャネイロ市でオリンピックが開催されることになっており、国際的な注目度も高まっている。日本とブラジルとの関係を見ると、2008年は「日本ブラジル交流年」であった。それは、日本人のブラジル移住100周年を記念したものである。日本とブラジルの両国は、これまでの100年の二国間関係を振り返り総括するとともに、新たな100年の関係を構築するためのスタート地点にいる。ブラジルには150万人の日系人がおり、日本には30万人を超えるブラジル人が住んでいる。このようなヒトの往来と滞留があるにもかかわらず、日本人が持つブラジルのイメージは一貫して「サンバ」、「サッカー」、「コーヒー」、「アマゾン」である。この講義では、あえてこの4つのステレオタイプにあわせてブラジルを深く掘り下げることで、ブラジルの奥深さと多様性を理解する一助としたい。	
	ブラジルの民族・地理	ブラジルの多文化性を学びながら、ブラジル研究に対する基本的な視座を得ることを目的とする。ポルトガルの大航海時代、アフリカやアジアのポルトガル語圏の現状、ブラジルに居住する先住民の文化、先住民が直面している諸問題、ブラジルとアフリカ諸国のかかわり、アフリカ起源の文化、日本とブラジルとの交流等を幅広く扱いながらブラジル現代社会の理解を目指す。	
	ブラジルの歴史	ブラジルの歴史を学ぶ。本講義の特徴は、ブラジルの歴史を中心に据えて世界の歴史や日本の歴史を考えることにあり、高校までに習った歴史とはおそらく違った視点を身に付けることができるものと考えられる。また、教材としてブラジルの高校で実際に使用されている歴史の教科書を用い、受講者全員で翻訳しながら読み進めていく。	
	ブラジルの文化・芸術	20世紀のブラジル文化と芸術世界の概要を学ぶことを目的としている。授業では独自の文化を生み出したさまざまな地方社会に注目しながらブラジル文化の根本を分析し、ブラジルの歴史の中で生まれたさまざまな音楽、民俗芸能、芸術運動について触れていく。	
	ブラジルの宗教・社会	現代ブラジルが抱える社会問題に焦点を当てる。ブラジルの格差、各宗教信者数の急激な変化、中絶問題、少数優遇制度（格差是正制度）、識字教育等を取り上げる。歴史の流れを踏まえた上で現在の社会問題を学び、学生自身の意見交換を行う。	
	ブラジルの政治・経済Ⅰ	ブラジルの再民主化（1985年）を一つの区切りとして、それ以前のブラジル政治・経済の流れを概観し、続いて85年以降のブラジル政治・経済の特徴について詳しく学んでいく。特にカルドゾ政権（1995年～2002年）とルーラ政権（2003年～2010年）がブラジルの現代政治・経済に与えた影響について考察を深めたい。現在のブラジル政治経済の動向に関心のある学生の受講を期待したい。	
	ブラジルの政治・経済Ⅱ	1990年代半ば以降続くブラジルの「積極外交」の国際関係におけるダイナミズムと意義について考察する。南米ブラジルは第二次世界大戦以後むしろ外交においては目立たない国であり、それはしばしば「ロープロファイル」（低姿勢）外交とも言われてきた。しかしながら近年では特にWTO（世界貿易機関）等の通商交渉や、昨今注目を集めているバイオエタノールを巡り、活発に先進国・途上国との資源外交を展開している。また、今日ブラジルの外交パートナーは、アフリカ諸国、インド、中国、中東諸国等非常に多様である。ブラジルは、こうした積極的な外交戦略を通して何をしようとしているのか。授業ではそうした変化を遂げるブラジル外交について個々の事例を取り上げながら、その特徴を明らかにするとともに、「グローバル・ガバナンス」の視点からブラジル外交戦略について考えていきたい。なお、授業スケジュールの後半は学生によるプレゼンテーションを予定している。ブラジルの世界における役割はどうなるのか、ブラジルのみならず発展途上国は今後世界においてどういった外交を展開するのか等に関心のある学生諸君の受講を期待する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	地域研究	外国語を専攻する学生なら誰でも、語学力を身につけようと勉強するが、やがて「この語学を使って自分は何がしたいのか?」という疑問にぶつかるだろう。政治経済、宗教、教育、民族文化、芸術等、どんな分野でも、言語プラスアルファの専門分野（ディシプリン）を持つことで初めて研究として、また職業として成り立つ。「地域研究」とは、こうしたさまざまな専門分野の手法をもちいた学際的（インターディシプリナリー）な研究を指す。外国語を学ぶ者として、先入観やステレオタイプに囚われない「多角的視野」から国際社会を理解できるようになることを目指す。地域研究の具体的な方法や、自分の選んだ対象地域の分析といった「地域の読み方」を身につけ、それらを今後の留学や現場での活動に応用するために調査実習で確認してみよう。	
	日本語学概論	日本語が世界の言語の中でどのような特徴を持つ言語かということを意識しながら、日本語学の各分野を概観する。	
	日本語学Ⅰ	音声はどのようにして発せられるのか、どのような音を私達は用いているのか、そしてその音が言語の中でどのように位置づけられるのか、さらに日本語の音に関する概説をする。	
	日本語学Ⅱ	日本語教師を目指す者が必ず知っておかなければならない日本語文法の基礎について、できるだけ網羅的に勉強する。テキストのうち、自習でも内容把握が困難でないと思われる部分については、自習項目とし、小テストで確認する。また、授業で取り上げる項目についても予習を前提とする。半期完結のコースで項目のすべてを終えるためには受講者の積極的な学習への取り組みが不可欠である。また、必要に応じて、生成文法の立場から教科書とは違った観点からより一般的に文法を捉える方法を講義する。	
	日本語教育概論	「日本語教育実習」を履修する予定の学生を対象とする。日本語を外国語として教えるための基礎的な知識について、コース・デザインを中心に学ぶ。授業計画を立てるまでの過程を理解できるようにする。	
	日本語教授法	「日本語教育実習」を履修する予定の学生を対象とする。日本語を外国語として「教える」という立場から、テキストの構成、練習問題の作成、教材の効果的な使用法について学ぶことを目的とする。授業は講義だけではなく、学生自身が考える課題が多く与えられる。教案作成についても学び、模擬授業を行う。	
研究科目（学科指定なし）	日本語教育実習	日本語の授業運営について実践的に学ぶことを目的とする。各自、『日本語教授法』で作成した「教授法ノート」をもとに、担当する学習内容の授業計画及び教案作成を行う。さらに、模擬授業、フィードバック、自己評価活動を経て教壇実習に進む（授業形態は、その年の履修人数によって異なる）。授業の2週目に、日本語教育（日本語学、日本語教授法）についての基礎知識を問う試験を行う。また、ブラパー大学（タイ）「日本語ティーチング・アシスタント」（8月）に参加する学生の指導も行う。	
	日本語表現法Ⅰ	日本語の文章を、正確にまた豊かな表現で書ける力を育てることを目的とする。実際に行うのは、以下の3点である。まず、漢字力・語彙力を向上させること。漢字・語彙の力は文章表現の基礎となる。次に、文章表現の基礎を学ぶこと。実際の例を見ながら、正確で分かりやすく、また誤解を生じさせない文章を書くための基礎を学ぶ。そして、多様な分野の文章を読んで、それぞれの文章で用いられる表現や概念を知り、論点をまとめる力を養う。授業では、毎回漢字・語彙のテストを行い、さらに多くの文章を読み、その要約を文章にまとめる練習を行う。	
	日本語表現法Ⅱ	優れた日本語の書き手となるための訓練を行う。そのためには、思考力の発達、幅広い知識の獲得、書くべき内容や論点の整理、語彙や表現法の獲得、文章力の発達を欠くことができない。これらの能力の総合的な発達を促すため、以下のような具体的な作業を毎週行ってもらおう。（1）漢字・語彙力の向上のための練習とテスト。（2）多様なジャンルからの文章をできるだけ多く読む。（3）その内容と論点を整理し、要約する。基本的に毎週一定量の文章を読み、その内容と論点を整理し、それを自分の頭の中で再構築し、文章としてまとめる作業を行う。	
	社会言語学	社会言語学の全般的入門。前半では、2冊のテキストを使って講義形式で社会言語学という大きな領域の概観をする。後半では、国会会議録というオンライン資料を使って各自がグループで分析を行い、ハンドアウトの作成とラスでの報告を求める。なお、各日一時間を割いて、その日の講義内容に関する質疑応答、リアクションペーパーの執筆・提出を行う。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究 科目 (学 科 指 定 な し)	心理言語学	言葉の研究を通して心の仕組みや働きを探る「心理言語学」という領域とその課題・方法への理解を深めることを目的とする。前半は研究小史と言語の獲得を中心に、後半は発話や理解についての研究を中心に幅広い視点から言語を見る目を養いたい。語彙の獲得（例：子供達はどのようにもものと名前を結びつけるのか、名詞と動詞はどう区別するのか、主語や目的語はどのように付与されるのか）と使用（例：発話にあたって語彙はどのように心の辞書から引き出されるのか）をめぐる課題について子供の自然発話や成人の言い誤り等のデータに基づいて実証的に迫りたい。	
	応用言語学	応用言語学は広範囲の学問分野であるが、本講義では、特に第二言語教育及び言語学習に焦点を当てる。言語と教育の有機的な関係を念頭に置き、文法、語彙、四技能の習得、教室談話、内容重視の英語教育、言語評価等さまざまな研究を概観し、第二言語教育の理論と実践の理解を深めていくことを目標とする。主に英語を対象言語とした研究を扱うが、本講義から得る知識や知見は他の言語の教育・学習にも応用できるであろう。将来、英語教育やその他外国語教育に携わろうとしている学生や第二言語習得プロセスに興味のある学生を対象とする。	
	意味・語用論	言語の最も重要な機能は情報伝達であるが、情報、即ち、意味は個々の発話場面において文の形で伝えられる。そして、文は伝える意味によってさまざまな形を取ると言われる。文の意味は一枚岩ではなく、いくつかの異なる種類の要因が重なりあって構成されている。主に英語の文法現象を資料として、文の意味の中でもテキスト形成的機能と対人関係的機能について学ぶ。	
	言語学特別研究	社会言語学という学問領域が扱うさまざまなテーマについて日本語で講義する。前半は、北アメリカの社会言語学の主流である言語のバリエーション（変異）の諸相を、地域、社会階層、エスニシティ、性、年齢等の社会的要因を切り口にして取り上げる。授業では、自然会話や朗読の録音、映画、音楽等を視聴して、さまざまな言語のバリエーションに親しむ。また、言語変化のメカニズムについて解説し、言語の規範について考察する。後半は、主に多言語社会における多言語使用の状況を取り上げる。北アメリカ、特にカナダで展開されてきたバイリンガリズム研究、言語政策研究に焦点を当てる。日本の言語政策についても触れる。	
	言語哲学Ⅰ	芸術を契機としたレトリック論を扱ったテーマの延長線として、記号論の基礎とその応用としての文化記号論を論じる。あらゆる記号論において、議論の出発点や理論の規範として「言語」が目ざされる。言語は、その音声や文字が「意味」というものを「指し示す（＝記号作用）」働きを常に持つからである。ここから、あらゆる現象に記号作用があると見立てる考え方が導出される。文化的現象は何かの「意味」を放つ存在であるとし得るが、その中でも衣服等の社会的現象や文化現象は独自の「意味」を放ってきたとし得るのである。これらの考え方を支える理論的根拠とその実際の場をみていきたい。	
	言語哲学Ⅱ	前期は、一般記号論の基礎とその応用としての文化記号論を論じた。後期は、一層、具体的な意味論的な領域に入って、領域を狭めて芸術記号論の理解を深めたい。具体的には、まず、芸術ジャンル上の意味論的差異がどのようなものであるのかについて論じたい。音楽作品の「意味」は、絵画作品の「意味」と同じであるというわけにはいかないであろう。では、前者の線的時間的表現で意味されるものと、後者の面的空間的表現で意味されるものとは何がどのように異なっているのだろうか。それは言語の場合と比較した時、どのような意味論的差異をつくっているのか。これらの問題を具体的な作品において検証しつつ論じていきたいと思う。	
	西洋古典語概論Ⅰ	印欧語族に属し、他の同族語（とりわけロマンス語諸語）の形成の基礎をなしたラテン語は、特に西洋中世における公用語の位置を占め、キリスト教世界は勿論、その後近代に至るまで、さまざまな学問分野における学術用語として使用され続けた。本講義ではそのラテン語の初歩を学習する。講義の性格上古典期のラテン語の学習に限定されるが、その知識によって、中世以降に書かれたラテン語文献についても、大方の読解は可能である。本講義から、近代印欧語に関する研究にとっても有益な知識を得てもらえれば、と考える。加えて、ラテン語同様、西洋古典語の基本言語であるギリシャ語についても、講義の進行にしたがい、可能な範囲で紹介してゆくつもりである。	
	西洋古典語概論Ⅱ	西洋の近現代語は古典ギリシャ語から多くの遺産を受け取っている。たとえば、英語の単語一つ取ってみても、我々は非常に多くのギリシャ語起源の言葉を、多くの場合、そうとは知らずに用いている。この科目では、近現代語との比較を交えながら、古典ギリシャ語の基本的な文法を学ぶとともに、古代ギリシャの文学や思想、習俗等にもできる限り触れ、西洋の言葉と文化への理解を深めていくための入り口としたい。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イベロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目 (学科学指定なし)	異文化コミュニケーション論Ⅱ	異文化へのイメージ、ステレオタイプ、また、その使い方の意味を読み取り、分析、理解する。この授業ではアメリカ、ヨーロッパ、アジア、日本の映画等を観ながら、話を進める。ここで扱う異文化の問題とは、異なるエスニシティに関わるだけではなく、少数集団やジェンダーの問題等を含めた広い意味で捉えることができる。私たちが意識的・無意識的に持っている異文化に対するイメージがどのように作られてきたか、またどのように人々に共有されているのかを見つめ直すことによって、異文化への新たな理解の第一歩を目指す。	
	組織コミュニケーション論Ⅱ	社会の活性化と個人の自己実現のためには、「ソーシャル・アントレプレナーシップ（社会起業家精神）」を身に付けることが今後ますます重要となる。ここでは、「人の役にたちたい」という思いにもとづく「社会的公益の追求」と、ビジネス的な効率や経営能力にもとづく「自立性・持続性の確保と発展」とを同時に両立させることが求められ、働くことの意味や人生の豊かさを考え直す上で多くの示唆に気づかされる。本講座では、そうした両立を目指す「ソーシャル・エンタープライズ（社会的企業）」の実例に学びつつ、実際に、事業企画案を自分で描いてみる中から、社会参画と社会的責任のあり方を現実的に即して考えるとともに、履修者自身の新たな発想の開発を試みる。	
	メディア・コミュニケーション論Ⅱ	神田外大にはKMS（KUIS MEDIA STATION）というウェブメディアがある。KMSはインターネットラジオとウェブマガジンから構成されて、文書、写真、音声、動画の情報が流れている。そこには学生達によって作られるところが用意されていて、この授業で作った作品はKMSを通じて世界に発信されることになる。インターネットラジオに載せるように『学生によるラジオ番組』を作ったり、著作権契約を結んだ音楽を使って、ミュージックビデオを作る。あるいは、先生の司会で学生のグループごとに一つのトピックに対して議論する討論番組を作る。このような番組作りを経験することによって、現在の最先端の情報メディアを意識し、自己表現活動を体験する。	
	非言語コミュニケーション論Ⅱ	非言語コミュニケーションで学んだ基礎概念を研究によってさらに深めていく。学期の初めに研究方法を学び、研究プロジェクトに取り組む。これはグループプロジェクトで、各グループで興味のあるトピックを選び、創造的な研究を行う。中間報告、最終発表・レポートを課題とする。	
	レトリカルコミュニケーション論	レトリカルな視点からコミュニケーションという行為／現象／出来事を捉え、分析、批判することで、我々が日常接するメッセージへの、その接し方を考えるコース。授業中には、政治スピーチ、小説、詩、映画、広告、携帯電話、Tシャツ等の題材を社会的政治的な言説やメディアとして取り上げ、レトリック理論との関連を話し合う。前半は政治演説を主に題材にし、米国のスピーチ・コミュニケーション分野の歴史に沿った形で現代レトリックの発展を見ていく。後半はヨーロッパの影響を受けた学問・分野としてのレトリックがどう変容してきたかを鑑みながら、日本の文脈に併せて論じたい。コース内ではいくつかの批評手法とともにその例を出し、学生に短いエッセイを書いてもらうとともに、なるべく授業内での発言の機会を多く与えていきながら議論を進めたいと考えている。	
	国際ビジネス・コミュニケーション論Ⅱ	国際ビジネスコミュニケーション論Ⅰで学んだIT革命の基礎知識を基盤に、IT革命によって誕生し、進化し続ける新しいビジネス（eコマース、アウトソーシングビジネス等）のビジネスモデルについて事例を通じて学ぶ。ビジネスモデルを研究する前提として、企業と企業活動について基本的なポイントを講義する。さらに、グローバル化の中での日本企業のグローバル展開の実態、グローバル化の中で求められるグローバル材について実査に基づいた講義を行い、グローバルな世界を目指す学生に示唆を与える。一方通行の講義だけでなく学生全員の参加型の授業を行い、ビジネス・コミュニケーションの育成を図るため、学生による研究課題のプレゼンテーションを必修とする。研究課題のプレゼンテーションを通じて、「調査・分析の手法」「パワーポイントを使ったプレゼンテーションの手法」「ビジネスコミュニケーションの手法」を学ぶことを目的とする。	
	日本語スモールグループ・コミュニケーション	コミュニケーションや社会心理学の諸理論を概説するとともに、豊かな人間関係を築くうえで不可欠なソーシャルスキル（傾聴、アサーション等）についても取り上げ、授業で実施するグループワークやディスカッションを通して実践する。さらには、受講生自身のコミュニケーション・スタイルを再認識することも授業の目的とし、グループワークでの自分の行動や思考、感情等を記録して分析していくことを課題とする。	
	コンピュータ入門	利用者の立場でコンピュータの仕組みを学び、情報技術の基礎を習得する。講義形式で情報技術の仕組みへの理解を深め、その後の実習で実際にコンピュータに触れながらその仕組みを体験的に学んでいく。コンピュータの仕組みを理解して使うことによって、従来よりも楽しくなるだけでなく、トラブルになった時でも自分で対策を考えることができる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究 科目 (学 科 指 定 な し)	インターネット実習	インターネットは世界のあらゆる地域との自由なコミュニケーションや、さまざまな情報へのアクセスを可能にする新しい情報流通環境である。インターネット実習では、ウェブページの理解と作成技術を習得することを目的とする。インターネットの仕組みとウェブプログラミングの基礎であるHTMLを作成する講義と演習を行う。ホームページ作成は、テキストエディターを使ってタグ文を書いて作成する。	
	マルチメディア入門	コンピュータを利用した映像制作を行う。レポートなどの印刷物や文字と写真を挿入したPowerPointなどのプレゼンテーションファイルと同様に、映像や音声、文字を総合的に駆使した映像は、相手に何かを伝えることのできるメディアの一つである。授業の中では、ステップ毎に設定された課題制作に取り組み、その成果について相互に発表を行う。そのプロセスの中で、自らの関心や社会の中で必要とされている情報をきちんと編集して伝えていくことの重要性を理解し、また、私達が普段目にしているビデオ番組がどのように作られているのかについても考えていく。	
	ウェブサイトデザイン入門	ウェブサイトデザインを行う。単にウェブページを作るだけであれば、ソフトを使って簡単に行うことができるが、ここでは、自らが伝えたい情報又は相手が必要としている情報をわかりやすく表現し、提示することを意識してウェブサイトを作成していくことを目標とする。授業の中では、ステップ毎に設定された課題制作に取り組み、その成果について相互に発表を行う。そのプロセスの中で、自らの関心や社会の中で必要とされている情報をきちんと編集して伝えていくことの重要性を理解し、また、私達が普段目にしているウェブサイトがどのように作られているのかについても考えていく。	
	文化について考える	共通の文化的テーマに関するオムニバス形式の講義である。各教員が自らの専門分野からさまざまなアプローチを試みることにより、文化研究の多様さや面白さを伝え、学生の皆さんの知的好奇心を育むことを目的としている。ヒーローというテーマから文化について考える。ヒーロー／英雄はいつの時代、どの社会にも存在してきた。ギリシャ悲劇やインド古代叙事詩の主人公、イチロー選手のようなスポーツ界で活躍する選手、キング牧師や毛沢東等の歴史の変革の立役者、そしてアップルコンピュータ創始者のスティーブ・ジョブズなど、ヒーロー像は多様である。ある特定の人物をヒーローとしてみる社会の存在があって初めて、その人物はヒーローとなる。ヒーローは当該社会や時代の価値観や理想を映し出していると言える。時としてヒーローは誇張して語られたり、より偉大に見せるために武勇伝が捏造されたりもする。死後に初めて注目されることもある。そして、一度作り出されたヒーローのイメージは、本人の実像から離れて変化していく。ヒーローの原型／語源、ヒーローがたどる運命、ヒーローを生み出す社会的背景、ヒーロー像の政治的操作、時代によるヒーローの変化について、特定の人物を事例に話を進める。そして、ヒーローの条件、現代のヒーローを取り上げ、最後にKUIS生のヒーロー像を受講生と共に考える。 (オムニバス方式／全15回) (富松京一 8回) (奥田若菜 7回)	オムニバス
	比較思想Ⅰ	比較思想とは、二度の世界大戦への反省から、異文化理解の可能性を模索するために始まった比較的新しい学問である。この授業では、古代ギリシアからの西洋における比較思想的な営みから現代における学問としての比較思想の成立までの歴史を辿ると同時に、文化を比較することの価値を考察し、現代的な課題についても議論していきたい。	
	比較思想Ⅱ	この講座では「愛」について考えるが、受講したからといって「愛」についての実践的な影響や肯定的な効果や威力については何も保証しないので、その点、心構えが必要である。ただ、「愛」についての思想文化については知り得ると思うので、その分だけ自己の経験に留まりがちな「愛」の実践に多少なりとも影響があるかもしれない。それは自己責任ということで受講してほしい。	
	比較文学概論Ⅰ	アドルフはアウシュヴィッツ以後詩を書くのは野蛮だと述べているが、ホロコーストに関する文学的・芸術的な表象は不毛で不可能なのであろうか？この授業では、ホロコーストという筆舌に尽くせない体験が、文学や映画においてどのような形で表現されてきたのかを検証することを通して、今私達が何を考え何をすべきか、そして何ができるのかという倫理的な問題を考えてディスカッションする。	
	比較文学概論Ⅱ	性をめぐるわたしたちの<当たり前>感覚は、さまざまなメディアの影響を受けながら、また、それに対抗しながら形成されている。この授業では文学作品と映画分析に<ジェンダー／セクシュアリティ>という視点を援用し、性の二元論(本質論 対 構築論)という陥りがちな考え方にメスをいれながら、<当たり前>の正体が一体何であるのかを一緒に考えてみたい。先入観や固定観念をまずは捨てて柔軟な気持ちでこの授業を受講してほしい。	

授 業 科 目 の 概 要 (外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目 (学科指定なし)	民族・宗教問題研究	「9. 11」以降の混迷する中東情勢を巡り、こうした宗教や信仰や感情がどのような関連しあっているかを検証する。その根底には多様なアイデンティティ形成が関係していることを読み解いていく。この多様な異文化／多文化の世界観や宗教の在り方におけるアイデンティティの構築のなされ方は、フーコー、デリダ、ジジェク、バトラーらの諸理論によって理解や説明ができる。こうした諸理論を学びながら、アイデンティティの多様な動態的様相を考察する。	
	キリスト教文化論Ⅰ	宗教に対して、偏見と無理解しか有することのない現代日本社会において、キリスト教に対する客観的かつ批判的な理解を目指す。古典としても取り上げることのできる旧約聖書に見出される特異な人間像に注目していきたい。抑圧・隷属・絶望により沈黙し打算・駆け引きにより自己保存を目指す生き方から、自立・開放を目指して立ち上がることの困難、自立を強いる神等を取り上げることになる。	
	キリスト教文化論Ⅱ	目的はキリスト教文化論Ⅰと同じである。新約聖書に見出されるイエスの特異な言動に注目する。当時のユダヤ教社会の中で、ユダヤ教徒イエスの神観、人間観は周囲に波紋を引き起こす。抑圧された人々の心中には驚きを、支配階層には無関心又は憎悪・憤怒・殺意を引き起こした。やがてイエスは罪人として虐待・惨殺される。この死がキリスト教を成立させることになる。	
	イスラム文化論Ⅰ	基本的なイスラム思想を概説し、イスラム教と社会・文化との関わりを考える。なお、クルアーン（コーラン）の現物や現地で入手した物品、映像等を通じて、日頃は馴染みの薄いイスラム文化に少しでも親しんでもらうこととする。	
	イスラム文化論Ⅱ	近年イスラム世界と非イスラム世界双方で「他者」に不寛容な「原理主義」的見方が強まっており、イスラム文化との共存というテーマは21世紀の世界における重要な課題となっている。このような前提に立ち、現代のイスラム教と中東イスラム社会が抱える問題点、欧米文化との関わりを考察する。	
	文化心理学Ⅰ	人の知覚・記憶・思考等の認知過程は当然、種としてのヒトに共通の基盤を持つと考えられるが、一方、個人が成長し、生活する社会・文化の影響を受けている可能性も否定できない。このような文化と認知の関連性を扱った研究を概観する。	
	文化心理学Ⅱ	個人の自己観は、経験によって形成されるものであり、文化の影響を受けている。こうした文化的に異なる自己観が、人の認知・情動・動機づけなどの心理過程に影響を及ぼしていることを、種々の比較研究に基づいて検証する予定である。	
	スポーツ文化論Ⅰ	オリンピックを通してスポーツとは何かを考える。さらに、「私」、「私たち」にのってのスポーツとは何かについて考える。	
	スポーツ文化論Ⅱ	近代文化としてのスポーツの輸入は私たちに何をもたらしたのか。数多くのスポーツに親しむ私たち「日本人」とスポーツ関係について考察する。	
	文化人類学概論Ⅰ	さまざまな文化における日常生活において、アイデンティティの在り方は、さまざまな宗教とジェンダーを通じて多様に構築されている。その在り方には、その社会固有の価値観と同時にどの社会にもあてはまる普遍的ルールとが絡んでいる。異文化／多文化を理解するための視点や捉え方を、さまざまな社会や文化を比較し学んでいく。	
	文化人類学概論Ⅱ	さまざまな社会においてアイデンティティが、グローバリゼーションの影響を受けながら多様な形で形成されてきていることを、さまざまな事例から比較考察していく。グローバリゼーションは、世界を均質にしていって作用もあるが、文化の多様性をさらに複雑化させてもいる。その実情はどのようなものであろうか。具体的にはミクロネシア、アメリカ、ベドウィン、インド、スーダン、日本等において宗教心、ジェンダー役割、感情表現等がどのようにアイデンティティ構築に結びつくのか比較考察し紹介する。異文化を理解するための視点や捉え方を、多様な社会を比較しながら学んでいく。より深く異文化を理解するために、フーコー、デリダら、ポスト構造主義者と呼ばれる思想家達の捉え方の初歩的視点も紹介する。	
文化人類学研究Ⅰ	グローバル化とIT革命によって、世界は合理化を進めてきているにも拘らず、人と人との間で誤解や摩擦や紛争が絶えない。理解し合っているよりは、その正反対のことが現実には起きている。何故であろうか。ここに実践力として役立つ学門が文化人類学である。日常に当然としている風景にさまざまな歴史的な文化的な要素が錯綜している。例えば、人が「癒し」を求めるとき、「美」を意識するとき、「健康」を願う時、「他者」と関わる時、様々な「装置」が隠されている。そこには、ローカルな要素とグローバルな要素が混交している。こうした事例を検証しながら、人間の存在理由を探るための文化人類学的思考とはどのようなものかを検証する。		

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目 （学科指定なし）	文化人類学研究Ⅱ	食事を楽しむ、好みの洋服を買う、余暇を過ごすといった日常生活には、さまざまな文化的社会的ファクターがあると同時に、共通するルールも存在する。また、環境への配慮や適応にも密接な繋がりがあ る。文化人類学は、日頃我々が日常生活で当然としていることに「問 い」を発して、人間の在り方とはどのようなものかを考察する。そこ に潜む暗黙の了解を暴くことで、いかに我々はさまざまな社会的、政 治的、歴史的状況に取り囲まれているのかが見えてくる。この授業で は、「消費行動」を通じて、そこに潜むアイデンティティ形成が文化 的側面、社会的側面、環境的要素があることを具体的に検証してい く。	
	身体運動文化論	利便性の現代において身体性と文化の関係は希薄になりつつあるよう に思われる。日常の所作を中心に身体の在り方と文化の関連（変化と 推移）を考察する。また、人間の基本動作と文化の関係性について考 える。	
	健康科学論	文化を形成する人間の見事に創造された構造と機能について、生理学 的側面から解説する。その上で、現代社会において深刻な問題となっ ている、生活習慣や加齢による身体機能への影響について理解を深め る。	
	人権論	ソ連・東欧における共産主義体制の崩壊後、「人民の権力」「プロレ タリアート独裁」等の言葉が時代遅れになるとともに、アジアの独裁 的権力者たちは「アジア的価値観」という新たな政治用語を使い始め た。彼らは独裁体制を正当化するために過去の文化遺産に助けを求め ようとしている。いくつかの政府はアジアの政治的・文化的伝統をふ りかざして、国内の市民権拡大運動を残酷に弾圧しており、ミャン マー（ビルマ）や中国のように人権侵害が制度化されている国もあ る。独裁体制による人権弾圧の実態とともに、その指導者達の主張と は異なり、アジアの国々では一般民衆の人権運動を支える多様で力強 い文化的伝統が息づいていることを明らかにする。使用言語は日本語 と英語。	
	ジェンダー論	すでに<ポスト・ジェンダー>時代に突入したという見解も聞かれる 中でジェンダー論の存在理由、射程と限界について改めて考えてみる ことは重要である。そもそもジェンダー概念とはどのようなプロセス を経て生み出され、どんな意味をもっているのだろうか。各自が自分 らしく生きていくためには他者及び自分自身との対話的関係を続けて いくことが重要である。<性>について自分が知っていると思っている ことを、もう一度問い直す授業である。テキストを読むことと考える ことを繋げながら<性>を巡る問題群を真摯に考察したい。	
	日本美術史Ⅰ	日本の仏教絵画について講義する。飛鳥・白鳳時代から平安時代ま での仏画の代表的作例を取り上げ、関連する諸問題に言及しつつ、日本 美術の特質について理解を深めることを目標とする。スライド・ビデ オによる作品鑑賞を交えつつ講義を進める。	
	日本美術史Ⅱ	日本の絵画について講義する。平安時代から明治時代までの世俗絵画 の名品を取り上げ、関連する諸問題に言及しつつ、日本美術の特質に ついて理解を深めることを目標とする。スライド、ビデオによる作品 鑑賞を交えつつ講義を進める。	
	日本芸能史Ⅰ	日本の芸能にはどのようなものがあり、また、それらはどのような時 代背景のもとに成立したのか？前期では<古代～近世>に誕生した芸 能を取り上げ、特に<古典芸能>と呼ばれる日本芸能について広く理 解を深めることを目的とする。	
	日本芸能史Ⅱ	日本の芸能にはどのようなものがあり、また、それらはどのような時 代背景のもとに成立したのか？後期では<近世～近代>に誕生した芸 能を取り上げ、特に<大衆芸能>と呼ばれる日本芸能について広く理 解を深めることを目的とする。	
	日本文学論Ⅰ	日本人のセルフはどのようなものとして検証されてきているか。さま ざまなアプローチからの、日本人のセルフを検討する。トランスナ ショナルといわれる今日、日本人の持つ「文化」とはどのようなもの として捉えられるているだろうか。異文化との接触から捉えられる 「日本人」には、どのようなステレオタイプが存在しているかを検証 する。また、どのようにして、そうした「偏見」に対して日本人とし てのアイデンティティを説明していけば良いだろうか。国籍や民族性 の異なる異文化とのコミュニケーションが活発化している今日では、 自らの文化的視点を把握しながら、相互理解を深めていく必要があ る。文化人類学的視点を学びながら日本文化の理解/説明の在り方を 検証する。	
日本文学論Ⅱ	グローバル化と日本人のアイデンティティ形成の関係を探る。日本は 西欧化、都市化、近代化されたものに取り囲まれているが、そこに、 日本人のアイデンティティはどのようにして形成されているかを英語 で議論し検証する。		

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目 (学科指定なし)	日本大衆文化論	日本のアニメーションをテーマとして取り上げる。ジャパニメーションと呼ばれるようになってきている日本のアニメであるが、それらを検討していくにはいろいろな道筋がある。特に日本アニメの中でアメリカはじめ、世界で実画化されているものを見ていく。どのような要素が世界に受けているのか、実画化の問題点、影響等について考える。	
	アート・マネジメント	芸術であっても、政治・社会・経済システムから遊離して存在することはできない。芸術を巡る国家や自治体の関与としての文化政策を国際的な視野から概観するとともに、芸術創造を支えるマネジメントの理念と実際を考える。語学力を生かして国際的な芸術の場を支える人材を育成する。	
	児童文化論	3つの児童文学作品／映画を取り上げて、さまざまな社会的な現実（文化的、歴史的、政治的、経済的）をいかに表象し、どのような形で批判しているかを考察する。ミヒヤエル・エンデの『モモ』、サン＝テグジュペリの『星の王子さま』、チャールズ・ディケンズの『クリスマス・キャロル』を熟読解釈することによって、＜現実批判＞の内容を検証していく。その際、内容はもちろんのこと、作品の＜ことばのふるまい＞と社会・文化の関わりに留意しながら分析することを重視する。そして文字と映像という二つの表象メディアの差異を射程に入れて、文字文学と映像文学の物語世界の比較も行う。	
	演劇「実技」Ⅰ	The aim of the course is to provide students with practice in basic performing/ improvisation skills, culminating in a performance in English. （仮訳）基本的な演技や即興の技術を習得し、英語で演劇を行うことができるようにすることを目的とする。	
	演劇「実技」Ⅱ	15分～20分のミュージカル台本をテキストとして、最終授業時の舞台発表に向け、演技・歌・ダンスの基礎を学びつつ稽古を重ねていく。学生達の発想・意見を生かしつつ、ワークショップ的に作品を創りあげていく。ミュージカルを演じることを通し、身体で表現すること、自己を開放すること等を感得していく。	
	日米比較教育論	日本と米国との教育制度を、主に大学・大学院等の高等教育分野を中心に相互の歴史や文化又は社会を比較し、教育が果たしている社会での役割を考えていく。特に、教育が個人をどのように変容させるかを日米の異文化に視点を当てて議論する。さらに、幼稚園から高校までの教育制度も視野に入れ、政治的経済的な政策として教育内容がどのように変遷してきたかを社会的歴史的な観点からも検討する。また、近來のグローバル化というインフォメーションテクノロジーの飛躍的な進歩を基礎にした世界的な経済変化の中で教育がいかに変化しているのかを個人の発達に視点を当てて考えていく。	
	国際機構論Ⅰ	20世紀以降の国際社会の象徴的側面として、国際社会の組織化するなかで国際機構の相次ぐ設立とその機能の拡大・進歩が特筆される。これら国際機構が国際社会においてどのような理念と機能を担い、国際社会の秩序形成と発展にいかなる貢献をしているのかを、国際連合を中心に講義する。主要テーマは、国際社会の組織化と国際機構、国際連合の成立と組織、国際連合の機能と課題、国際機構とNGOの活動、日本の国際貢献と国連。	
	国際機構論Ⅱ	国際機構論Ⅰの続編として、国連の主要専門機関(specialized agency)について講義する。これら専門機関ないし関連機関のうち重要性の高い機関を採り上げる。講義の順序としては、活動内容が比較的理解しやすい機関から、より専門性の高い機関へと進む。講義の主要テーマは、国際労働機関(ILO)、国連教育科学文化機関(UNESCO)、国連食糧農業機関(FAO)、世界貿易機関(WTO)、世界銀行(IBRD)、国際通貨基金(IMF)。	
	国際取引法Ⅰ	国際ビジネス取引に関連する法律を学ぶ。国際取引法は基礎編で、各国のビジネス背景の違い、国際化の意味、国際交渉、国際取引紛争の原因、法律の相違、契約意識の相違、権利意識の相違、訴訟観の相違、紛争解決の困難性等を概説する。また貿易取引の手順等も説明する。毎回国際ビジネス関連ニュースの発表を求める。リーガルマインドを養う授業でもある。	
	国際取引法Ⅱ	国際ビジネス取引に関連する法律を学ぶ。国際取引法ⅠはⅡより具体的なテーマを扱う。企業の海外進出の事業形態、外国の裁判制度、製造物責任法、独占禁止法、知的所有権法、国際契約法、国際取引紛争解決等の諸分野を解説する。毎回国際ビジネス関連ニュースの発表を求める。リーガルマインドを養う授業でもある。	
	国際マーケティング論	マーケティングとは、企業その他の組織が顧客満足獲得のために行う諸活動を意味する。企業行動に影響を及ぼす多様なステークホルダー（利害関係者）のうち、特に顧客に焦点を合わせた経営学の一分野であるとも言える。主要な講義テーマは、マーケティングの歴史とマーケティング思想の変遷、マーケティング戦略とマーケティング・ミックス～価格政策とプロモーション（販売促進政策）を中心に、消費者行動の理論と分析、マーケティング調査の基礎、スポーツ・マーケティングとスポーツ・スポンサーシップ。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目 (学科指定なし)	多国籍企業論	“多国籍企業”をキーワードに、企業活動のグローバル化の諸相について講義する。関連科目として国際経営論が開講されている。多国籍企業論と国際経営論に本質的な違いがあるわけではないが、便宜的に次のように区別して講義を進める方針である。すなわち、国際経営論では伝統的な経営理論のグローバル経営への応用編を講義し、多国籍企業論では多国籍企業の歴史とコース (Ronald H. Coase)の内部化理論を中心に、企業活動のグローバル化に関わる主要理論について講義する。主要テーマは、多国籍企業概念及びその歴史、多国籍企業の事例研究、多国籍企業と法、企業の多国籍化と直接投資、企業の多国籍化に関わる主要理論～内部化理論およびOLI理論を中心に、企業の多国籍化と組織及び人的資源、多国籍企業と国際課税。	
	国際協力入門	国際協力は王道なし。技術移転は1日にして成らず。これまでに国際協力を経験した人も、そうでない人も、人類共存という課題についてどのような考えを持っているだろうか。本講義では、21世紀を迎えた国際情勢の中における発展途上国の立場を理解するとともに、それらの国々が抱えている貧困問題や、環境問題、民族紛争問題に対して、国際社会がどのように対処しているのかを調べ、これからの課題を検討していく。そして、日本の援助はどのように貢献し、また、その一方でどのような課題を抱えているのかを明らかにし、講義終了時には、学生諸君がそれぞれの視点に基づいて協力方法を提言できるようになることが望まれる。	
	国際平和論Ⅰ	20世紀ほど世界が戦乱に明け暮れ、膨大な人々が被害を被った時代はない。同時に、20世紀ほど真剣に世界平和が希求されてきた時代もない。本講義では、20世紀を対象に、こうした「戦争と破壊の嵐」と「国際平和の希求」とが複雑に交錯してきた流れを歴史的かつグローバルに振り返る中から、これまでの経験と課題を学び取り、将来の展望と選択肢を考える。今日に至っても、世界に平和が訪れたとは言いがたい。依然として民族紛争や内戦は絶えず、国際テロや核開発等は大きな脅威のままである。経済危機は地球規模に広がり、貧困は拡大して「人間の安全保障」も大きな課題となっている。そうした中で、「平和」を創り出すためには我々は何をしなければならないのか、何をすべきなのか。共に力を合わせて「平和」を創り出していく道筋を考えたい。	
	国際平和論Ⅱ	国際平和論Ⅰの講義を踏まえて、平和実現のための武力介入、平和維持 (PKO)、平和構築、国防といった課題を国際政治と国内政治の両面から複合的に考える。特に、世界の平和構築に果たすべき日本の役割に重点を置き、1991年の湾岸戦争以降に日本が経験してきた岐点と選択肢を分析する中から、戦後日本の在り方を考え直し、これからの日本の課題と可能性を考える。授業と同時進行的に展開する最新の国際情勢に触れることも多いので、履修者には絶えず新聞・雑誌等で情報を収集し、その意味を考えることが求められる。	
	国際ボランティア	「ボランティアには興味はあるが、どのようにしたら良いのかわからない」という人は多いのではないだろうか。また、「ボランティアをすればきっと喜ばれるに違いない」と考える人もいるであろう。本講義では、さまざまなNGO団体や個人の人々の活動を知り、国際社会の貧困問題や文化摩擦等に触れながら、国際ボランティア活動の形態や実施方法等について考えていく。授業に出ればボランティア活動ができるという性質のものではなく、ボランティア活動を受け入れている人々やコミュニティがどのような立場に置かれているのかを学生諸君それぞれが考えて、自分の力でできるボランティア活動を見つけることが望まれる。	
	東アジア政治経済論Ⅰ	主題は世界金融危機と東アジアである。日本・中国・朝鮮半島・アセアンを巡る日々のニュースや資料等を使いながら、東アジアの現状を読み解いていく。そのプロセスで政治、経済、社会、外交の相互作用を学んでいく。講義の目的は、ニュース報道というバラバラの情報を、いかにして「かたち」にしていくか、その方法論を体得することである。また、「受身」の情報受信を超えて、発信する力を身に付ける。	
	東アジア政治経済論Ⅱ	前期に続き、テーマは世界金融危機と東アジアである。日本・中国・朝鮮半島・アセアンを巡る日々のニュースや資料等を使いながら、東アジアの現状を読み解いていく。そのプロセスで政治、経済、社会、外交の相互作用を学んでいく。講義の目的は、ニュース報道というバラバラの情報を、いかにして「かたち」にしていくか、その方法論を体得することである。また、「受身」の情報受信を超えて、発信する力を身に付ける。	
	ヨーロッパ政治経済論Ⅰ	欧州連合 (EU) では2009年12月にリスボン条約が発効し、欧州統合はさらなる統合の段階を迎えつつある。この講義では、欧州統合の歴史やEUのしくみ、EUの諸課題について説明し、欧州統合とはどのように進められて来たのか、そして今後どのように進もうとしているのかについて理解を深める。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目（学科指定なし）	ヨーロッパ政治経済論Ⅱ	EUの外交・安全保障政策や他の国際機関（NATOやOSCE等）について焦点を当て、統合が進む中でヨーロッパの政治がどのような課題を抱え、国際社会の中でヨーロッパが対外的にどのような政策を進めているかについて理解を深めるとともに、いくつかの欧州諸国の政治動向についても取り上げ、欧州統合の過程の中でそれぞれの加盟国がどのような意図で動いているかについても理解を深める。	
	アフリカ研究入門Ⅰ	アフリカを取り上げ、政治・社会・経済のさまざまな面から総合的な理解を深めることを目標にする。アフリカに生きる人々について、新聞・テレビ等のマス・メディアでは、残念ながらまだまだ深く知ることができないのが現状だ。特に、人々の普段の暮らし、また紛争、貧困、一党独裁等さまざまな問題を理解するカギとなる、奴隷貿易や植民地化の歴史、独立に至る政治変動については、日常で接する機会が非常に少ないと思う。授業では、これらの点について、パワーポイントや写真を使いながら、より深い理解を目指す。可能な場合はビデオ素材も使用する予定である。	
	アフリカ研究入門Ⅱ	サハラ以南アフリカ諸国へのより深い理解を目標とし、中心国の一つケニア共和国に焦点を当て、政治史を手がかりに深く掘り下げた考察を進める。「アフリカなのになぜケニア一国だけを取り上げるのだろうか？」「政治ってなじみがないけど…。政治で何が分かるのだろうか？」——こうした疑問にも講義の中でじっくり答えていく。授業では、パワーポイントや写真（素材があればビデオ映像も）を使い、より良い理解を目指す。	
	憲法Ⅰ	社会のさまざまな問題を「憲法的」に思考する視点を獲得することである。憲法という名前の法は「法典」という形で存在しているが、憲法上の問題は社会の至るところに存在している。分かりやすいところにあるものもあれば、一見しただけでは分からないところに隠れているものもある。社会に存在する憲法問題を発掘する眼力を身に付け、他者の基本的人権に対して敏感になることで、憲法をただの紙に書かれた無味乾燥な言葉としてではなく「生きた」ものとして捉えることができるようになるだろう。	
	憲法Ⅱ	日本国憲法には、基本的人権に関する条文とともに国家の統治機構に関する条文が備わっている。憲法が英語で「constitution（骨格）」と表されるように、日本国憲法には、まさに国家の骨格について書かれているのである。基本的人権条項が思想的骨格ならば、統治機構の条文はそれを支える形式的骨格であると言えよう。統治機構について学ぶことは、日本国憲法の想定する「国家像」を学ぶことになる。	
	現代国家論Ⅰ	古代ギリシャ以来、国家についてさまざまな論じられてきたことは事実であるが、現在の我々がイメージする「国家」と古代の国家とはかなり異なっている。現代の国家は、古代の「都市国家」でも中世的「帝国」でもなく、その歴史はそれほど長いものではない。ヨーロッパに源流を持つ「近代国家」は、主権と領土（国境）と国民からなる「主権国家」、「領域国家」、「国民国家」である。ところが、その近代国家は、今、EU統合に見られるように、その発祥の地において新たな展開を見せ始めている。できるだけ多くの生の現実に当たることで、「国家」を巡るさまざまな現状を把握することに努めたい。	
	現代国家論Ⅱ	「国家」の存在は自然なものであり、理論的に正当化される必要のないものだと思える場合もある。しかし、長い政治哲学、倫理学の伝統は、ある意味で国家を正当化しようとする試みであったと見ることもできる。まして、歴史的に新しく、しかも理論的正当化作業を経て形成されてきた近代国民国家がいろいろな点で続々を見せ始めている現在、その正統性の根拠と限界を見極めることはきわめて重要なことである。実際、「テロ」と言われるものと正当な抵抗権の行使あるいは軍隊による武力行使との違いはどこにあるのだろうか。日本においても、靖国問題や防衛論争、在日の人々や難民の処遇等、国家の正当性問題と深く関連する問題がある。前期の現状認識を踏まえた上で、こうした点について思想的及び理論的に考察していきたい。	
	社会調査法Ⅰ	社会という集合現象を調べるために、社会調査を行なう必要がある。社会調査を行うために、多くの社会事象を理解する専門的な知識や訓練が必要である。本講義の目的は、社会調査とは何かを理解した上、その基礎技術を身に付けることである。社会調査を成功させる重要条件といえば、まず社会調査の道具アンケート用紙を作成することであろう。しかし、アンケートの作成は決して聞きたいことを質問にするだけのような簡単なものではなく、調査対象や調査テーマをいかに決めるか、理論仮説をいかに組み立てるか、アンケートの言語問題をどう考えるか、質問をいかに合わせるか等々の問題を解決しなければならない。さらに、アンケートを配るために、サンプリングの方法も勉強する必要がある。本講義は、社会調査の設計とアンケート用紙の作成を中心に社会調査の流れをできるだけ具体的な事例に基づいて説明し、多くの練習を行う内容を持っている。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目（学科指定なし）	社会調査法Ⅱ	社会調査を通して得た統計的データを分析する必要がある。経験社会学の重要内容は調査データの解析である。現在、コンピュータの普及によって社会調査においてもその応用が多くなっているため、昔手間を取る調査データの解析が簡単にできるようになった。本講義では、まず調査票の整理という準備段階から始め、そして社会科学統計ソフトSPSSを利用してデータベースを作成し、データ解析することへ進みたい。授業の目的は、専らコンピュータの知識や統計学の知識を勉強することではなく、むしろ実例に基づいてSPSSや社会調査データ解析の知識を応用することである。実践的練習によってコンピュータに馴染み、社会統計の基礎知識を身に付けるように指導したい。	
	環境科学Ⅰ	人間社会は自然環境の中に包含され、自然環境による恩恵なくしては存続不可能である。この講義では、教室での講義と生物観察の両面から、自然環境と生物多様性について学ぶ。生物学Ⅰ（前期）、環境科学Ⅱ（後期）も併せて履修することが望ましいが、必須ではない。講義時間内に学内の植生調査を行う。講義時間外の「南房総小湊海岸の磯における生物観察」「雑木林における生物観察」は、土日・祝日に行う。	
	環境科学Ⅱ	環境考古学的知見も踏まえて、自然環境の破壊により人間社会がどれほどのダメージを蒙るか理解し、我々を取り巻く環境（特に陸上と海洋）に現在起きている問題とその原因について学ぶ。東京湾のプランクトンを実際に顕微鏡を用いて観察する。環境科学Ⅰを履修していることが望ましいが、必須ではない。途中で数度小テストを課し、自己採点により理解を深める（小テストは成績には含めない）。講義時間外に行う「野外における生物観察」（長作市民の森又は谷津干潟を予定している）は、土日・祝日に行う。	
	企業財務Ⅰ	企業経営と戦略を理解する上で避けては通れない企業財務を平易な内容で解説することを目的とする。授業は、（１）企業財務を理解する上で出発点となる財務諸表の読み方、（２）財務諸表の枠組みを理解した上で、財務分析の基本的手法、（３）企業が財務戦略を行う上で不可欠な企業調達や資金運用の仕組み等の講義から構成される。企業財務Ⅰにおいては、財務諸表の仕組み、財務分析の基礎、さらに間接金融による資金調達手法に特に焦点を当て、授業を進める。講義のはじめは簿記の初歩からの講義となるが、企業財務理解の上で不可欠な知識である点を念頭に置き、積極的に講義に出席することが求められる。	
	企業財務Ⅱ	企業財務Ⅰで学んだ企業会計知識を前提に、企業の資金調達、運用に焦点を当てて講義を進める。特に、近年企業の動きが活発化している証券市場を通じての資金調達・運用については、多くの時間を割く方針である。また、M&A(合併と買収)など企業財務にかかわる最近の金融市場の動向についても、論じていきたい。	
	民法概論Ⅰ	法と経済という二つの視点から、民法・経済法（独占禁止法）に関する基礎知識を修得しつつ、社会生活で生じる現代的課題にどのように対処すべきかについて検討する。日本の民法・独占禁止法についての基礎理論（法的三段論法、法解釈、法律要件と効果、法律行為、近代市民法原理・原則そして競争原理等）を解説し、民法で規定される家族関係や社会生活における財産所有・契約取引関係だけでなく、現代的で特殊な取引、労働・社会福祉・環境そしてこれらの相互の関係について、履修者が、法律学と経済学等の視点から検討し得る能力を涵養することに最終目標を置く。この目標は、刑事事件の裁判員制度に選任された履修生に求められる能力とほぼ一致する。	
	民法概論Ⅱ	自由市場経済において、個人が財産を自由に使用し、収益をあげて、処分（生産し流通）し得る法制度－財産権の私的側面－について学ぶ。資本主義経済社会は、このような財産の私的側面保護法（民法）を基礎に形成されている。しかし、現代社会の法律問題は、財産権の私的側面が強調されすぎるとともに、経済独占、労働、知的財産及び自然・社会環境という各々の分野において生じる民事法上の諸請求（以下では環境問題という）として現れる点を特徴とする。関係する社会法分野に属する独占禁止法、経済学そして産業組織論の視点から、財産権を分析し、環境問題発生の法的原因（日本において財産権の社会的側面の欠如）を明らかにして、21世紀にあり得べき財産権について検討することに重点を置く。	
	商法概論Ⅰ	事業は会社組織を通じて行うことが一般的である。そこで、まず会社の概念・会社の種類・会社法総則等について説明した後、株式会社を中心として株式会社の設立・株式・新株の発行・新株予約権等について説明する。次に、会社の組織及び意思決定・業務執行過程について、法律の定めと現実の会社組織内の実情とを対比させながら、具体的に解説する。続いて、計算、持分会社、社債、組織再編、外国会社等について解説する。ビジネスの世界で必要とする基本的な知識を広く取り上げて解説するので、将来のために、意欲的に学習に取り組むことを希望する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イベロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目 （学科指定なし）	商法概論Ⅱ	企業は、まず法人組織（会社）を作り、次に他の法人及び個人等と取引をすることによって収益を上げ発展する。取引は、どのように行われていくのか。そこにはどのような問題が発生し解決されているのか。最終的に決済はどのように行われるのか。海外との貿易取引はどのように行われ、どのような問題があるのか等、ビジネスの現場で必要となる知識について幅広く解説する。講義の順序としては、前期の「商法概論」を引き継いで、最初の2～3回において、「商法」の中の「商法総則」「商行為法」を講義し、次に取引の決済（手形・小切手）、貿易取引、インターネットによる（貿易）取引（電子商取引）、通常のビジネスにおける取引上のさまざまな問題へと順次解説を進めていく。社会に出て、ビジネスの現場で必要とするさまざまな知識を一つ一つ話していく。40年以上にわたる実社会における長い経験を基に数々の実例を織り込んで興味深く解説するので、将来必ずや役に立つと思う。	
	英国文化実地研究	イギリスの一般家庭に滞在しながら、イギリスの大学でイギリスの文化、社会、政治、経済、教育について学ぶ。大学での授業は、講義、討論、プレゼンテーションの形態をとり、一人一人の積極的な参加が求められる。また、日帰りの旅行、市内見学、大学の学生との交流等を通してイギリス文化の実体験をする。この研修は春期休業中に実施される。	
	米国文化実地研究	アメリカの一般家庭に滞在しながら、カリフォルニア州モンテレー国際大学でアメリカ文化、社会の諸相について学ぶ。教室内での授業だけでなく、現地の人を招いてのパネルディスカッション、コミュニティーの人達との交流、フィールドトリップ等を通してアメリカ文化を実地体験する。また、現地の小・中学校を訪問して日本文化を紹介する活動も含まれている。ディスカッション、発表、インタビュー等、英語を使ってインタラクションをすることが中心のプログラムになっているので、英語コミュニケーションに対する積極的な態度が既に備わっていることが重要である。なお、サンフランシスコ市への旅行が研修に含まれている。この研修は春期休業中に実施される。	
	オセアニア文化実地研究	オーストラリア又はニュージーランドの一般家庭に滞在し、現地の大学でオセアニアの文化、社会、政治、経済、言語事情について学ぶ。授業は、講義、討論、プレゼンテーション等の形態をとり、オセアニアの文化事情に対する理解を深めることがその目的である。なお、現地の観光地への小旅行も研修に含まれている。夏期休業中に実施する。	
	カナダ文化実地研究	カナダの一般家庭に滞在し、首都オタワにあるカールトン大学でカナダの歴史、文化、社会、政治、経済、言語事情等について学ぶ。授業での講義、プレゼンテーションを通して、カナダの文化事情を把握し理解することがこの研修の主な目的である。キャンパス外での活動や日帰り旅行もこの研修に含まれている。この研修は夏期休業中に実施される。	
研究演習	研究演習	テキストを読み、資料を調べてプレゼンテーションを行い、討論を行うことで、読解力・リサーチ力・発信力を養うとともに、書く作業を通して、情報を文字にして発信する力も養成する。主なテーマは次のとおり。 （ 8 青砥 清一）国内外の移民・外国人労働者の歴史と現状等 （ 36 本田 誠二）スペインの文学・思想・歴史・文化研究等 （ 37 藤田 知子）「ステレオタイプ」の問題等 （ 38 Bruce Horton）日本語と英語の音韻論等 （ 58 Silvia Lidia Gonzalez）映画の物語の分析等 （ 59 高木 耕）発展途上国社会開発事情研究等 （ 60 飯島 明子）環境・野生生物に関連するテーマ研究等 （ 78 奥田 若菜）現地調査を主体とした文化人類学研究等 （ 79 吉野 朋子）ポルトガル語研究等 （224 江藤 一郎）レコンキスタの時代考証等 （225 Angel Bravo）イベロアメリカの文化研究等 （226 柳沼 孝一郎）メキシコ地域文化研究等	
卒業論文	卒業論文	卒業論文。	
自由選択科目	キャリアデザイン	未だ職歴（＝キャリア）を持たない履修生を対象として、職歴を描く力を養う。力とは、スキル、知識及びマインドセットである。世間に同一の家族が存在しないのと同様に、他人と同一のキャリアは存在しない。自身のキャリアを描く、という本質的には孤独な作業の能力を、この科目においては履修生同士の演習を繰り返すことで高めてゆく。もっとも易しいカリキュラムを目指すのが、自身と向き合うことが易しいとは限らないので多くの気付きを得ることができるであろう。授業計画には通商産業省が提唱する『社会人基礎力』向上の訓練を含む。「なぜ、いま、ここで、これを学んでいるのか」をより明確にすることで、貴い大学生活を更に充実させる弾みとして欲しい。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
自由 選 択 科 目	キャリア開発	自己のキャリアを考える時、3つの観点から自己分析をすることが重要である。①自分は何に興味があるのか？②自分の価値観は？③自分の能力は？本コースは、将来のキャリア設計にあたり、最もベースとなる「自分自身の理解」を他者とのコミュニケーションを通じて深めていくユニークなコースである。毎回テーマが与えられ、そのテーマに沿ったグループ討論やスピーチを行う。また、ゲスト講師を適宜招聘して業界情報や現場で必要とされるコミュニケーションのノウハウを学習する。本コース終了までに次の能力を習得することを目指す。 1) 自己のキャリアビジョンが描ける能力、2) より良い人間関係を築く能力、3) ストレスや悩みを克服する能力、4) 人前で自分の考えを堂々と話す能力。自分が将来進むべき道が分からずに迷っている方、自分自身をどうしたらもっと自由に表現できるのかと悩んでいる方、積極的な自分になりたいと思っている方の履修を歓迎する。	
	ビジネス・インターンシップ I	ビジネス・インターンシップは次のような学生のために授業内容が企画された。(1) 自分が実社会でどのように社会人として生計を立てて生きていくのか実感が湧かない学生、(2) 企業とは何か、どのように企業を知ればよいのか、そして企業での仕事とは何なのかを知りたい学生、(3) 企業リサーチやマーケティングの方法を実際に使うことに興味がある学生、(4) 企業に就職することが不安であり、どのように企業に応募して良いのか心配な学生、(5) グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーションを通じて講師や他の学生と意見交換をしたい学生。このインターンシップを最後までやり遂げれば、課題をやり遂げた達成感も得られる。さらに就職活動の際にインターンシップを行ったことを具体的な体験として企業にアピールできる。なお、授業はゲスト講師も含め、15名程度の小グループゼミナール制にして進めていく。	
	ビジネス・インターンシップ II	前期ビジネス・インターンシップ I を履修し、夏季ビジネス・インターンシップを修了した学生がグループディスカッションを通して相互の情報や意見交換を行う。そして、インターンシップで得たデータ内容をまとめ、プレゼンテーションを行い、報告書を作成する。このようなプロセスのなかで、インターンシップにおける方法の評価、コミュニケーションとしての良いプレゼンテーションの仕方、分かりやすい報告書の書き方等を学んでいく。さらに学生個人としての企業の選択の仕方又は企業への志望動機・理由を考えていく。加えて将来の就職活動のために、エントリーシートの書き方の練習や模擬面接も行っていく予定である。そして社会人基礎力のより深い理解を図るため、グループで「ドラマ」をつくり、プレゼンテーションを行う。	
	学習支援活動ボランティア	大学生は、自らの時間を主体的に設計し、勉学、サークル活動及びボランティア活動に励むことができる十分な時間があるといえよう。現在、本学の学生はさまざまな地域支援や海外ボランティアに参加しているが、本ボランティアは教育機関における活動である。本科目は、教育委員会と連携を図り、学校教育機関において既に展開されている学習支援関連のボランティア活動に対し、単位を授与するものである。ボランティア実践については、初回の合同オリエンテーション時に示す3種の公的機関である。本支援活動の目的は、教育機関で行われている継続的なボランティア活動について、教師等ヒューマン・サービスに携わる学生に対し、学校における地域貢献活動を通じて、参加者が児童生徒を支援することの喜びを体験し、他者理解を深め、そして、学校教育について理解を深めることを目的とする。	
	国際ボランティア体験	近年、異文化交流や国際理解の機会（実地体験授業）を要望する学生の声が多く聞かれるようになった。かかる事情を考慮して、大学では、平成14年度から国際教育交換協議会（CIEE）が主催する「国際ボランティアプロジェクト」への参加者の中から希望者に対して単位を認定する制度を導入している。「プロジェクト」を通じて異文化理解と国際交流を実体験することが狙いである。単位取得希望者には、CIEE主催の説明会への出席、報告書の作成と提出、体験談の発表等の課題が課されることになる。	
	インドネシア文化実地研究	春期、夏期の2回、1ヶ月間の語学研修を行う。研修地はインドネシア、東部ジャワ州のマラン市にあるマランクセスワラ大学及び中部ジャワ州のジョクジャカルタ市にあるサナタ・ダルマ大学である。午前中は大学での語学研修、午後はチューターとの課外活動及びインドネシアの伝統文化を学ぶ実習を行う。インドネシアの一般家庭に滞在し、大学では日本で学んだ個人個人のインドネシア語習得力の再確認と日本では学べない別の角度から見たインドネシア語を学習し、さらに実際にインドネシアの伝統、文化を学んでもらう。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
自由 選択 科目	ベトナム文化実地研究	毎年夏季休暇中に本学のベトナムの2つの提携大学、ホーチミン市人文社会科学大学とハノイ大学において実践的な語学研修を受けるプログラムである（研修期間全体は自由時間を含め約1ヶ月）。ベトナムでの語学授業はさまざまなタイプの教員と触れる良い機会であり、現地生活そのものも語学力を伸ばす絶好の機会である。現地で越越辞典や越英・英越辞典等、語学学習に不可欠なツールを各自購入すること。通常の授業の他、両校の日本語を学習する学生達との交流会も開催される。	
	タイ文化実地研究	タイのチョンブリーにあるプラパー大学で、1日当たり6時間のタイ語の授業を12日間受講する。滞在中、学生はタイ人ホストファミリーの元で生活する。学生のタイ語上達、文化的意識及び動機を高めることを目指す。	
	英語資格基礎Ⅰ	実践的なビジネスシーンで活用できる語彙、リーディング、リスニングのトレーニングにより、ビジネススキルであるTOEICスコア『550点レベル以上』に相当する英語力を身に付ける。すでにそれ以上のスコアの学生にとっても、語彙力と文法力、速読力と速聴力の強化により、さらなるスコアアップが期待できる。さらにTOEFLのアカデミックスキルとして、外国の大学で学生生活を送り、自然科学、社会科学、人文科学を英語で学ぶための『教養と語彙力』『リーディング力とライティング力』を強化する。	
	英語資格基礎Ⅱ	実践的なビジネスシーンで活用できる語彙、リーディング、リスニングのトレーニングによりビジネススキルであるTOEICスコア『650点レベル以上』に相当する英語力を身に付ける。すでにそれ以上のスコアの学生にとっても、語彙力と文法力、速読力と速聴力の強化により、さらなるスコアアップが期待できる。さらにTOEFLのアカデミックスキルとして、海外の大学で学生生活を送り、自然科学、社会科学、人文科学を英語で学ぶための『教養と語彙力』『リスニング力とスピーキング力』を強化する。	
	トライ・中国語	中国語の基礎を集中的に学ぶことで、中国語がどのような言語であるか体験する。授業内容は、中国語I前期分（発音と初歩的な文法）に相当することを学ぶ。音楽的な美しい響きを持つ中国語を楽しく学ぶ。	
	トライ・スペイン語	スペイン語は世界で3億5千万以上の人々によって話されている国連の公用語である。日本とスペイン・中南米との結びつきはますます強まり、スペイン語を話し、スペイン語圏の文化を理解する人材がビジネス社会や地域社会において求められている。講義を通じ、旅行等で役立つ簡単な日常表現を覚えながら、スペイン語の文法システムを概観する。併せて、スペインや中南米等スペイン語圏の文化を紹介する。受講後、スペイン語への関心が高まったら、来年度選択外国語「スペイン語I」に進んでほしい。本講義は良いスタートを切るための下地となることだろう。ここで取り扱う文法の内容は、主に文字と発音、名詞、冠詞、形容詞、前置詞、動詞（現在形を中心に）等である。	
	トライ・韓国語	韓流映画、韓流ドラマ、K-POPS、サッカー等を通じて、韓国語に関心を持つ人達が以前にも増して多くなってきたようである。この授業では、5日間という短い期間で韓国語の初歩の初歩を学ぶことを目的とする。主に焦点を当てることは以下の基本的な事柄である。「ハングル」という独特の文字の習得、音韻体系（母音と子音の発音）、よく使われる挨拶言葉、旅行会話として必要な表現。	
	トライ・フランス語	フランスにいつか行ってみたい、フランス語がどんな言語なのか少しでも知りたい。こうした願いを持つ人のための講座である。フランス語の発音、語彙、基本表現等をポイントを絞って学び、フランスやフランス語圏の文化のミニマル・エッセンスを概観する。フランスに旅行する前に言葉を少しでも学んでおきたい、フランス語を話す知り合いとフランス語を少しでも交えてコミュニケーションしたい、フランス語の音をフランス語らしく発音できるようになりたいといったニーズに応える。フランスやフランス文化についても映像や映画等を使って積極的に紹介する。	
	トライ・ドイツ語	挨拶や自己紹介、趣味、食べ物や飲み物の好み、買い物等、日常的な事柄の表現の仕方についてパートナーとの練習を中心に進めていく。表現練習の中で、発音の決まりや基礎的な文法についても解説する。また、若干だが、ドイツ事情、特にミュンヘンについて触れたい。この授業を通して、ドイツに今まで以上に関心を持ち、ドイツに行ってみよう、あるいはドイツ語を本格的に勉強してみたいという気持ちを抱くことを願っている。	
	トライ・イタリア語	イタリア語の基礎的なしくみを理解し、併せて日常生活や旅行等を使う簡単な会話を勉強する。イタリアの生活や文化にも触れる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イベロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
自由 選択 科目	トライ・ロシア語	ロシアを旅する時町で目にするほとんどの標示は独特のロシア文字で書かれている。だから何はさておきこの文字が読めるということが不可欠になる。逆に言えば文字が読めればかなりの強みになるわけである。そして文字さえ読めれば発音はほぼ文字通りなので、それほどむずかしくはない。案外「レストラン」とか「カラオケ」とか馴染みの言葉だったりする。本講座ではロシア語の文字を覚え、発音に慣れるところからじっくりと指導していく。挨拶をはじめ、簡単な日常会話も随時盛り込む。またロシアの生活や文化に纏わる話も交えながら、短期間でロシア語の概略を学ぶ。	
	トライ・アラビア語	アラビア語は、モロッコからイラクに至る北アフリカ、西アジアに暮らすアラブ人(22カ国、2億人以上)が使っている言語で、国連の公用語にもなっている。また、東南アジアのイスラム教徒であっても礼拝の言葉はアラビア語で唱え、聖典コーランをアラビア語で唱えている。アラビア語は10億人を越える世界中のイスラム教徒にとっての共通語だとも言えるだろう。さらに、アル=ジャズィーラ放送に代表されるアラビア語衛星チャンネルは、英語が支配する現代メディアへの挑戦としても注目されている。このようにアラビア語は現代世界では極めて重要な言語だが、日本では勉強する機会が少なく、勉強している人もほとんどいない。この授業では、食べ物、衛星放送、アニメ等に見られる現代アラブ文化を紹介しながら、アラビア文字と初歩的な文法と会話を学ぶ。	
	トライ・ベトナム語	初めてベトナム語を学習する人を対象に、ベトナム語の発音と綴り字の練習から始まり、いくつかの状況に応じた会話を4日間(1日3時間)という短い時間の中で集中的に学ぶ。	
	トライ・インドネシア語	インドネシア語は文字がアルファベットであり、音も子音と母音の組み合わせが多く、日本人には発音しやすく、また学びやすい言語である。講義時間をフルに使い、現地へ行ってインドネシア人、マレーシア人と簡単なコミュニケーションができる程度になることを目標とする。初歩のインドネシア語文法は複雑ではなく、単語力があればある程度まで上達するので、単語に力を入れる。また、DVDを使用して、現地の文化、伝統等も紹介する。	
	トライ・ポルトガル語	ブラジル、ポルトガル語、5つのアフリカ諸国等、ポルトガル語を公用語とする人々は現在約2億人を数え、世界で7番目に多く話されている言語である。本授業では、最も多くのポルトガル語人口を持つブラジルのポルトガル語を対象とし、どのような言語であるか、その特徴について解説し、初心者向けのポルトガル語習得を目指す。近年ブラジルはめざましい経済発展を遂げ、日本企業の進出が増えている。また、2014年にはサッカーのワールドカップが、2016年にはリオデジャネイロ市でオリンピックが開催されるため、注目度がますます高まっている。授業では、視聴覚教材を使って、Jリーグのサッカー選手や、K-1等の格闘家、ボサノヴァの歌手等、日本でもなじみの深いブラジル人が実際に話している言葉を実際に聞いてみる。	
	トライ・タイ語	In this 4-day intensive, students will be able to see a general picture of the Thai language. They will be introduced to language used in daily life as well as the Thai writing system. (仮訳) 4日間の集中講義で、タイ語概要を掴む。タイの筆記体系と同時に、日常生活で使用する言葉も紹介する。	
教職に 関する 科目	教師論	教職の意義及び教師の役割について、教員の職務内容(研修、服務規律、身分保障の実態等を含む)や学校現場の現状等に触れながら理解し、教師に課せられた使命の大きさ、果たすべき役割等についても具体的事例を交えながら講じ、教職を目指す上で必要な資質の基礎を養う。	
	教育原理	教育の理念、歴史、思想等を学び、教育の意義や学校の社会的意味、公教育のあり方等を考えるとともに現代の学校教育を巡る課題を理解して、教職を目指す上で必要な資質の基礎を養う。	
	教育心理学	教員採用問題を網羅した教育心理学の基本技法・理論の理解を深め、学校現場で活用していくことを目標とする。初期は、教育心理学の概論、自己理解のための性格検査の体験、人格・発達について学び、中期は、知能・学習面の諸理論を習得し、末期は、教育心理学の学校現場での活用について、最新のストレス・マネジメント教育、障害のある生徒の心身発達及び学習過程を具体的事例を採り入れて学習していく。テキストやプリントに基づき進行し、また、ビデオ・OHP・スライド教材も用いる。講義の合間には、性格検査等の個人ワーク及び討論等の小グループ・ワークを導入する。また、受講者が内省的に考えていく過程が大切なので、期間中、適時3回、講義終了20分前に課題に対する「感想レポート」を作成する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教 職 に 関 す る 科 目	教育社会学	教育社会学とは、教育に関わるすべての営みとそれに関わるすべての社会現象を対象とし、生じている教育問題の構造やメカニズムを明らかにする学問である。本講義では、特に「子どもの社会化」に焦点を当て、(1) 家族・学校・地域社会の状況、(2) 子供の人間関係の構築、ハビトゥス獲得、セルフイメージの確立、(3) 社会における役割観や地位指向の形成が、各々どのように関連しているのかを整理する。(4) 非行や問題行動はどうして起こるのかを分析し、教育基本法第1条にある「社会の形成者として必要な資質を備えた・・・国民の育成」とはどうあるべきかを検討する。	
	教育行政学	私達の住む現代社会は、法律がもとになって動いている。一見関係がないように思われる教育でも、その背景には、法律、行政の制度があって毎日の教育活動が行われている。これらについて基本的な知識を身につけて初めて良き教育者となることができる。そこに教育法規や教育行政を学ぶ必要性が出てくる。今日、教育を取り巻く環境は大きく様変わりしつつある。このことに理解を深めつつ、学校教育に必要な基礎的な法律、制度の仕組みを中心に、教育課程、学校事故等、具体的な問題にも触れ、教育行政についての体系的知識の修得を目指すことにする。	
	教育課程論	各学校は学校の教育目標等を達成するため教育課程を編成する。教育課程編成に係る法体系等を概観するとともに、中学校学習指導要領の「総則」を通して、教育課程に関する基本的な知識を得て、同課題を検討する。	
	英語科教育法Ⅰ	中学校の英語教師を志す人のために、実践的な英語指導技術の習得を目指す。目標は、「なぜ英語を学ぶのか(教えるのか)」について考えること、基礎的な英語教育理論を学び、中学校の授業での応用のしかたを考えること、優れた英語教育実践を学び、自分自身の理想の英語授業指導案を考えることという3つの柱からなる。中学生の指導に焦点を当てるため、Classroom Managementについても折に触れて言及する。前期は英語教育理論の一部を紹介し、教育現場での応用を考える。基本的には講義形式の授業だが、随時教え方を実演し、ディスカッションも重視する。真摯な姿勢と向上心を持ち、きちんと準備して休むことなく授業に臨める学生であること、本学の定めるB基準を満たしていることが履修の条件である。	
	英語科教育法Ⅱ	中学校の英語教師を志す人のために、実践的な英語指導技術の習得を目指す。目標は、「なぜ英語を学ぶのか(教えるのか)」について考えること、基礎的な英語教育理論を学び、中学校の授業での応用のしかたを考えること、優れた英語教育実践を学び、自分自身の理想の英語授業指導案を考えることという3つの柱からなる。中学生の指導に焦点を当てるため、Classroom Managementについても折に触れて言及する。後期は公立中学での授業のビデオの視聴を通して、授業の進め方を分析・ディスカッションする。また、講師自身の、中学・高校・大学・幼稚園での英語教育の経験を生かして、授業で使える楽しい教材・アイデアの数々を具体的に紹介する。真摯な姿勢と向上心を持ち、きちんと準備して休むことなく授業に臨める学生であること、本学の定めるB基準を満たしていること、が履修の条件である。	
	英語科教育法Ⅲ	中学校・高等学校の英語教師を志す3年生及び4年生のために、実践的な英語指導技術の習得を目指す。英語科教育法Ⅱでは扱えない分野についてできれば少人数のゼミ形式で教師と学生で討論をしながら考え、指導技術を高めていく。4年生には、4月、5月の期間、教育実習で行う予定の教材を用いてOral Introduction等の練習を行い、指導技術を検討する場を提供したい。その後は、学生の要望に応じて教員採用試験の準備等に当てる予定である。3年生には、英語科教育法Ⅰで学ぶThe Oral Methodの指導技術に対する考えを深めるとともに、授業全体の流れの中で効果的に用いる活動について検討してもらう。	
	英語科教育法Ⅳ	中学校・高等学校の英語教師を志す3年生及び4年生のために、実践的な英語指導技術の習得を目指す。英語科教育法Ⅲでは扱えない分野について、少人数のゼミ形式で教師と学生で討論をしながら考え、指導技術を高めていく。listening, speaking, reading, writingの指導法から一つ選び、自ら10週間体験学習してその指導法に効果があるかどうか検証する。学期の最後に検証の結果をクラスで共有する。	
	スペイン語科教育法Ⅰ	本を読む力は、本を読むことによってしか、得られない。太宰治の「走れ、メロス」と同じ内容のスペインの古典「アベンセラーへと美しきハリファの物語」を読む。	
	スペイン語科教育法Ⅱ	スペイン語の教職免許取得を目指す学生を対象とした必修科目である。スペイン語を教える上で、スペイン語と英語を対照して勉強すると、教師になった時に役に立つので、英語で書かれたスペイン語の参考書の一部を読みながら、英語とスペイン語の違いを考えていきたい。	

授 業 科 目 の 概 要			
(外国語学部イペロアメリカ言語学科)			
科目	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教 職 に 関 す る 科 目	道徳教育の研究	道徳は人間が「人間らしく」生きようになるとともに発生してきた。この道徳は人々により思索され、吟味され、次の世代に引き継がれていく。なぜなら道徳教育は私たちがより善い社会を構成し、その中で一人ひとりが善く生きていくためには不可欠であるからである。ではどのような道徳教育がこのために必要なのか。この問いに答えるために、授業では道徳教育に関わる具体的問題を取り上げ、討議を行う。すなわち、それぞれの主張を提示し、その吟味を行うことによって、道徳教育の本質や、その実践を考える。	
	特別活動論	現行の学習指導要領では、体験学習が重視されており、特別活動への期待が高まっている。本講座では、特別活動の内容一学級（ホームルーム）活動・生徒会活動・学校行事一についての指導の原理・方法を習得するとともに、学校の活性化を図るための課題を明らかにしていきたい。授業は、講義・発表等を併用する。	
	教育工学	教育実践現場において、教師によるマルチメディアの授業への導入、学習教材の開発、学級運営の向上、教育問題の解決・改善等、教育工学の知識を利用していくことが期待される。このためには、諸種の研究方法や情報機器を利用した効果的活用法を理解し、科学的・論理的思考方法を習得していることが前提となる。教育現場で有効な実践的研究方法、特にアクション・リサーチを習得・体験していくことにより、教育工学の基礎的な視点と分析力が習得されることを目標とする。なおアクション・リサーチとは、問題の発見→計画立案→計画の実行→分析→現場へのフィードバック→さらなる改善点の発見の一の円環的な、かつ実践的な研究方法である。	
	生徒指導論（進路指導を含む）	近年、児童・生徒の学校不適応や問題行動が多発し、生徒指導の果たす役割が一層重要になってきており、教員には生徒指導に関する知見や指導力の一層の向上が求められている。本講座では、生徒指導の基本的事項について理論と実践の両面から学んでいきたい。授業は、講義とテキストを中心とした発表・討議を併用する。	
	教育相談	不登校、いじめ、非行問題に教師が適切に対応していくためには、教育相談（学校カウンセリング）を学級活動や生徒指導に採り入れることが重要である。本講義では、基礎的なカウンセリング理論の習熟と、学校場面における具体的な応用について考えていく。本講義の構成は、（1）初期は学校における教育相談の概論とカウンセリングの基礎技法を学び、（2）中期は代表的カウンセリングの諸理論を習得し、（3）末期は予防的なカウンセリング支援や生徒・保護者への関わりについて事例を織り交ぜ、実践方法を検討する。講義形式は、授業内容を概略したプリントを配布し、ビデオ・OHP教材も用いる。講義の間には、フォーカシング等の個人ワークや討論等の小グループ・ワークを導入する。また、受講者が内省的に考えていく過程が大切であるので、期間中、適時3回、講義終了20分前に課題に対する「感想レポート」を作成する。	
	総合演習	教育課程の柱の一つである「総合的な学習の時間」に対する理解を深めると共に各自が課題を設定して調査研究活動を行う。また、それらを生徒に指導するための指導法や指導形態を含めた指導案の作成、模擬授業を実際に行い、実践的取り組みとしたい。最終的には各自の調査研究をレポートにまとめ発表する。	
	介護等体験実習	「介護等体験実習」は原則として特別支援学校で2日間、社会福祉施設等で5日間、併せて7日間にわたり障害を持つ方や高齢者をはじめとする施設利用者に対する介護・介助の実際を見聞し体験する実習である。これらの貴重な体験を積むことによって個人の尊厳、社会連帯の重要性を認識し、教員としての資質の向上に役立てるものである。	
	教育事前事後実習	4年生で実習する学校現場実習のための事前指導である。指導は、本学教職担当者以外に、県・市教育行政機関職員、中・高等学校教員等、外部の専門家を招いて実施する。	
	教育実践実習Ⅰ	「教育実践実習」は、教職課程の履修の総まとめとして、中学校・高等学校において行われる現場実習である。「教育実践実習Ⅰ,Ⅱ」には、現場実習が開始される前に開催される直前講義・実習、千葉県及び千葉市教育委員会の先生方招いての本年度教員採用試験説明会、教育実習終了後（後期）に実施される事後指導が含まれる。	
	教育実践実習Ⅱ	「教育実践実習」は、教職課程の履修の総まとめとして、中学校・高等学校において行われる現場実習である。「教育実践実習Ⅰ,Ⅱ」には、現場実習が開始される前に開催される直前講義・実習、千葉県及び千葉市教育委員会の先生方を招いての本年度教員採用試験説明会、教育実習終了後（後期）に実施される事後指導が含まれる。	

（注）

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。